浦添市文化財調査報告書

勢理客城門原古墓群

－沖縄食糧株式会社敷地内造成工事に伴う発掘調査報告書－

2012（平成24）年3月

沖縄県 浦添市教育委員会

巻頭１　勢理客城門原古墓群：発掘調査区北西側（北より）

巻頭２　勢理客城門原古墓群：発掘調査区南東側（東より）

巻頭3　10号墓出土　厨子甕蓋

巻頭4　10号墓出土　厨子甕蓋

巻頭5　10号墓出土　厨子甕蓋

巻頭6　10号墓出土　厨子甕蓋

巻頭7　10号墓出土　厨子甕（ボージャー）

巻頭8　10号墓出土　厨子甕（ボージャー）

巻頭9　1号墓出土　厨子甕（転用品：沖縄産）

巻頭10　16号墓出土　厨子甕（転用品：宮古式土器）

（本文）

序

本報告書は平成２２年度に沖縄食糧株式会社から業務委託を受けて実施した同社敷地内の造成工事地内に所在する勢理客城門原古墓群の緊急発掘調査の成果をまとめたものです。

勢理客城門原古墓群は、市の西部を流れる小湾川河口に面した丘陵の斜面に位置しています。近隣には、かつての勢理客、小湾、仲西、安謝の各集落があり、この一帯が古くから墓域として利用されていたことがわかります。

今回の調査で発掘された古墓からは墓の構造・形態等についての貴重なデータを得ることができました。また、それぞれの墓からは陶製・石製の蔵骨器や陶磁器、煙管、銭貨などの遺物が出土し、被葬者や納骨された年代などの貴重な情報を得ることができました。出土した人骨の分析では、近世琉球人の形質や、個々の特徴などの一端を浮かび上がらせることができました。

本報告書が文化財に対する認識と理解を深めるとともに、沖縄の葬制・墓制並びに地域の歴史研究など学術研究の一助として多方面に活用頂ければ幸いです。

発掘調査及び資料整理にあたり、多大なるご指導、ご協力を頂きました関係各位に対して深く感謝申し上げます。

最後に事業主の沖縄食糧株式会社におかれましては、発掘調査全般にわたり多大なるご配慮、ご協力を賜り、おかげさまをもちまして多くの成果を得ると共に順調に調査を完了することができました。衷心より深く感謝申し上げます。

平成２４年３月

浦添市教育委員会
教育長　津波　清

例　　言

1．本書は、浦添市字勢理客に所在する勢理客城門原古墓群の発掘調査成果を収録したものである。
2．発掘調査は沖縄食糧株式会社が計画する同社敷地内の造成（駐車場建設）工事に伴うもので、同社から委託を受け、浦添市教育委員会が実施した
3．現地調査は平成 22 年 12 月 1 日に着手し、平成 23 年 1 月 27 日に完了した。一部業務を発掘支援業務として株式会社ティガネーに委託した。
4．平成 23 年度も資料整理作業を実施し、出土遺物の実測や出土人骨の同定・計測作業を行った。下記の整理作業を発掘支援業務として委託した。
　・蔵骨器の遺物実測、トレース、写真撮影等：株式会社パスコ沖縄支店
　・蔵骨器以外の出土遺物のトレース、写真撮影等：株式会社アーキジオ沖縄
5．資料整理にあたり、次の方々から指導・助言を頂いた。記して感謝申し上げます。（五十音順、敬称略）
　倉成 多郎（那覇市立壺屋焼物博物館）　鈴木 悠（浦添市立図書館）
　輝　広志（南城市教育委員会文化課市史編さん係）　仲宗根 求（読谷村立歴史資料館）
　長濱 健起（宜野湾市教育委員会）　福地 有希（琉球大学附属図書館）
6．本書の編集にあたっては、各墓ごとに本文、遺構の実測図・表、出土遺物などを記した。
7．掲載遺物は、原則として各墓ごとに一連番号を付し、遺物番号とした。
8．本書の執筆を以下のように分担した。編集は渡久地政嗣、仲宗根久里子が行った。
　第１章・第３章（遺構）・第５章　渡久地 政嗣
　第２章　玉榮 飛道
　第３章（遺物）　仲宗根 久里子　玉榮 飛道
　第４章　菅原 広史
9．本調査に係わる写真、実測図など一切の調査記録は、浦添市教育委員会において保管している。

凡　　例

1．本書に表示した基準高はすべて海抜高を用い、メートル単位で表した。
2．座標は世界測地系を用いた。
3．遺構平面図に記した方位針は座標北を示す。
4．遺構断面図を作成した位置については、遺構平面図に横断ラインで示す。
5．遺構図の作成については 1/60 を基本スケールとする写真測量で行った。
6．遺物実測図の縮尺については、蔵骨器は 1/6 スケールを基本とし、その他の遺物は大きさに応じて 1/2 スケールから原寸大までを使い分けた。
7．本書で用いた墓の各部名称については次頁のとおりである。蔵骨器の各部名称と計測位置などは、浦添市教育委員会刊行の浦添市文化財調査研究報告書第 25 集『伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者』（1997 年）を参考にしている。詳細は次頁のとおりである。

目　　次

序　　浦添市教育委員会　教育長　津波　清

例　言

凡　例

目　次

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯 ……… 1

第２節　調査体制 ……… 1

第３節　調査経過 ……… 2

第２章　位置と環境

第１節　遺跡の位置 ……… 3

第２節　遺跡の自然的・地理的環境 ……… 4

第３節　遺跡の歴史的環境 ……… 4

第３章　調査成果

第１節　調査の概要 ……… 6

第２節　１号墓 ……… 11

第３節　10 号墓 ……… 23

第４節　16 号墓 ……… 37

第５節　その他の墓の出土遺物 ……… 48

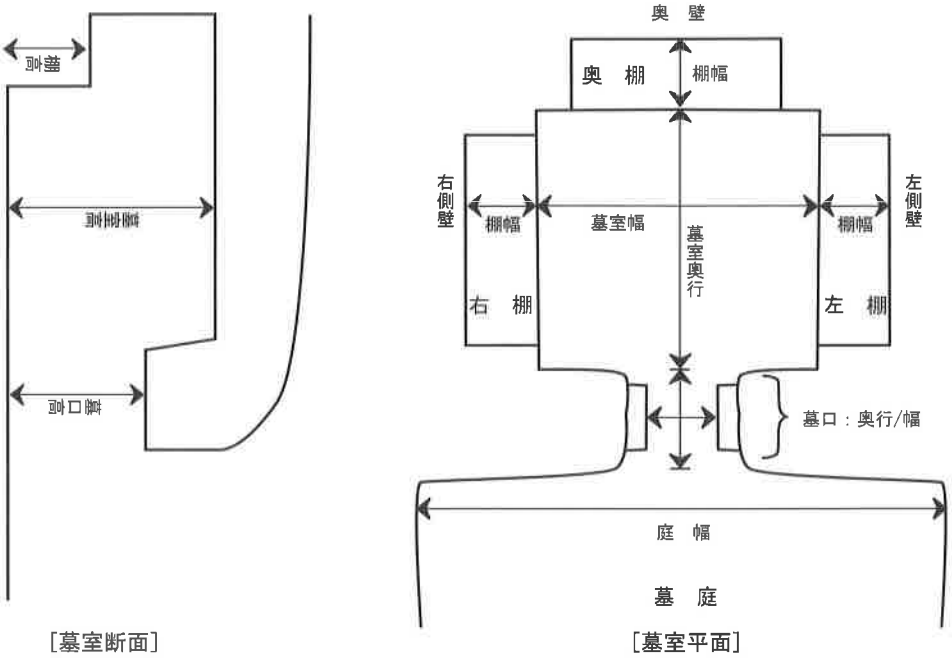
第４章　勢理客城門原古墓群出土の人骨 ……… 58

第５章　おわりに ……… 70

写真図版

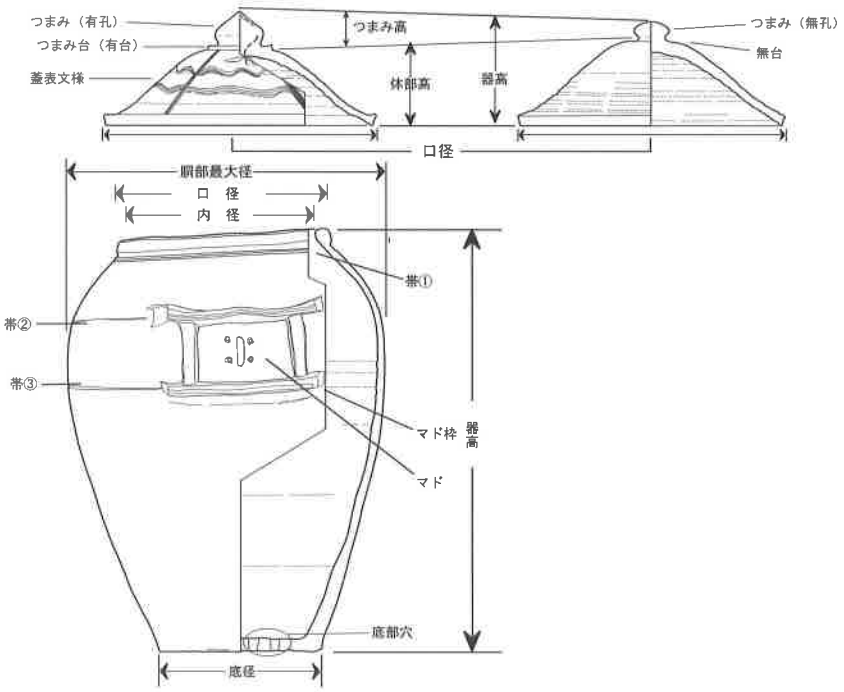
報告書抄録

［墓室・墓口・墓庭の計測位置］

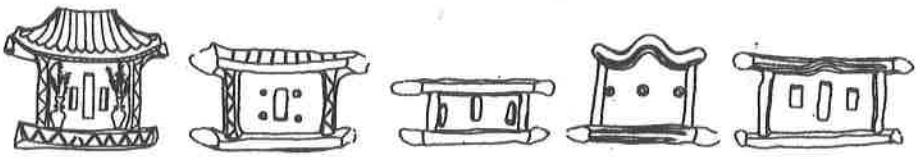


［墓室断面］　　［墓室平面］

［ボージャー厨子の部位名称と計測位置］



［マド枠とマドの分類］



寄棟形
1方2方

平葺形
1方4円

平葺形
1方2方

唐破風形
1円2円

唐破風形
1方2方

挿図目次

第1図　勢理客城門原古墓群の位置と周辺の文化財　3
第2図　各墓の位置図・・・・・・・・・・・・・・・・7
第3図　1号墓墓室横断見通し図（遺物有り）・・11
第4図　1号墓遺構図・・・・・・・・・・・・・・・12
第5図　1号墓出土遺物1・・・・・・・・・・・・19
第6図　1号墓出土遺物2・・・・・・・・・・・・20
第7図　1号墓出土遺物3・・・・・・・・・・・・21
第8図　1号墓出土遺物4・・・・・・・・・・・・22
第9図　10号墓墓室横断見通し図（遺物あり）・23
第10図　10号墓遺構図・・・・・・・・・・・・・・24
第11図　10号墓出土遺物1・・・・・・・・・・・・30
第12図　10号墓出土遺物2・・・・・・・・・・・・31
第13図　10号墓出土遺物3・・・・・・・・・・・・32
第14図　10号墓出土遺物4・・・・・・・・・・・・33
第15図　10号墓出土遺物5・・・・・・・・・・・・34
第16図　10号墓出土遺物6・・・・・・・・・・・・35
第17図　10号墓出土遺物7・・・・・・・・・・・・36
第18図　16号墓遺構図・・・・・・・・・・・・・・38
第19図　16号墓出土遺物1・・・・・・・・・・・・44
第20図　16号墓出土遺物2・・・・・・・・・・・・45
第21図　16号墓出土遺物3・・・・・・・・・・・・46
第22図　16号墓出土遺物4・・・・・・・・・・・・47
第23図　転用蔵骨器（パナリ焼）・・・・・・・・49
第24図　沖縄産陶器・土製品・・・・・・・・・・50
第25図　青花・瑠璃釉・本土産時期・近現代磁器　51
第26図　銭貨・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
第27図　ガラス玉・・・・・・・・・・・・・・・・53
第28図　指輪・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
第29図　煙管・金属製品・・・・・・・・・・・・55
第30図　ガラス製品・・・・・・・・・・・・・・56

挿表目次

第1表　出土遺構一覧表・・・・・・・・・・・・・8
第2表　出土遺物一覧・・・・・・・・・・・・・・10
第3表　1号墓出土蔵骨器（身）観察表・・・・・・16
第4表　1号墓出土蔵骨器（身）観察表・・・・・・17
第5表　1号墓出土蔵骨器（蓋）観察表・・・・・・17
第6表　1号墓出土ガラス玉・金属製品観察・・・・17
第7表　1号墓出土ガラス玉・金属製品・・・・・・18
第8表　1号墓出土銭貨観察表・・・・・・・・・・18
第9表　10号墓出土蔵骨器（身）観察表・・・・・28
第10表　10号墓出土蔵骨器（身）観察表・・・・・29
第11表　10号墓出土蔵骨器（蓋）観察表・・・・・29
第12表　16号墓出土蔵骨器（身）観察表・・・・・42
第13表　16号墓出土蔵骨器（蓋）観察表・・・・・43
第14表　出土遺物観察表（銭貨）・・・・・・・・・52
第15表　出土遺物観察表（銭貨）・・・・・・・・・53
第16表　出土遺物観察表（簪）・・・・・・・・・・54
第17表　出土遺物観察表（釘）・・・・・・・・・・54
第18表　出土遺物観察表（釘）・・・・・・・・・・56
第19表　勢理客城門原古墓群出土人骨一覧・・・64
第20表　年齢・性別構成及び最小個体数一覧・・66
第21表　上顎骨及び下顎骨残存歯の観察表・・・67
第22表　頭蓋骨及び下顎骨観察表・・・・・・・68
第23表　変異等一覧・・・・・・・・・・・・・・69

写真図版

巻頭1　勢理客城門原古墓群：発掘調査区北西側（北より）
巻頭2　勢理客城門原古墓群：発掘調査区南東側（東より）
巻頭3　10号墓出土　厨子甕蓋
巻頭4　10号墓出土　厨子甕蓋
巻頭5　10号墓出土　厨子甕蓋
巻頭6　10号墓出土　厨子甕蓋
巻頭7　10号墓出土　厨子甕（ボージャー）
巻頭8　10号墓出土　厨子甕（ボージャー）
巻頭9　1号墓出土　厨子甕（転用品：沖縄産）
巻頭10　16号墓出土　厨子甕（転用品：宮古式土器）

図版 1　調査地遠景：上空から
調査前状況（伐採後：北から）
図版 2　1 号墓　遺構完掘状況
1 号墓　墓口左側面のホゾ穴検出状況
図版 3　1 号墓　墓室内蔵骨器検出状況
1 号墓　墓室内奥棚の完掘状況
図版 4　10 号墓　遺構完掘状況
10 号墓　墓室内蔵骨器検出状況 1（床面）
図版 5　10 号墓　墓室内蔵骨器検出状況 2（奥棚）
10 号墓　墓室内蔵骨器検出状況 3（左棚）
図版 6　16 号墓　遺構完掘状況
16 号墓　墓室内遺物検出状況
図版 7　16 号墓　墓室奥壁完掘状況（正面より）
16 号墓　墓室奥壁完掘状況（左側面より）
図版 8　2 号墓　遺構完掘状況
2 号墓　墓室入口の溝状の凹み検出状況
2 号墓　墓室内遺物検出状況
2 号墓　墓室内完掘状況
3 号墓　遺構完掘状況
3 号墓　墓室入口の小穴完掘状況
3 号墓　墓室入口の溝状の凹み検出状況
3 号墓　墓室入口のホゾ穴検出状況
図版 9　3 号墓　墓室内左側壁の完掘状況
4 号墓（奥）・5 号墓（手前）　遺構検出状況
4 号墓　遺構検出状況
4 号墓　墓室内遺物出土状況
5 号墓　遺構検出状況
5 号墓　墓室内遺物出土状況
5 号墓　墓室入口の溝状の凹み検出状況
5 号墓　墓室内の完掘状況
図版 10　6 号墓（中央）・7 号墓（手前）　遺構検出状況
6 号墓　墓室内の遺構掘削作業状況
6 号墓　墓室奥壁の礫検出状況
6 号墓　墓室内の完掘状況
7 号墓　遺構完掘状況
7 号墓　墓室内蔵骨器出土状況
7 号墓　墓室内埋納遺構検出状況
8 号墓（中央）・9 号墓（手前）　遺構検出状況
図版 11　8 号墓　遺構検出状況
8 号墓　墓室内蔵骨器出土状況
8 号墓　墓室右側壁下の小穴検出状況
8 号墓　小穴内の焼骨検出状況
9 号墓　遺構検出状況
9 号墓　墓室内完掘状況
9 号墓　墓室内棚の蔵骨器検出状況
11 号墓（右）・12 号墓（中）・13 号墓（左）　発掘調査状況
図版 12　11 号墓　遺構検出状況
11 号墓　遺構検出作業状況
11 号墓　墓室内完掘状況
11 号墓　墓室内埋納遺構検出状況（中央：炭、右：ブタ頭骨）
11 号墓　墓室内埋納遺構検出状況（ブタ頭骨）
12 号墓　遺構検出状況
12 号墓　墓室内完掘状況
12 号墓　墓室右側壁下の掘込遺構と蓋石検出状況
図版 13　13 号墓　調査前の状況
13 号墓　遺構完掘状況
13 号墓　墓室内床面造成状況
13 号墓　墓室内埋納遺構検出状況
14 号墓　遺構の調査前状況
14 号墓　墓室内蔵骨器検出状況
15 号墓　調査前の状況
15 号墓　遺構完掘状況
図版 14　1 号墓出土遺物（1）
図版 15　1 号墓出土遺物（2）
図版 16　1 号墓出土遺物（3）
図版 17　1 号墓出土遺物（4）銭貨
図版 18　10 号墓出土蔵骨器（1）
図版 19　10 号墓出土蔵骨器（2）
図版 20　16 号墓出土遺物（1）
図版 21　16 号墓出土遺物（2）
図版 22　16 号墓出土遺物（3）
図版 23　パナリ焼（1）・沖縄産陶器（2～5）・土製品（6）・
青花（7）・瑠璃釉（8）・本土産磁器（9～10）・
近現代磁器（11）
図版 24　銭貨（1～9）・ガラス玉（10）・金属製品（11）
図版 25　金属製品・ガラス製品

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

今調査は、大字勢理客小字城門原に所在する沖縄食糧株式会社の敷地内において、同社の駐車場造成工事中に埋蔵文化財（墓）が確認されたことに起因する。工事概要については、小湾川に面する細長い石灰岩小丘陵を全て削平し、隣接する同社駐車場を川縁りまで拡張（工事範囲：約 2,100 ㎡）するもので、工期は平成 22 年 10 月５日～平成 23 年２月 23 日である。工事を請け負った株式会社国場組が同丘陵の伐採作業を行ったところ、丘陵北側斜面において横穴多数と蔵骨器を確認したことから、10 月 29 日付けで市教育委員会へ現地確認の依頼があった。

市教育委員会は 11 月４日に文化財担当職員を派遣し、関係者立会いの下で同工事区域内の現地踏査を行い、少なくとも 15 基の古墓を確認（後に１基増加し、合計 16 基）し、そのうち幾つかの墓室内で蔵骨器を確認した。

踏査結果を踏まえて同月、当該工事区域に文化財（古墓群）が所在する旨の回答及び取り扱い協議の依頼を沖縄食糧株式会社へ行い、あわせて遺跡発見の届出を県教育委員会あて提出した。当該文化財の取り扱いについて沖縄食糧株式会社と市教育委員会で協議した結果、当該工事がすでに実施中であること、当該地に代替する駐車場用地の選定が困難であることの理由により記録保存調査を実施することとなり、具体的な発掘調査の範囲と期間、費用等にかかる協定書が締結された。

前述の協定を経て平成 22 年 11 月 18 日付で沖縄食糧株式会社と市教育委員会との間で発掘調査の実施にかかる委託契約が締結された。

第２節　調査体制

調査体制は以下のとおりである。

調査主体	浦添市教育委員会	教育長	西原 廣美	（平成 22 年度～23 年８月）
			津波　清	（平成 23 年 10 月～）
事業所管	〃	文化部　部　長	下地 安広	
事業総括	〃	文化課長	當間 眞栄	
事業調整	〃	文化課文化財係長	宮里 信勇	（平成 22 年度）
	〃	〃	松川　章	（平成 23 年度）
事業事務	〃	〃　臨時職員	名渡山 俊幸	（平成 22 年度）
	〃	〃　主　事	松田 奈津子	（平成 23 年度）
	〃	〃　臨時職員	當間 弘子	（平成 23 年度）
	〃	〃　主任主事	渡久地 政嗣	
調 査 員	〃	〃　主任主事	渡久地 政嗣	
	〃	〃　主任主事	仲宗根 久里子	
	〃	〃　嘱託職員	玉榮　飛道	

発掘支援業務委託　有限会社ティガネー（平成 22 年度）

遺物実測等業務委託　株式会社パスコ沖縄支店、株式会社アーキジオ沖縄（平成 23 年度）

第３節　調査の経過

○平成 22 年 11 月

現地発掘調査の実施にあたり、発掘支援業務の業務委託契約を株式会社ティガネーと締結した。契約締結後、現場作業に関する事前の打合せ等を行った。

○平成 22 年 12 月 1 日～12 月 6 日

現地発掘調査は、平成 22 年 12 月 1 日に着手し、調査前の現況撮影を行った。事前の磁気探査や赤土流出対策は工事途中ということもあり、すでに開発者側で実施済みであったことから、直ぐに丘陵中腹に重機搬入路を仮設し、１号墓から順次、重機と人力にて表土除去作業を行っていった。

また、並行して現場事務所や発掘調査機材の搬入などの準備作業を行った。

○平成 22 年 12 月 7 日～12 月 28 日

重機・人力による表土除去作業の進行に従って各墓の輪郭がやや見えてきた。作業と並行して順次、墓の外観や墓室について現況の写真撮影を行う。撮影後は発掘作業員による墓ごとの人力掘削へと移行し、遺構各部の精査、遺物の検出作業を慎重に実施した。検出された遺構、遺物は適宜、遺構細部や遺物出土状況等の写真撮影を行った。

遺構検出作業が各墓で進捗する中、12 月 9 日からは、遺物の出土が僅かな墓から出土遺物の取り上げ作業と完掘状況の写真撮影を行った。引き続き遺構図及び遺物出土状況図等の実測作業（写真測量）を並行して実施した。この期間中は天候に恵まれ、発掘作業は順調に進捗した。

12 月 28 日には現場の撤収作業を行い、現地調査を完了、現場の引渡しを行った。

○平成 23 年 1 月 19 日～1 月 26 日

現場引渡し後、造成工事が再開されたが、早々に工事関係者から新たな墓を発見したとの通報を受け、踏査したところ、工事区域外の隣接箇所で墓１基を確認した。将来的に工事区域となるとのことで当墓についても依頼を受け、新たに第 16 号の墓番号を付し追加調査を実施した。

追加調査を含む一連の調査は同社および工事関係者の協力の下、順調に進捗し、1 月 26 日をもって現地調査を完了した。

○平成 23 年 1 月 5 日～2 月 27 日

屋内にて資料整理作業に移行した。出土遺物は、洗浄作業を行った後、屋内作業員を任用し接合、遺物実測作業を行った。

○平成 23 年 4 月～12 月

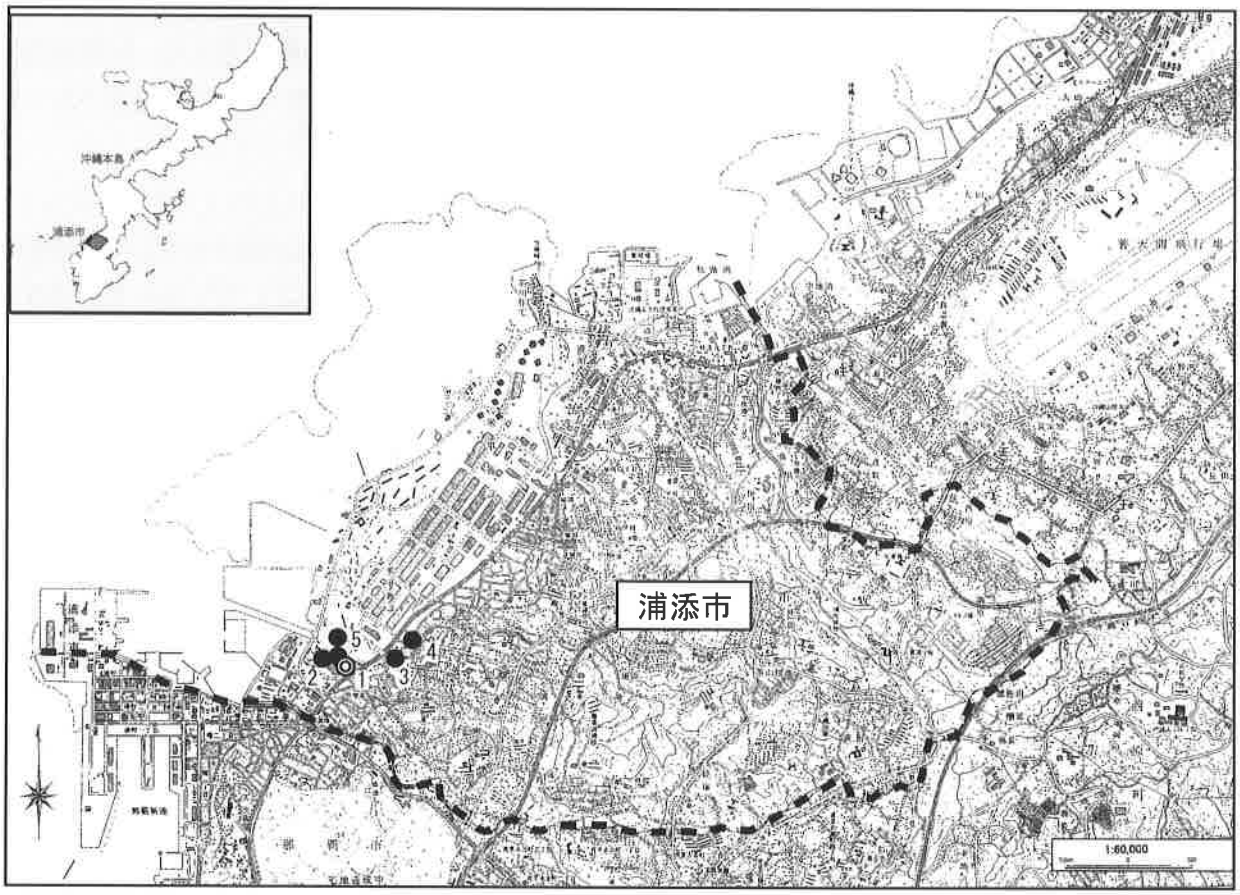
主要な蔵骨器の実測、トレース及び写真撮影等に関しては株式会社パスコ沖縄支店に委託した。また蔵骨器以外の遺物は、トレース及び写真撮影等を株式会社アーキジオ沖縄に委託した。これらの業務に並行して報告書の原稿作成を行った。

第２章　位置と環境

第１節　遺跡の位置

勢理客城門原古墓群が所在する浦添市は沖縄本島中部西海岸に位置し、県都である那覇市の北に隣接する。本市は那覇市の他に、北に宜野湾市、東に西原町、西は東中国海に面している。市域は東西8.4km、南北 4.6km、総面積 19.09k ㎡を測り、人口約 111,524 人を擁する（平成 23 年 11 月現在）。市西部に国道 58 号、中央部に国道 330 号、東部に沖縄自動車道があり、主要交通路が縦貫している。海浜部には、市域の約 16%を占める米軍牧港補給地区（キャンプキンザー）がある。

本市の地形は、標高約 40m前後でほぼ二分されており、東部は島尻層群の泥岩と砂岩が分布する起伏の小さな丘陵と浅い谷が連なる波浪状の丘陵地、西部は東中国海に面する海成段丘や海浜堆積物が分布する海岸低地といった地形となる。北部には北西から南東方向に標高 120～130mの浦添断層崖が形成されており、本市の最高点 138.4m（国指定史跡浦添城跡内）となっている。それらの丘陵を分水嶺に北流する牧港川、シリン川、西流する小湾川、安謝川の四河川はいずれも東中国海に注いでいる。海岸線には沖合いにかけて広大な珊瑚礁が広がっている。植生は市全域が沖縄戦の際に焼け野原となったため、現在見られる植生は二次林となっている。また、開発行為によってまとまった植生も少なくなっており、植生の面積も狭くなっている。



1. 勢理客城門原古墓群　2. グスクジョー　3. 勢理客橋　4. 仲西貝塚　5. 小湾遺跡

第１図　勢理客城門原古墓群の位置と周辺の文化財

第２節　遺跡の自然的・地理的環境

本遺跡は、浦添市字勢理客小字城門原に所在する。字勢理客は、小湾川と安謝川にはさまれた台地上および小湾川沿いの南側丘陵（低位段丘）の段丘崖と海岸低地にかけて位置している。勢理客の北側を流れる小湾川は断層によって形成された傾動地塊が原因となってできた河川であるといわれており、旧地名や伝承などからかつては清流であったことが知られている。また、安謝川は、勢理客の南側を流れており、河口付近は低潮時に泥質の干潟となる。

小字城門原は字勢理客の西端に位置しており、字勢理客勢理客原、字小湾アス原、字小湾城門原、那覇市安謝が隣接する。城門原の北には小湾川、南には安謝川が流れている。本遺跡の周辺には北に米軍牧港補給地区、南に沖縄食糧株式会社の事務所・工場・倉庫、東に国道 58 号、西に西洲工業団地（埋立地）などがある。

本遺跡は城門原の北側、小湾川沿いの南側段丘崖に位置する。調査地内の地層は琉球層群（那覇石灰岩）を基盤とする。昭和 20 年の米軍航空写真では小湾川に沿った細長い小丘陵となっており、古墓群はいずれも石灰岩の岩盤を掘り込んで構築されている。本遺跡の標高は 14～20m である。

第３節　遺跡の歴史的環境

勢理客の地名について、17 世紀中頃の文献資料である『琉球国高究帳』では「ぜっかく村」、『琉球国絵図郷村帳』では「せつかく村」、『琉球国由来記』には「勢理客」・「勢里客」の表記が見られる。国頭街道が字域の中央を縦貫しており、小湾川下流の国頭街道上には勢理客橋が架かる。元は石造橋で、現在はコンクリート橋となっている。勢理客橋の近くには「勢理客橋碑」が復元・建立されている。

本遺跡が所在する一帯は城門原（グスクジョウバル）と呼ばれる地域である。海岸に面する崖上には「グスクジョー」（又は城門御嶽　以下、グスクジョー）と呼ばれる拝所が存在していた。『琉球国由来記』に勢理客の「コバ森（又は久場森）」の記述が見られ、この「コバ森」はグスクジョーをさしていると考えられている。戦前までグスクジョーにはソテツなどが生い茂っており、海と川を面する崖上に低い石積みが見られ、石積みの内側に拝所（イビ）が見られ、崖下周辺には古代人骨の収納墓などが見られたという。また、この拝所は海に向かって拝むものであったといわれている。『琉球国由来記』にはコバ森や後述する勢理客之殿（トゥン）で行われる祭祀は仲西ノロが司ったという記述がみられ、殿に関する記述と併せて祭祀の際の供物に関する記述も見られる。また、ノロ以外にもコデ（門中内の宗教的職能者）もグスクジョーでの祭祀に関わっていたようである。グスクジョー以外に城門原では、火神（ヒヌカン）や勢理客之殿（トゥン）といった拝所が見られ、ノロは火神を拝した後にグスクジョーを拝んだといわれている。また、グスクジョー付近に勢理客の旧集落が存在したという古老の話も伝わっている。

近世の文献記録には祭祀に関すること以外に、城門原に農地や塩田を興した記録も見られる。『球陽』などの史料には道光 16（1836）年に首里王府の指導のもとに城門原の下の低湿地（潟）を干拓し、水路を設置して水田などの農地を興し、水田を石で囲ったと記されている。但し石積みは咸豊 5（1855）年に王府の命令によって除かれ、旧地形に復旧したようである。昭和 10 年代の土地利用では、調査地付近は「山林・原野・雑種地」として区分されている。昭和 11（1936）年には土地改良事業などが行われて低地に水田や貯水池などができ、戦後には昭和 11 年に造られた水田跡を利用した塩田が営まれていたようである。

勢理客住民（明治 34 生）の証言によると本遺跡がある城門原北端の石灰岩丘陵は字勢理客の墓地地域であった。ガンヤー（龕屋）もあったという。

太平洋戦争末期、沖縄戦必至の情勢が伝わると村民らの手によって村内の各拝所の香炉がグスクジョーに集められ隠匿された。また、住民証言では小湾川沿いに多数の住民が避難していたという。

昭和 20（1945）年４月 28 日、港川・伊祖方面での戦闘を終えた米軍は、那覇地区への侵攻を図って南下、戦車を伴って小湾川に近い線まで進撃してきた。小湾付近に布陣していた第 62 師団独立歩兵第 15 大隊第４中隊が死守命令を受けて応戦し 30 日には城門原まで後退した。５月１日頃には松田中隊長が戦死し、部隊の大半が死傷したという。戦後、城門原一帯は米軍の駐留軍用地として接収され、全村民が米軍仲間収容所に収容された。住民が旧居住地へ帰還を許可されるのが昭和 21 年から 22 年である（駐留継続地内の住民を除く）。昭和 29（1954）年、勢理客城門原一帯が米軍から返還され、那覇市久茂地一丁目にあった沖縄食糧株式会社が同地に移転し、現在に至っている。

本遺跡の周辺の文化財として、東に縄文時代後期～晩期頃の「カヤウチバンタ式土器」が出土した仲西貝塚、北に弥生時代並行期の小湾遺跡、北西に勢理客の龕屋（ガンヤー）跡、西には勢理客の拝所跡（殿（トゥン）、火乃神（ヒヌカン））やチンガー跡などがみられる。

参考文献・引用文献

・浦添市ホームページ（平成 23 年 11 月閲覧）

・浦添市教育委員会 1990　『浦添市文化財悉皆調査報告書』

・浦添市教育委員会 1986　『浦添市史　第六巻資料編５　自然・考古・産業・歌謡』

・浦添市教育委員会 1981　『浦添市史　第二巻資料編１　浦添の文献資料』

・外間守善・波照間永吉編 1997　『定本　琉球国由来記』　角川書店

・浦添市教育委員会 1983　『うらそえの文化財－民俗文化財分布調査－』

・浦添市教育委員会 1988　『浦添の地名』

・浦添市教育委員会 1981　『浦添市史　第二巻資料編１　浦添の文献資料』

・浦添市教育委員会 1984　『浦添市史　第五巻資料編４　戦争体験記録』

・沖縄食糧株式会社 1981　『沖縄食糧五十年史』

・角川書店 1986　『角川日本地名大辞典　47　沖縄県』

・平凡社 2002　「沖縄県の地名」『日本歴史地名大系』第四八巻

第３章　調査成果

第１節　調査の概要

今回の調査では、合計 16 基の墓が検出されたが、調査時に密閉された墓はなく、全て墓口が空いているか墓正面の石灰岩盤や石積みがかなり損壊し、多くの土砂が流入している状況であった。調査を進める中で沖縄戦での砲撃により損壊したものであることが判明したが、このような状況であったにも関わらず、蔵骨器をはじめとする多くの遺物が出土している。本章では、これらの墓と出土遺物の概要を記述し、次に遺構と遺物の残存状況が良好な墓について、その調査成果を報告することとする。なお、損傷の激しい墓や遺物が少ない墓については、本節の第２表出土遺構（墓）一覧表および巻末の写真図版をもって報告とすることとした。

（１）遺　構

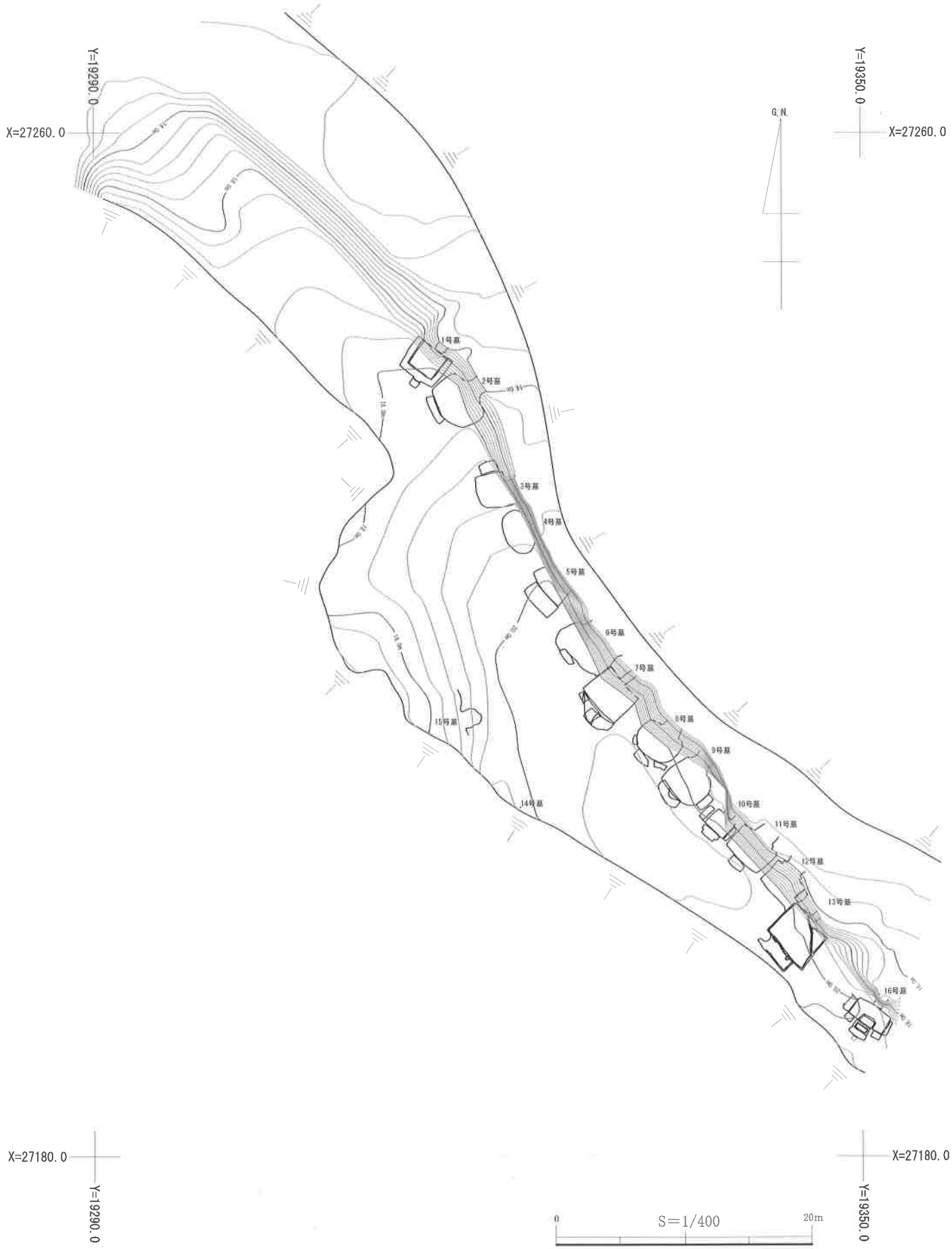
調査区内に所在する墓は、全て基盤である琉球石灰岩を掘り込み、各部を削り出して造られる掘込墓であるが、いくつかの墓の正面には石積みがみられるものがある。各墓については外観や墓室の形状から以下のタイプが確認できる。

Ⅰ類：墓室平面形は方形を基本とし、墓室開口部から墓室奥壁までストレートに掘り込む墓である。墓室内には凸状の棚を設ける。墓室開口部には、ホゾ穴がみられることから閉塞には木材を用いたものとみられる（３号墓・５号墓）。このうち５号墓では墓正面を石積みで塞いで羨道を設けており、後に改修された可能性が考えられた。

Ⅱ類：墓室平面形は角が無く、楕円形に近いもので墓室内には凸状の棚を設けるものが多い。墓室開口部は正面中央に窄めて造り、閉塞のために木柱を差し込む溝があるもの（２号墓）や石積みで塞ぐもの（４号墓・８号墓）がみられる。

Ⅲ類：墓室に明確な羨道や庭を設ける破風墓や平葺墓の要素を持つ墓。墓室平面形は横長の方形で凸状の棚やコの字状の棚を設ける。基本的に墓全体を岩盤削り出しで造るが、羨道部を岩盤削り出しで造る墓（１号墓・10 号墓・16 号墓）と羨道部を石積みで仕上げる墓（７号墓・11 号墓）がみられる。

Ⅳ類：墓室の平面形は角が無く、楕円形に近い。墓室開口部は石積みで閉塞するが、全体に簡素で小規模な造りで棚は設けない。(15 号墓)。


Y=19290.0
X=27260.0
Y=19350.0
X=27260.0
G.N.
1号墓
2号墓
3号墓
4号墓
5号墓
6号墓
7号墓
8号墓
9号墓
10号墓
11号墓
12号墓
13号墓
14号墓
15号墓
16号墓
X=27180.0
Y=19290.0
X=27180.0
Y=19350.0
0
S=1/400
20m

第２図　各墓の位置図

第1表　出土遺構一覧表

墓番号	外観形式	墓口						墓室						墓庭	備考
		構造	法量(m)			ホゾ穴	柱設置痕	墓室(㎡)	法量(m)			蔵骨器の有無	棚	袖	
			高さ	幅	奥行				高さ	幅	奥行				
1号墓	堀込墓	基盤掘込	1.53	0.66	0.66	○	×	9.0	1.60	3.34	2.70	○	コ字状	○	基盤である石灰岩を掘り込む墓。遺構の残存状況は良好。墓室は横長の方形でコの字状の棚一段を造り、奥壁中央に家型蔵骨器が安置可能な掘り込みを有する。墓口の側面上部にホゾ穴がみられることから木材で閉塞していたと推定。
2号墓	堀込墓	基盤掘込	1.70	1.30	0.90	×	○	12.3	1.78	4.18	2.94	○	凸状	○	基盤である石灰岩を掘り込む埋没墓。墓室形状は横長の隅丸方形で奥壁に凸状の棚を設ける。墓口左側面に木柱を設置する溝を筋状に掘り込む。墓室床面の右奥に蔵骨器破片や人骨片が集中。墓室右壁に砲弾の着弾痕が2ヶ所有る。
3号墓	堀込墓	基盤掘込	1.50	1.88	0.99	○	○	6.8	1.96	2.84	2.40	×	凸状	×	基盤である石灰岩を掘り込む墓。墓入口の左側面上部にホゾ穴があり、墓口床面にも柱の礎石及び柱穴を確認し、木材で墓口を閉塞していたと推測。墓室左側面にのみ凸状の棚を設ける。墓室右壁に砲弾の着弾痕(？)があり、4号墓へ貫通する。
4号墓	堀込墓	石列	－	－	－	－	－	7.7	1.62	3.50	2.20	○	×	×	基盤である石灰岩を掘り込む埋没墓。墓室の平面形は楕円形で右奥に不定形の横穴がある。墓口基部に30～50㎝大の閉塞石を設置。墓室床面から銅釘が多数出土。墓口に砲弾の着弾痕1ヶ所。
5号墓	堀込墓	石積ｼﾞｮｳｶﾌﾞｲ・ｼﾐｲｼ有り	1.85 (－)	2.70 (0.70)	1.70 (0.63)	○	○	5.2	1.85	3.07	1.70	○	凸状	×	基盤である石灰岩を掘り込む墓。墓室の平面形は横長の方形。墓室幅で掘り込み、奥壁に凸状の棚を設ける。墓入口の左側面上部にホゾ穴、右側面に木柱を設置する筋状の掘り込みを確認。構築当初は木材で閉塞し、その後に石積みへ改修したものと推測。墓室から大量の蔵骨器破片が出土し、銘書に「康熙」年間の記載が見られる。
6号墓	堀込墓	－	－	－	－	－	－	－	－	2.90	－	○	－	×	基盤である石灰岩を掘り込む埋没墓。墓室の平面形は横長の楕円形。戦時中に砲撃を受け、墓室正面および左壁が大きく崩落。
7号墓	堀込墓	石積ｼﾞｮｳｶﾌﾞｲ・ｼﾐｲｼ有り	0.88	(0.61)	1.08	－	－	9.9	1.02	3.60	2.75	○	凸状(祭壇状)	×	基盤である石灰岩を掘り込む埋没墓。墓室形状はやや横長の方形。奥壁に凸状の棚を設ける。墓口付近は良好に残存するが、戦時中に左側方から砲撃され、墓室左壁が崩落、奥壁に着弾痕を3箇所確認。墓室中央付近の小穴内に獣骨(ブタ頭部：1歳前後)と木炭・銭貨の埋納を確認。
8号墓	堀込墓	石積？	－	1.30 (－)	0.95	－	－	9.4	－	3.46	2.72	○	凸状(祭壇状)	×	基盤である石灰岩を掘り込む埋没墓。平面形状は横長の隅丸方形。奥壁に3つに区画された棚を設ける。墓口基部が一部残存しており、敷石状に石灰岩を並べる。戦時中の砲撃により左壁が崩落し、隣接する9号墓と繋がる。
9号墓	堀込墓	石積？	－	1.30	1.15	－	－	10.4	1.60	3.47	3.00	○	凸状	×	基盤である石灰岩を掘り込む埋没墓。奥壁及び右側壁に凸状の棚を設ける。奥壁下の床面中央の小穴に木炭の埋納有り。戦時中の砲撃により左壁が崩落。
10号墓	堀込墓	基盤掘込	0.98	0.62	1.10	×	×	2.8	1.73	1.84	1.52	○	凸状	○	基盤である石灰岩を掘り込む墓。墓室、墓庭、袖の残存状況は良好。正面上に眉らしき段差がある。
11号墓	堀込墓	石積ｼﾐｲｼ有り	－	1.50 (0.62)	1.09	－	－	8.3	－	3.46	2.40	○	凸状	×	基盤である石灰岩を掘り込む埋没墓。墓室形状は横長の長方形。奥壁に凸状の棚を設ける。墓室前部の左隅に獣骨頭部と炭が別々に埋納される。墓正面はほぼ崩落し、墓口周辺の石積みが僅かに残存。
12号墓	堀込墓	基盤掘込	－	0.64	0.82	－	－	6.8	－	2.90	2.34	×	×	○	基盤である石灰岩を掘り込む埋没墓。墓室形状は横長の長方形。墓室右側面に「イケ」と推定される掘り込みと蓋石を確認、内部に人骨が納められていた。墓正面はほぼ崩落、前壁基底部と墓口の石積みが僅かに残存。墓室右側面に13号墓へ貫通する通路を2ヶ所確認。戦時中に壕に転用か。
13号墓	堀込墓	基盤にｺﾝｸﾘｰﾄﾌﾞﾛｯｸ	0.70	0.62	0.62	－	－	12.6	1.60	3.95	3.20	○	凸状	○	基盤である石灰岩を掘り込む墓。戦後も使用され、コンクリートで補強した墓だが、墓室内部は堀込墓である。墓室は拡張された形跡があり、戦時中に壕に転用か。墓室床面は上から石粉、拳大の石の順に敷き詰め、石敷き内に獣骨(下顎骨)と木炭を埋納する。墓室基部外周に暗渠を巡らせる。
14号墓	堀込墓	－	－	－	－	－	－	－	－	3.25	－	○	×	×	基盤である石灰岩を掘り込む墓。丘陵の南西側斜面に位置するが同斜面は、既に垂直に切土造成され、墓口および墓室の一部が消滅。
15号墓	堀込墓	石積	－	1.34	－	×	×	1.6	－	1.38	1.15	○	×	×	基盤である石灰岩を掘り込む埋没墓。付近からは大量の蔵骨器と戦時中の防毒マスクや薬莢が出土。日本軍が使用した可能性が高い。
16号墓	堀込墓	基盤掘込	1.41	0.76	1.04	×	×	5.0	1.68	2.96	1.68	○	凸状(祭壇状)	○	基盤である石灰岩を掘り込む埋没墓。墓室、墓庭、袖など残存状況は良好。墓室形状は横長の長方形で墓室奥壁に3つに区画された棚を有する。中央の棚は更に奥に「イケ」と推定される堀り込みがみられる。

（2）遺　物

遺物は総計で7,953点が出土した。墓ごとの出土遺物の内訳については第3表にまとめた。主な出土遺物は蔵骨器であり、他に副葬品だと見られる陶磁器類や銭貨、簪や指輪、ガラス玉や煙管等が出土した。また、棺等の一次葬に伴う資料と見られる飾り金具や釘、木片の出土もあった。その他に、造墓時の祭祀に伴う遺構とされる墓室床面の小穴から獣骨と一緒に炭が出土しており、総数で314点の炭が得られている。

蔵骨器は6,984点出土し、全体出土数の87.8%と出土遺物の大半を占めている。全体の約9割を占めた蔵骨器で、蓋と身のセット関係が掴めたのは1号墓の石製家形蔵骨器が1点、16号墓の石製家形蔵骨器が1点、転用蔵骨器が1点であった。1号墓、10号墓、16号墓での蔵骨器の出土状況は、ほとんどの蔵骨器の蓋が移動または破損での出土であったため上述のような少数の把握となった。蔵骨器の分類名称は『銘苅古墓群Ⅰ』を参照とした。

出土蔵骨器の中で最も多いのは陶製無頸甕形蔵骨器（ボージャー厨子）である。完形と破片数をあわせた総数2,830点が出土し、蔵骨器の中で40%を占めている。ついで転用蔵骨器が総数2,565点（蔵骨器中36.7%）見られ、陶製有頸甕形蔵骨器（マンガン掛け）が総数1,409点（蔵骨器中20.1%）と続く。転用蔵骨器の内訳は、沖縄産陶器や宮古式土器、パナリ焼、褐釉陶器となり、これらの中で最も出土したのは総数2,231点の沖縄産陶器であった。沖縄産陶器は転用蔵骨器の中で86.9%と大部分を占めており、ついで宮古式土器の総数276点（転用蔵骨器中10.7%）と続く。宮古式土器は破片が268点得られたほか、完形で8点得られたことが特筆される。これら蔵骨器には墨書による銘書が確認できるものも多く出土した。銘書から「親雲上」や「筑登之親雲上」、「筑登之」や「仁屋」などの位階が確認できた。その他に「宮城村」「屋富祖村」「城間村」などの村名が確認できた。判読できた銘書では洗骨年や死去年等の年号が書かれている資料は少なく、洗骨月日及び村名と死者の氏名のみという事例が多い。墨書による銘書のほとんどは蓋の内面で確認されており、身の胴部で確認できた蔵骨器は1号墓のボージャー厨子1点、16号墓の石製家形蔵骨器1点、16号墓の転用蔵骨器（宮古式土器）1点の3点であり、そのほとんどはにじみにより判読不明であった。墨書の銘書以外には、線彫りでの銘書が1点見られ、10号墓出土のボージャー厨子で窓の下方に「仲上はんかなし」と確認できた蔵骨器があった。

蔵骨器以外の遺物は969点出土し、最も多く出土したのは副葬品と思われる銭貨で505点であった。1号墓から324点、6号墓から14点、7号墓から131点、16号墓から23点と出土し、その他に2号墓・4号墓・5号墓・8号墓から2～5点の出土が見られた。出土した銭の種類は崇寧重寶、洪武通寶、永樂通寶、寛永通寶、無文銭、半銭、不明銭の多種の銭貨が見られた。そのほかに副葬品と思われる瓶や徳利、簪、指輪やガラス玉などの装身具、煙管等が出土した。出土した瓶や徳利はいわゆる壺屋製と考えられる資料は少なく、喜名・知花焼や湧田焼、肥前系と思われる資料が出土している。棺等の一次葬に伴うものと思われる釘が1号墓から22点、2号墓から1点、4号墓から25点、10号墓から2点、12号墓から1点、16号墓から1点の計52点出土している。それらに伴うものか木片が1号墓、8号墓、10号墓、13号墓から計14点得られている。また、2号墓からはガラス製の瓶が2点出土している。その他に防毒マスクのフィルター、缶、スプーンなどが見られた。これらの資料は沖縄戦中から戦後にかけて持ち込まれたものと考えられる。

以上が遺物についての概要である。次章より遺構の残存状態が良好な墓である1号墓、10号墓、16号墓の遺構・出土遺物について報告する。

第２表　出土遺物一覧

種類				1号墓	2号墓	3号墓	4号墓	5号墓	6号墓	7号墓	8号墓	9号墓	10号墓	11号墓	12号墓	13号墓	14号墓	15号墓	16号墓	合計
蔵骨器	石製家形蔵骨器	身	完形	1															1	2
		蓋	完形	1															1	2
	陶製無頸甕形蔵骨器（ボージャー）	身	完形	2					4		1	1	18						6	32
			破片					549	523	332	387	151	185						37	2164
		蓋	完形					1	11	4	5	1	18						8	48
			破片					270	45	114	31	44	64						18	586
	陶製有頸甕形蔵骨器（マンガン掛け）	身	完形							1							4			5
			破片					270	284	261	31	335					6	27		1214
		蓋	完形							1	3	4	1				3		1	13
			破片					22	66	49	6	26						2	1	172
		部位不明	破片		3				1	1										5
	陶製軒付甕形	身・蓋	破片					2												2
	陶製家形蔵骨器（赤焼）	身	完形										1							1
			破片					63												63
		蓋	完形										1							1
			破片					19												19
		部位不明	破片					16												16
	陶製家型（上焼）	部位不明	破片															3		3
	宮古式土器	身	完形	1	5														2	8
			破片		7		1	92					144			1			23	268
	パナリ焼	身	完形		1															1
			破片	19				4												23
	不明土器	身	破片					12												12
	転用蔵骨器（沖縄産） 無釉陶器	身	完形	4	2							1	6						3	16
			破片	2	1		40	1,049	147	160	448	26	95	100		27		1	14	2110
		蓋	完形							1										1
	施釉陶器	身	破片					101		1	2									104
	転用蔵骨器（褐釉陶器）	身	完形	3																3
			破片						6				13							19
	不明厨子		破片					54	6	11										71
沖縄産陶器		瓶	完形					1					1		2					4
		碗	破片						1									1		2
		徳利	完形					1												1
		不明	破片	1																1
本土産陶磁器		瓶	完形					1												1
		小碗	破片						4											4
		碗	完形		1						1									2
			破片													5				5
		香炉	破片						3											3
		白磁（合子）						1												1
青花（碗）			破片				1													1
瑠璃釉（小杯）			完形								1									1
土製品（花器）			完形												1					1
金属製品	簪		完形					2												2
	指輪		完形						2											2
	飾り金具		完形	1																1
	釘		角完形	2			19								1					22
			丸完形	7	1		1												1	10
			破片	13			5						2							20
	ハサミ			1																1
	おろし金				1															1
	スプーン							1												1
	用途不明			11	1		6	4	1											23
	鉄塊				1															1
玉	ガラス			1											1					2
煙管	金属性	雁首	完形	1							1		1							3
		吸い口	完形										1							1
	陶製	雁首	完形	1			2													3
銭貨	崇寧重寶			1																1
	洪武通寶			3																3
	永樂通寶						1													1
	寛永通寶	古		1	1			1	2											5
		新		1	1				4											6
	無文銭			317						131									20	468
	不明銭			1			1		8										3	13
	半銭							2												2
ガラス			瓶		2							1								3
木炭（炭）				24						46				140		104				314
木片				4							5		3		2					14
木製品（簪？）																			1	1
礫				2			1									1				4
防毒マスクフィルター																		1		1
缶																			6	6
現代遺物				2			1			1			3							7
合計				428	28	0	79	2,538	1,118	1,114	922	590	557	240	7	138	13	35	146	7,953

※「完形」の個数には、接合により1基（個体）として集計可能なものを含む。

第２節　１号墓

外　観　１号墓は、調査区の北東側斜面に立地し、今回報告する墓では最も北西に位置する墓である。

墓は基盤である琉球石灰岩を掘り込み、手前より墓庭、墓口、羨道、墓室を成形する。石積み部分はみられず、墓全体を掘り・削りによって仕上げた、いわゆる総堀込の墓である。屋根部の形状は削平により判然としない。墓正面の上部には庇状の直線的な浅い段が削り出されている。墓の主軸方向は、北東－南西である。

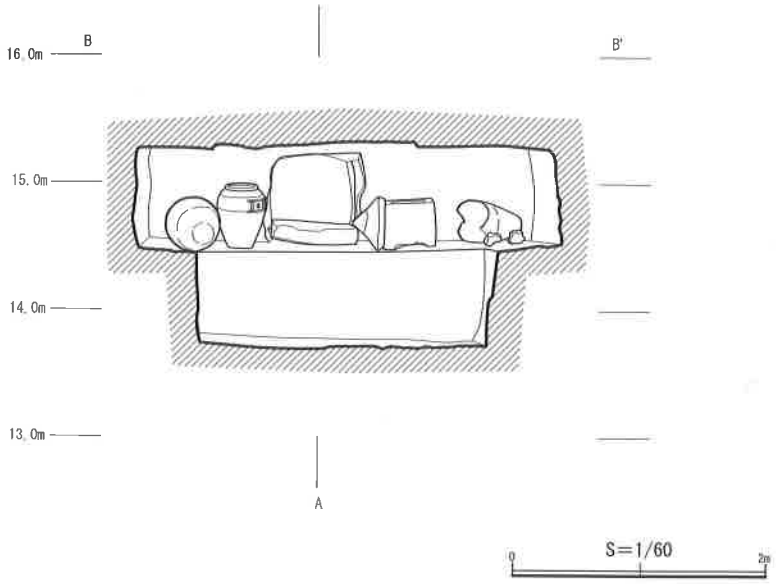
調査前、墓口はすでに開口していたが、墓口に土砂が厚く堆積し、隙間から僅かに墓室内が覗ける状態にあった。墓室内の各蔵骨器は横転し、蔵骨器の蓋や奥壁にある「イケ」の石製の蓋は外された状況であったことから後世に人為的な撹乱を受けた形跡が窺えた。

墓口は入口で幅約 0.8m、高さ 1.53m、内部で幅約 0.66m、高さ 1.5mの縦長の長方形で墓室までの奥行きは 0.66mを測る。墓口の左側面上部には方形の孔（約 15 ㎝角）が穿たれており、墓の構築当時は木桁を嵌め込み、木板等で閉塞していた可能性が考えられる。ハカヌナー〈墓庭〉は幅 2.3mを測る。

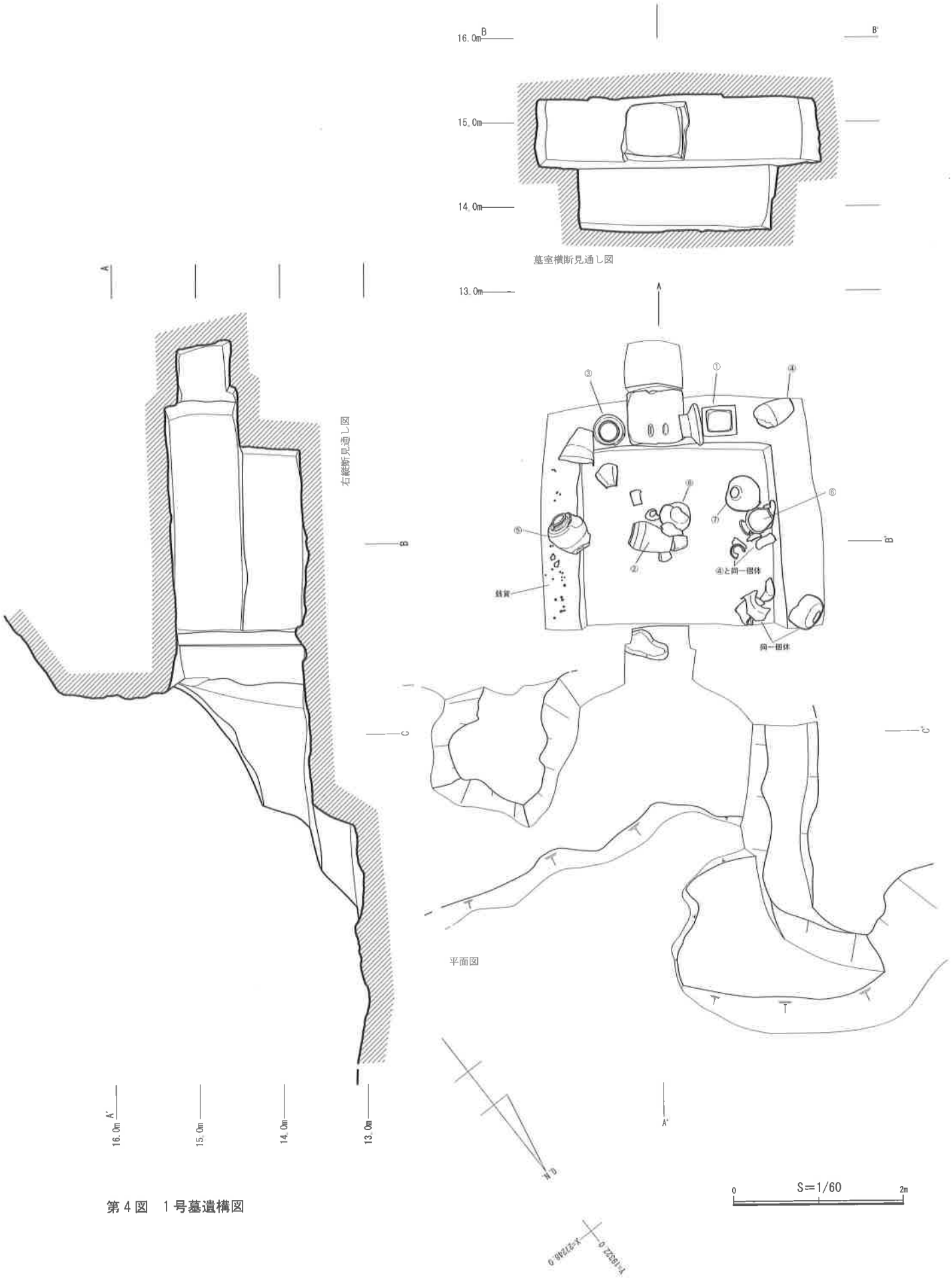
墓室内　墓室は平面形で横長の方形を成し、棚も含めた面積は奥行き 2.70m、幅 3.35mを測り、約９㎡の広さを有する。シルヒラシ部は奥行き 2.05m、幅 2.25mのほぼ正方形を成す。シルヒラシ基部は石質に起因する凹凸がみられるが、琉球石灰岩の石粉を敷き詰めて平坦にしている。天井は平坦で、天井までの高さは 1.6mを測る。

棚は奥壁と左右の壁面に沿って各一段で岩盤を削り出して作られ、各棚の上部は連続した同一面を成す。奥棚は奥行き 0.54mを測り、シルヒラシ基底面からの高さは 0.71mである。右棚は奥行き 0.44mを測り、同じく基底面からの高さは 0.70mである。左棚は奥行き 0.50mを測り、基底面からの高さは 0.74mである。

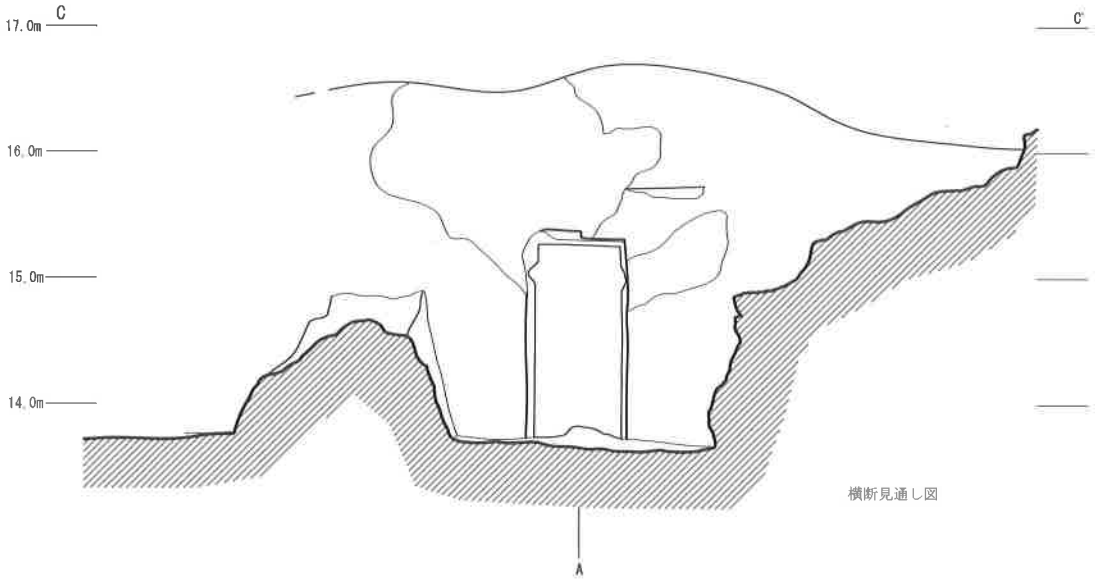
奥壁の中央部には「イケ」と称される小さな横穴が掘り込まれる。この横穴は、奥棚の上面から若干高い位置に方形に掘り込まれており、内部の奥行き 0.51m、幅 0.68m、高さは 0.65mを測る。この横穴は奥棚に蓋が外された状態で置かれていた石製家形蔵骨器（取上番号①）が安置可能な大きさであり、横穴内部に安置されていた可能性も考えられる。イケの開口部は石灰岩製の蓋石によって閉塞するようになっており、蓋石の中央には縦長の孔が２個穿たれる。



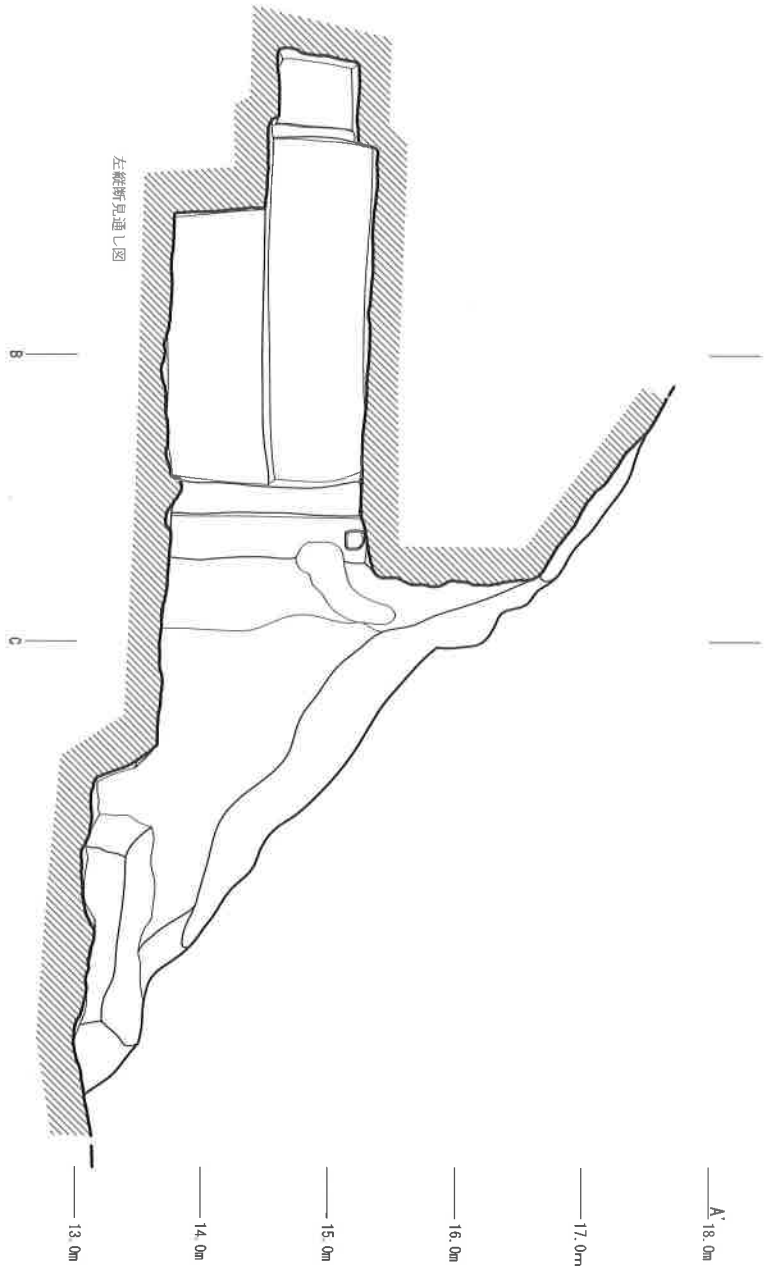
第３図　１号墓墓室横断見通し図（遺物有り）


16.0m
15.0m
14.0m
13.0m
B
B'
A
A'
C
C'
墓室横断見通し図
石棺断見通し図
平面図
①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
⑥と同一個体
同一個体
鉄剣
S=1/60
0
2m

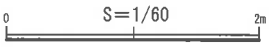
第４図　１号墓遺構図



横断見通し図



左縦断見通し図



出土遺物（第５～８図・図版 14～17）

１号墓より出土した遺物は墓室の棚に安置されていた石製家形入母屋蔵骨器、シルヒラシから検出された陶製無頸甕形蔵骨器（ボージャー厨子）はじめ、転用蔵骨器として使用された沖縄産無釉陶器壷、褐釉陶器壷、宮古式土器らの 11 点が出土した。また、副葬品としてガラス玉や銭貨、鋏が出土した。木製品の出土は確認できなかったが、それらに付随すると見られる飾り金具や鉄製釘なども出土した。

出土した蔵骨器で身と蓋のセット関係が考えられるものは石製家形のみで、陶製の蔵骨器蓋は出土していない。また蔵骨器（身）で確認できた 11 点のうち、約 70%を占める８点の転用蔵骨器が出土したことは本墓の特徴であった。副葬品では右棚に安置されていた転用蔵骨器（沖縄産無釉陶器：第６図５　巻頭カラー9）内から散乱したと考えられる鳩目銭 298 枚を含む 310 枚の古銭（第８図）が出土し、シルヒラシからは高さ約２㎝の大型ガラス玉（第７図９）が出土している。

以下、下記のように大別し、個々の遺物の詳細については観察表に記す。

蔵骨器（身）（第５図 1～第７図 8）

出土した厨子甕のうち特徴的な厨子甕を８点図化した。

(1) 石製家形入母屋蔵骨器（第５図 1、図版 14 の１）

サンゴ石製の入母屋式の身である。奥棚から出土した。正面胴部下半に横位に２条の線彫りが見られるが、側面・背面に至ると線が浅くなり省略化される。銘書は見られない。

(2) 陶製無頸蔵骨器（ボージャー厨子）（第６図 2～3、図版 14 の２～３）

第６図２はシルヒラシの中央で横倒しになって検出されたボージャーである。正面が床と接していたためか、窓下方に見られた墨書の銘書はにじみにより判読不明。窓の庇に斜位の押捺文が見られる。第６図３は口縁部から胴部下半にかけて泥釉により黒褐色を呈する。口唇部に珊瑚枝を使用した重ね焼の痕が見られる。

(3) 転用蔵骨器（第６図 4～6・第７図 7～8、図版 14 の４・図版 15 の 1～3・図版 16 の 1）

大型や中型の褐釉陶器の壷や沖縄産陶器壷を転用したものと、宮古式土器を転用した２種類の転用蔵骨器が出土した。

①沖縄産陶器（第６図４・第６図５、図版 14 の４・図版 15 の 1）

第６図４及び第６図５は胎土や泥漿等からいわゆる喜名・知花焼だと思われる壷の肩部を円形状に打割後、蔵骨器として使用した資料である。4 は接合により全形がうかがえた。肩部から底部は奥棚で横倒しの状態で検出され、口縁部から肩部の破片資料はシルヒラシの左棚側で検出された。底部が安定し、肩部のみの打割であることから、本来の使用法どおり立てて使用されていたことがうかがえる。第６図３と同じく、口唇部には珊瑚枝を使用した重ね焼の痕が見られた。5 は右棚で横位の状態で出土した。第６図６や第７図７のように横倒しで使用していたと見られ、内面胴部中央には副葬品の銭貨の痕跡だと見られる青錆が付着する。上述したとおり右棚からは 298 枚もの鳩目銭が出土していることから、この転用蔵骨器よりこぼれ落ちたことが推察される。

②褐釉陶器（第６図６・第７図７、図版 15 の 2～3）

第６図６は中型の壷を蔵骨器として使用する。肩部から底部にかけて円形状に打割されており、蔵骨器としては割れ口を上部に向け、横倒しで使用していたことが伺える。第７図７は大

型の壷を使用しており、6と同様に割れ口を上部に向け、横倒しで使用していたと考えられる。

③宮古式土器（第7図8、図版16の1）

接合により全形がうかがえた資料。第6図2のボージャーの後方、シルヒラシの中央から出土した。底部に対して肩が強く張る。蔵骨器として使用するため、口縁部から頸部まで意図的に打ち欠いた痕が見られる。肩部に直径約2㎝の楕円形の孔が穿孔される。

蔵骨器（蓋）（第5図1、図版14の1）

出土した蓋は石製家形の1点を図化した。

（1）石製家形入母屋蔵骨器（第5図1、図版14の1）

上述したサンゴ石灰岩製の入母屋蔵骨器の蓋と考えられる資料である。奥棚から出土した。蓋は開けられた状態であり、セット関係にあると見られる蔵骨器（身）とイケを閉じていた閉塞石の間から出土した。

その他の出土遺物（第7図9～15・第8図16～32、図版16の3～8・図版17）

1号墓では、沖縄産陶器、煙管の雁首、金属製品、銭貨、玉製品などが出土している。これらの遺物のうち、金属製品の釘、鋏、玉製品、銭貨について図化し報告を行う。なお、煙管に関しては紙幅の都合上、図化を見送った。ご了承願いたい。

（1）ガラス玉（第7図9、図版16の2）

本製品はシルヒラシから出土した。本製品は巻き上げ技法によって製作されており、上面観の孔の周辺には巻き上げによるスジが見られる。外面には研磨によって楕円形の平坦面が作られている。孔は徐々に窄まるように見える。色調は水色となる。法量は厚さ2cm、孔径は推定0.85cm、重量6.87gを測る。

（2）金属製品（第7図10～15、図版16）

①飾り金具（第7図10、図版16の3）

飾り金具は1点、シルヒラシから出土している。本製品は引き手金具の類で、台は花形を呈し、5つの花弁が見られる。台の中心には鐶を通す穴があり、そこに鐶が通る。台の裏面には足が見られる。全体的に青錆が付着しているものの、保存状態は良好である。法量は、長さ1.90cm、幅1.15cm、台の厚さが0.07cm、鐶の直径1.40cm、鐶の厚さ0.2cm、重量2.30gを呈する。

②鋏（第7図11、図版16の4）

鋏は1点が出土しており、墓室内の右棚から検出された。いわゆる洋鋏で、両刃部の中程から先端が欠損し、一方の持ち手の一部が欠けている。全体的に錆が付着しており、保存状態は悪い。だが、支点となるねじの部分などの痕跡は残っている。残存長15.95cm、刃部の厚さ0.45cm、重量52gを測る。

③釘（第7図12～15、図版16の5～8）

1号墓においては鉄釘が出土している。鉄釘はいずれも角釘で、腐食が著しい。1号墓出土のものは全て屈曲しており、釘の一部が欠損している資料も見られる。鉄釘は全て墓室内右棚から出土している。各釘の法量等については個別の第7表の観察表にて報告する。

（3）銭貨（第8図16～32、図版17の1～17）

1号墓出土の銭貨は少なくても324点が確認されている。銭種は崇寧重寶、洪武通寶、寛永通寶、無文銭となっている。銭貨は右棚やシルヒラシから出土しているが、蔵骨器内においても無文銭の錆の痕跡が見られた。また複数枚の銭貨が錆により固着しているものもあることから、銭貨が束ねられた状態（緡の状態）で墓に納められたことも考えられる。本古墓出土の有文銭は状態の良好な資料を選別し、図化を行った。無文銭に関しては代表的な資料を選別した。

なお、無文銭に関しては以下の分類を行った。この分類は他の墓において出土した無文銭に関しても用いる。

1類：径が直径20mm以上、孔の形状が方形のもの

2類：径が直径20mm未満、孔の形状が方形のもの

3類：径が直径20mm未満10mm以上、孔の形状が円形のもの

4類：径が直径10mm未満、孔の形状が円形のもの

(4) 煙管（図版無し）

本古墓からは無釉の陶製煙管の雁首が1点、金属製煙管の雁首が1点、墓室内シルヒラシより出土している。無釉の陶製煙管雁首は火皿、胴部共に八角形に面取りがなされているが、一つの面は同一の長さではない。火全体的に石灰が付着しており、素地が見える箇所は少ない。素地が見える箇所からは赤色粒の混入が見られる。後述する4号墓の陶製煙管とは異なり焼締められていないこと、削りの痕が斜め方向に見られること、素地に黒色粒を含むことが確認できた。胴部の側面には溶着物が付く箇所が見られる。法量は長さ 4.1cm、火皿径 1.75cm、羅宇接続部径 1.53cm を測る。金属製煙管の雁首は火皿が直口を呈する。金属の繋ぎ目は首部から羅宇接続部まで見られる。また、この繋ぎ目から破損が生じており、そのため羅宇接続部が円形を保っていない。法量は長さ 6.2cm、火皿径 2.05～1.55cm、羅宇接続部径 0.95cm を測る。

第3表　1号墓出土蔵骨器（身）観察表

（単位：cm）

挿図番号 図版番号	取上番号	出土地点	型式（名称又は仮称）	口径 胴径 底径 器高	窓枠／屋門	窓数／形	帯	文様	調整痕	底面円孔	釉薬等	窯印	銘書	備考
第5図　1 図版14　1	①	奥棚	石製家形（入母屋）身	器高 37.0 桁長 41.8 梁長 36.5	—	—	—	正面胴部下半に2条の横位沈線が確認できるが、側面・背面では浅く、省略化される。	外面は研磨が施されるが、内面は削り出しのままである。調整がされておらず、ノミの削り痕が明瞭に残る。	—	—	—	無	—
第6図　2 図版14　2	②	シルヒラシ	陶製無頸甕形（ﾎﾞｰｼﾞｬｰ）	27.0 37.2 20.2 50.4	平葺形	7個／1方 6円	①- ②凹線1条 ③凹線1条 ④-	無	外面：轆轤成形後、丁寧なナデ調整を施す。底部から胴部下半にかけて、横位の削り調整が確認できる。 内面：轆轤成形後、粗いナデ調整が施される。	5個円形	—	無	■■■〈判読不能〉/■(中ヵ)〈判読不能〉/甲戌七月■■	屋門の庇に斜位の押捺文が見られる。
第6図　3 図版14　3	③	奥棚	陶製無頸甕形（ﾎﾞｰｼﾞｬｰ）	24.7 37.3 19.2 49.1	平葺形	5個／1方 4円	①- ②凹線1条 ③凹線1条 ④-	無	外面：轆轤成形後、丁寧なナデ調整を施す。底部から胴部下半にかけて、横位の削り調整が確認できる。 内面：轆轤成形後、粗いナデ調整が施される。	無	泥漿状の釉薬を全面に施す	無	無	口唇部に枝珊瑚枝を使用した重ね焼の痕が見られる。
第6図　4 図版14　4	④	奥棚	転用蔵骨器（沖縄産）	18.5 (45.0) (21.0) (54.0)	—	—	—	—	内外面共に、轆轤成形痕が確認できる。	—	泥漿状の釉薬を全面に施す	—	無	口唇部に枝珊瑚を使用した重ね焼の跡が見られる。胎土：サンドイッチ状。

第４表　１号墓出土蔵骨器（身）観察表

（単位：cm）

挿図番号 図版番号	取上番号	出土地点	型式（名称又は仮称）	口径 胴径 底径 器高	窓枠／屋門	窓数／形	帯	文様	調整痕	底面円孔	釉薬等	窯印	銘書	備考
第 6図　5 図版15　1	⑤	右棚	転用蔵骨器（沖縄産）	18.5 (45.0) (21.0) (54.0)	－	－	－	－	内外面共に、轆轤成形痕が確認できる。	－	泥漿状の釉薬を全面に施す	－	無	窯焼成時の歪が大きく見られる。内面胴中央辺りに銭貨による青錆が顕著に見られる。胎土：サンドイッチ状。
第 6図　6 図版15　2	⑥	シルヒラシ	転用蔵骨器（褐釉陶器）	19.4 (29.0) (15.4) 35.4	－	－	－	－	内外面共に、轆轤成形痕が確認できる。	－	褐釉	－	無	－
第 7図　7 図版15　3	⑦	シルヒラシ	転用蔵骨器（褐釉陶器）	18.2 (42.0) (15.4) 53.8	－	－	－	－	内外面共に、轆轤成形痕が確認できる。	－	褐釉	－	無	口唇部が所々露胎する他は、内外面共に全面施釉。肩部に重ね焼時の癒着痕有り。
第 7図　8 図版16　1	⑧	シルヒラシ	転用蔵骨器（宮古式土器）	10.7 － 3.8 5.35	－	－	－	－	外面、回転調整。肩部から胴部にヘラによる不明瞭な調整痕が見られる。 内面、全面に丁寧なナデ調整が見られる。	－	－	－	無	底部に対し肩が強く張る。口縁部から頸部は欠損しており、意図的に打ち欠いたと見られる。素地は橙色で白色粒を多く含む。色調は内外面とも橙色であるが、外面の大部分は黒く焼けている。肩部に直径約2cmの楕円形の孔が穿孔される。その孔を塞ぐためのものか長径7.1cm、短径6.7cmの石灰製の蓋らしき楕円形状の製品も出土している（図版16の1－2・1－3）。

第５表　１号墓出土蔵骨器（蓋）観察表

（単位：cm）

挿図番号 図版番号	取上番号	出土地点	型式（名称又は仮称）	口径 胴径 底径 器高	窓枠／屋門	窓数／形	帯	文様	調整痕	底面円孔	釉薬等	窯印	銘書	備考
第 5図　1 図版14　1	①	奥棚	石製家形（入母屋）蓋	器高 24.7 桁長 49.5 梁長 42.5	－	－	－	屋根は入母屋であるが、細部まで表現されていない。	外面は研磨が施されるが、内面は削り出しのままである。調整がされておらず、ノミの削り痕が明瞭に残る。	－	－	－	無	－

第６表　１号墓出土ガラス玉・金属製品観察表

（単位：cm・g）

挿図番号 図版番号	出土地点	種類	材質	法量				備考
				高さ	幅	厚み	重量	
第 7図　9 図版16　2	シルヒラシ	玉	ガラス	－	－	2.00	6.87	最大径となる箇所に楕円形の平坦面を形成している。孔は下部に向かうにつれて窄まる。孔の径は0.90cmとなる。
第 7図　10 図版16　3	シルヒラシ	飾り金具	銅？	1.90	1.15	台の厚さ：0.07	2.30	5弁の花形の台を有する製品。台の中心に穴があり、そこに鐶が通る。鐶の直径は1.40cmを測る。
第 7図　11 図版16　4	右棚	鋏	鉄	15.95	刃部：1.8～1.0 取手：0.7～0.1	刃部：0.45 取手：0.85～0.1	52.00	両方の刃部及び取手部分の一部が欠損している。支点となるねじは錆で覆われているが、痕跡が残る。刃部の厚さは0.45cmを測る。

第７表　１号墓出土ガラス玉・金属製品観察表

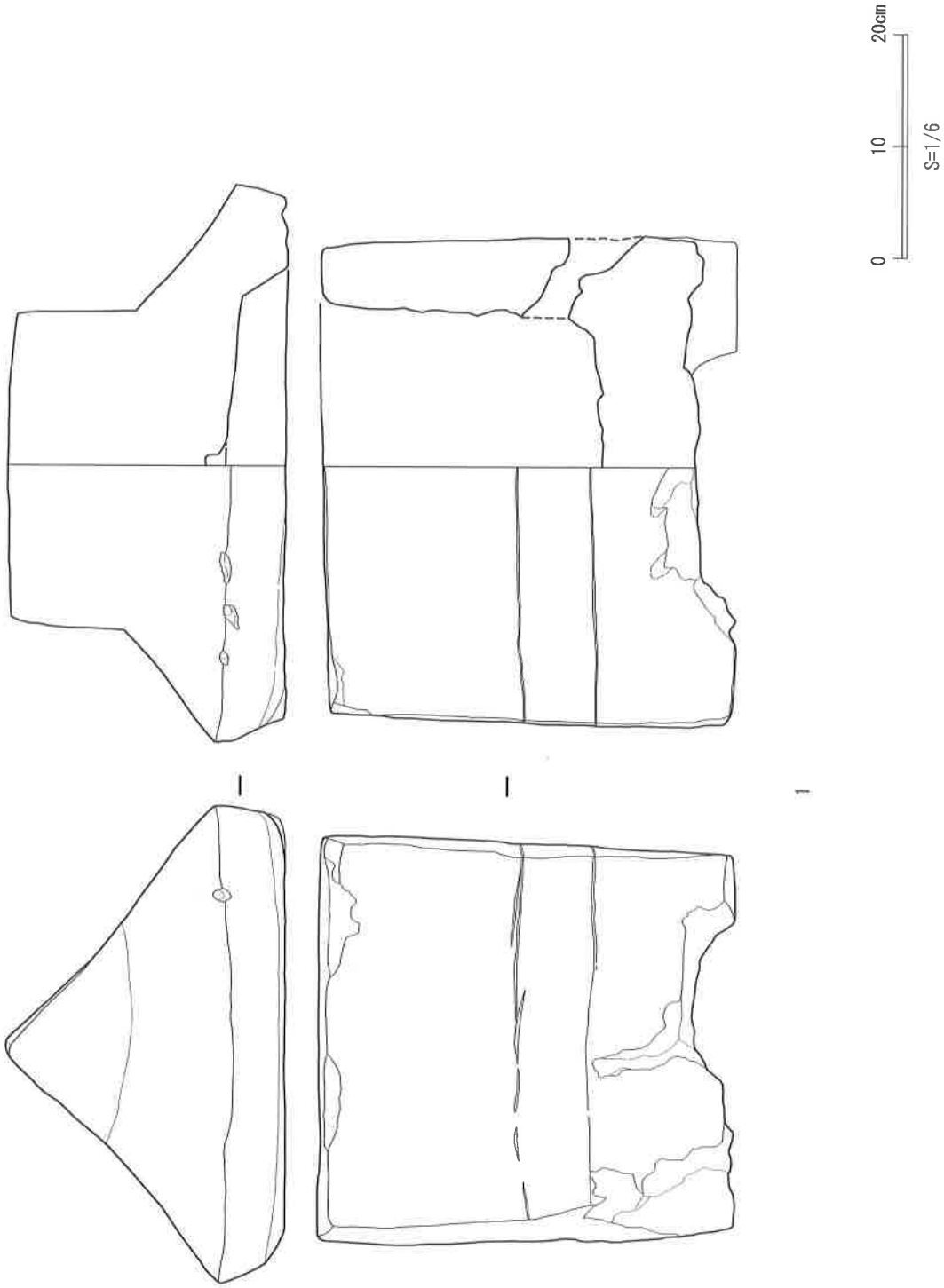
（単位：cm・g）

挿図番号 図版番号	出土 地点	種類	材質	法量				備考
				高さ	幅	厚み	重量	
第 7図　12 図版16　5	右棚	釘	鉄	4.10	0.35	0.35	1.22	基部の中ほどで屈曲する。頭部の一部が欠損している。
第 7図　13 図版16　6	右棚	釘	鉄	4.05	0.50	0.40	2.64	基部の中ほどで緩やかに屈曲し、尖端が欠損している。
第 7図　14 図版16　7	右棚	釘	鉄	3.60	0.45	0.45	1.60	基部が釣り針状に折れ曲がる。尖端が欠損する。
第 7図　15 図版16　8	右棚	釘	鉄	4.40	0.37	0.36	1.24	頭部が欠損し、基部の中ほどで直角に折れ曲がる。

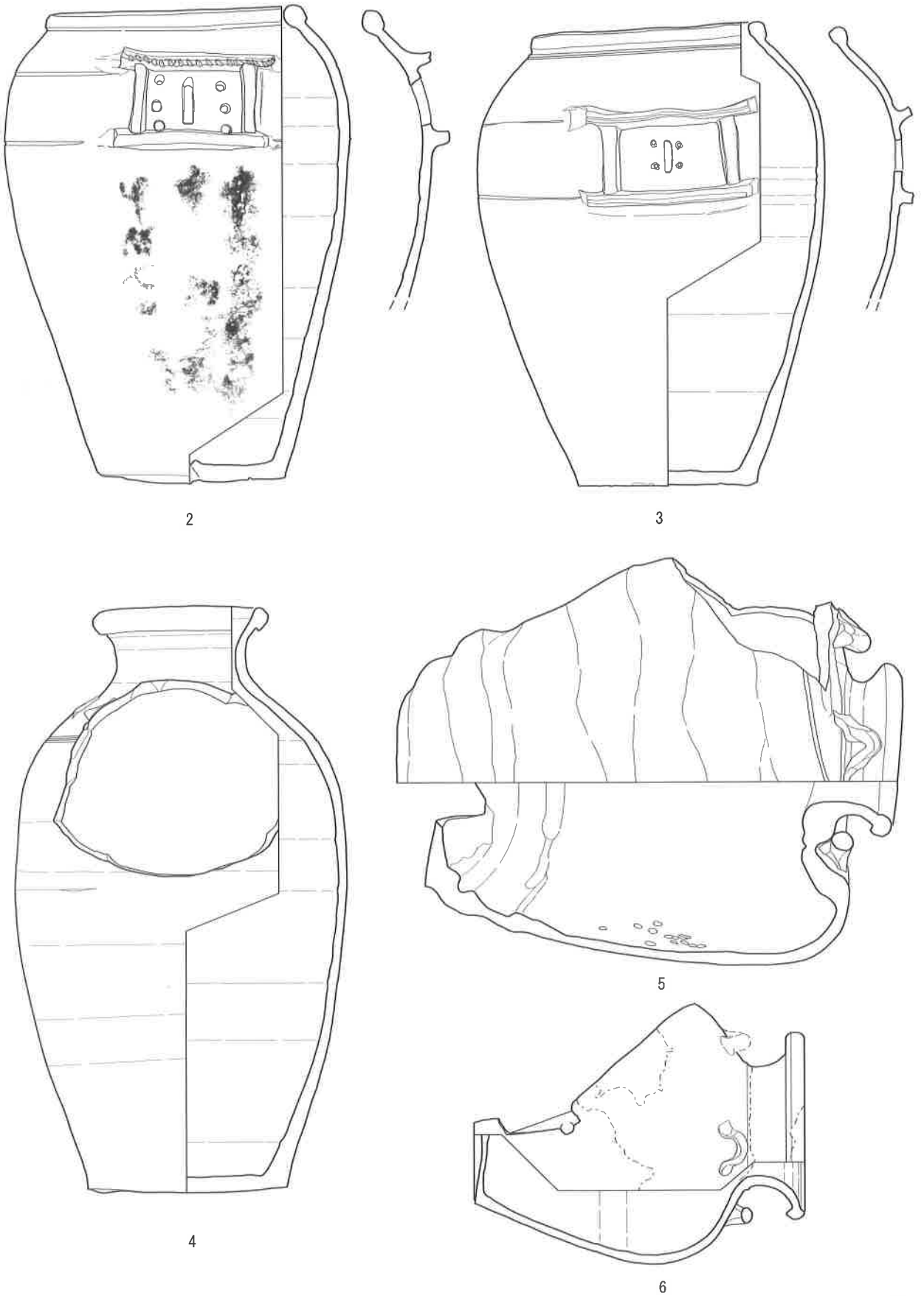
第８表　１号墓出土銭貨観察表

（単位：cm・g）

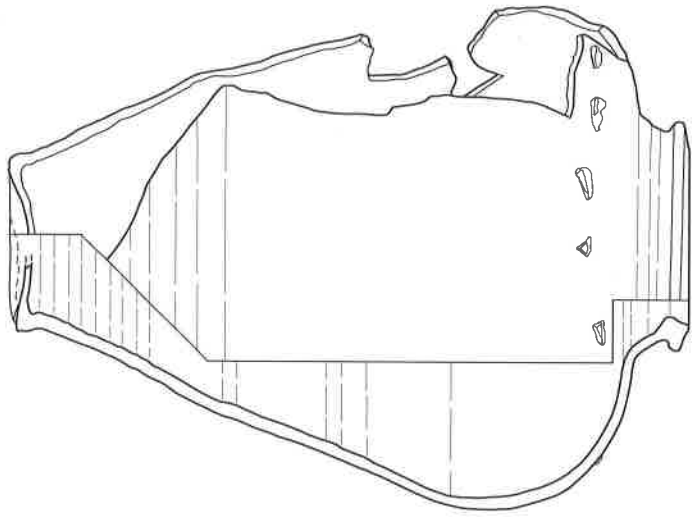
挿図番号 図版番号	出土地点	銭貨名	時代 初鋳年	分類	法量				残存率	材質	備考
					外径	孔径	厚さ	重量			
第８図　16 図版17　1	右棚	崇寧重寶	1103年	―	3.4	0.8	0.16	6.89	完形	銅	表裏面共に磨耗・一部欠損している。全体的に青錆が付着する。
第８図　17 図版17　2	右棚	洪武通寶	1368年	―	2.4～ 2.3	0.6	2.0	3.5	完形	銅	多少の歪みの見られる。全体的に青錆が付着しているおり、裏面には砂粒も付着する。
第８図　18 図版17　3	シルヒラシ	寛永通寶 （古寛永）	1639年	―	2.35	0.6	0.18	3.34	完形	銅	全体的に青錆が付着。青錆により外輪の判別がし難い。
第８図　19 図版17　4	シルヒラシ	寛永通寶 （新寛永）	1697年	―	2.45～ 2.35	0.65	0.11	2.79	完形	銅	表裏面共に青錆が付着。「永」の文字の右側に微小な穴が見られる。裏面は全体的に磨耗している。
第８図　20 図版17　5	シルヒラシ	無文銭	―	1類	2.1	0.9～ 0.8	0.09	1.00	完形	銅	全体的に青錆が付着。銭貨全体の歪みや一部欠損が見られる。孔は四角形となる。
第８図　21 図版17　6	シルヒラシ	無文銭	―	1類	2	0.7	0.14	1.16	完形	銅	全体的に青錆が付着。一部の箇所には赤錆も見られる。孔は四角形となる。
第８図　22 図版17　7	シルヒラシ	無文銭	―	1類	2.15	0.75	0.15	1.62	完形	銅	全体的に青錆が付着。孔の形状は四角形となる。
第８図　23 図版17　8	シルヒラシ	無文銭	―	2類	1.95	0.7	0.17	1.59	完形	銅	全体的に青錆が付着。ややいびつな円形を呈しており、孔の形状も崩れた四角形となる。
第８図　24 図版17　9	シルヒラシ	無文銭	―	2類	1.8	0.8	0.1	0.99	完形	銅	全体的に青錆が付着。孔の形状がいびつな四角形となる。
第８図　25 図版17　10	シルヒラシ	無文銭	―	2類	1.6	0.9～ 0.8	0.13	0.66	完形	銅	孔はいびつな凹形を呈している。一部に銅が垂れた痕跡が見られる。
第８図　26 図版17　11	シルヒラシ	無文銭	―	2類	1.35～ 1.3	0.8	0.1	0.46	完形	銅	全体的に青錆及び石灰が付着。輪郭の孔の角の延長線上に湯道を切断した箇所が見られる。孔の形状は隅丸方形となる。
第８図　27 図版17　12	シルヒラシ	無文銭	―	2類	1.3～ 1.2	0.7	0.1	0.32	完形	銅	輪郭がやや崩れてた円形。孔の形状は丸みを帯びた四角形となる。
第８図　28 図版17　13	シルヒラシ	無文銭	―	2類	1.3	0.9	0.1	0.21	完形	銅	輪郭が崩れており、いびつな隅丸方形となる。孔の形状も同様に崩れて、隅丸方形状となる。
第８図　29 図版17　14	シルヒラシ	無文銭	―	3類	1.2	0.75～ 0.69	0.09	0.20	完形	銅	輪郭がくずれており、孔の形状はいびつな円形となる。
第８図　30 図版17　15	シルヒラシ	無文銭	―	3類	1.15	0.8	0.1	0.18	完形	銅	わずかに歪みが見られる。孔の形状は円形となる。
第８図　31 図版17　16	シルヒラシ	無文銭	―	4類	0.9	0.8	0.09	0.14	完形	銅	湯道がわずかに残存。孔の形状は円形となる。
第８図　32 図版17　17	シルヒラシ	無文銭	―	4類	0.95	0.6	0.09	0.08	完形	銅	輪郭がD字状を呈する。孔の形状は円形となる。



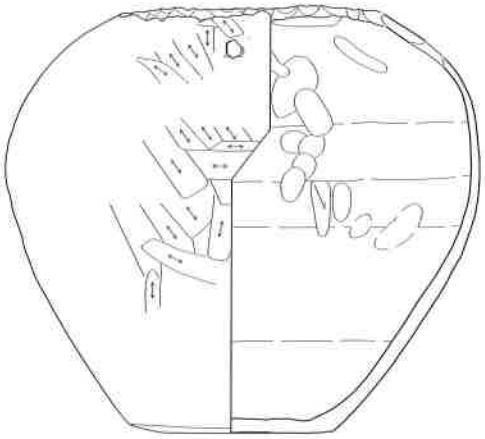
第５図　１号墓出土遺物１



第６図　１号墓出土遺物２



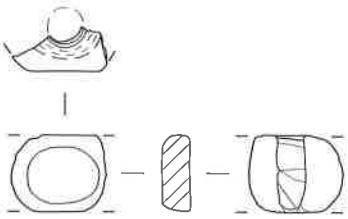
7



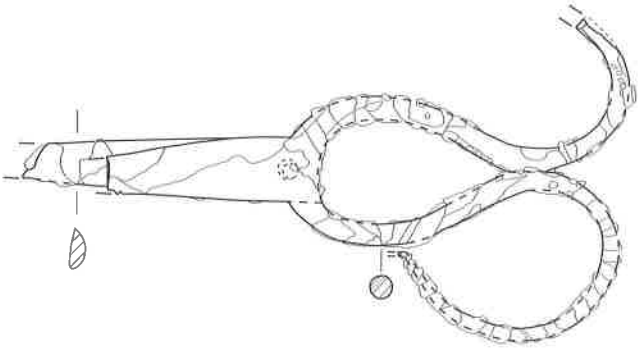
8

0 10 20cm

S=1/6

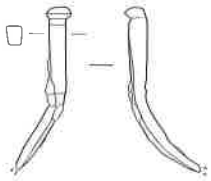


9

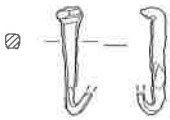


11

10

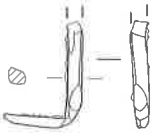


12



13

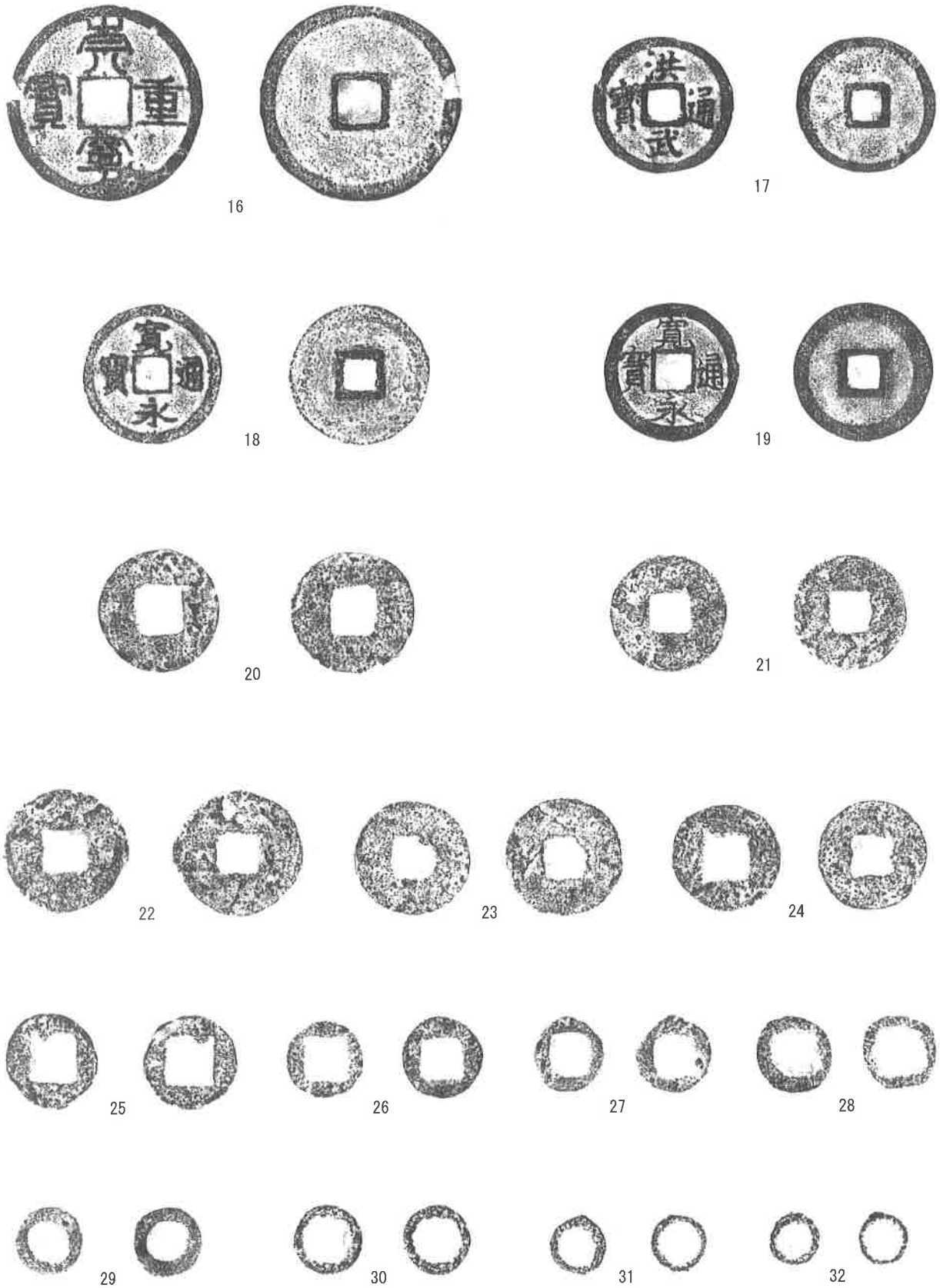
14



15

第７図　１号墓出土遺物３

0 S=1/2 10cm



第８図　１号墓出土遺物４

第３節　10号墓

外　観　10号墓は、調査区の北東側斜面に位置する堀込墓である。墓は基盤の琉球石灰岩を横方向に掘り込み、手前より墓庭、サンミデー、羨道、墓室を成形する。墓全体を掘り・削りによって仕上げた、いわゆる総堀込の墓である。屋根部の形状は削平により判然としないが、墓正面の上部には庇状の直線的な浅い段が削り出されている。墓の主軸方向は、北東－南西である。

調査前、墓口はすでに開口しており、墓口には土砂が厚く堆積し、隙間から僅かに墓室内が覗ける状態であった。墓口は入口で幅約 1.15m～0.9m、高さ 1.17m、内部で幅約 0.6～0.8m、高さ 0.98mの縦長の長方形で墓室までの奥行き 1.10mを測る。ハカヌナー〈墓庭〉は幅約 3.3m、残存部で奥行き約 2.8mを測る。

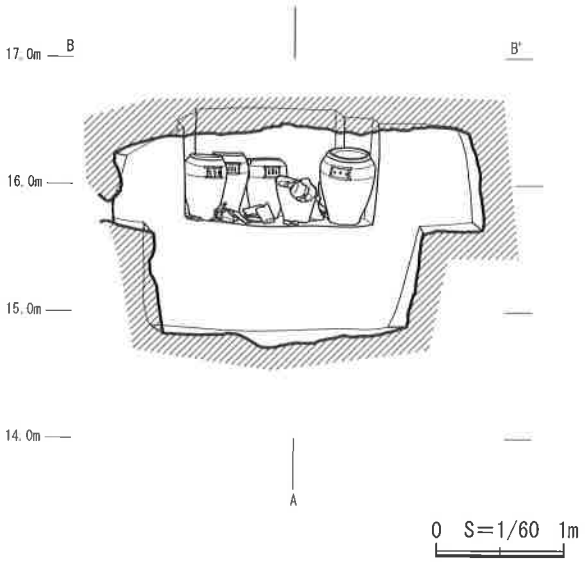
墓室内　墓室は平面形で横長の方形を成し、シルヒラシ部の奥行き約 1.5m、幅約 1.8mの横長の方形で、約 2.7 ㎡の広さを有する。天井はほぼ平坦で、天井までの高さは約 1.6～1.8mを測る。シルヒラシ基部は石質に起因する凹凸がみられるが、琉球石灰岩の石粉を敷き詰めて平坦にしている。

棚は墓室奥と左右の両壁面に凸状（出窓状）に岩盤を削り出して造られる。奥棚は奥行き約 0.7m、幅は、手前側で約 1.5m、奥側で 1.15mを測る。基底面からの高さは 0.82mである。右棚は奥行き約 0.3m、幅約 1.24mを測り、基底面からの高さは約 0.8mである。右棚は蔵骨器を設置するには幅が狭いが、これは棚を造る際に隣接する 11 号墓墓室に達してしまったため（一部は貫通している）、必要な幅を掘ることができなかったためである。左棚は奥行き 0.47m、幅 1.27mを測り、基底面からの高さは 0.72mである。

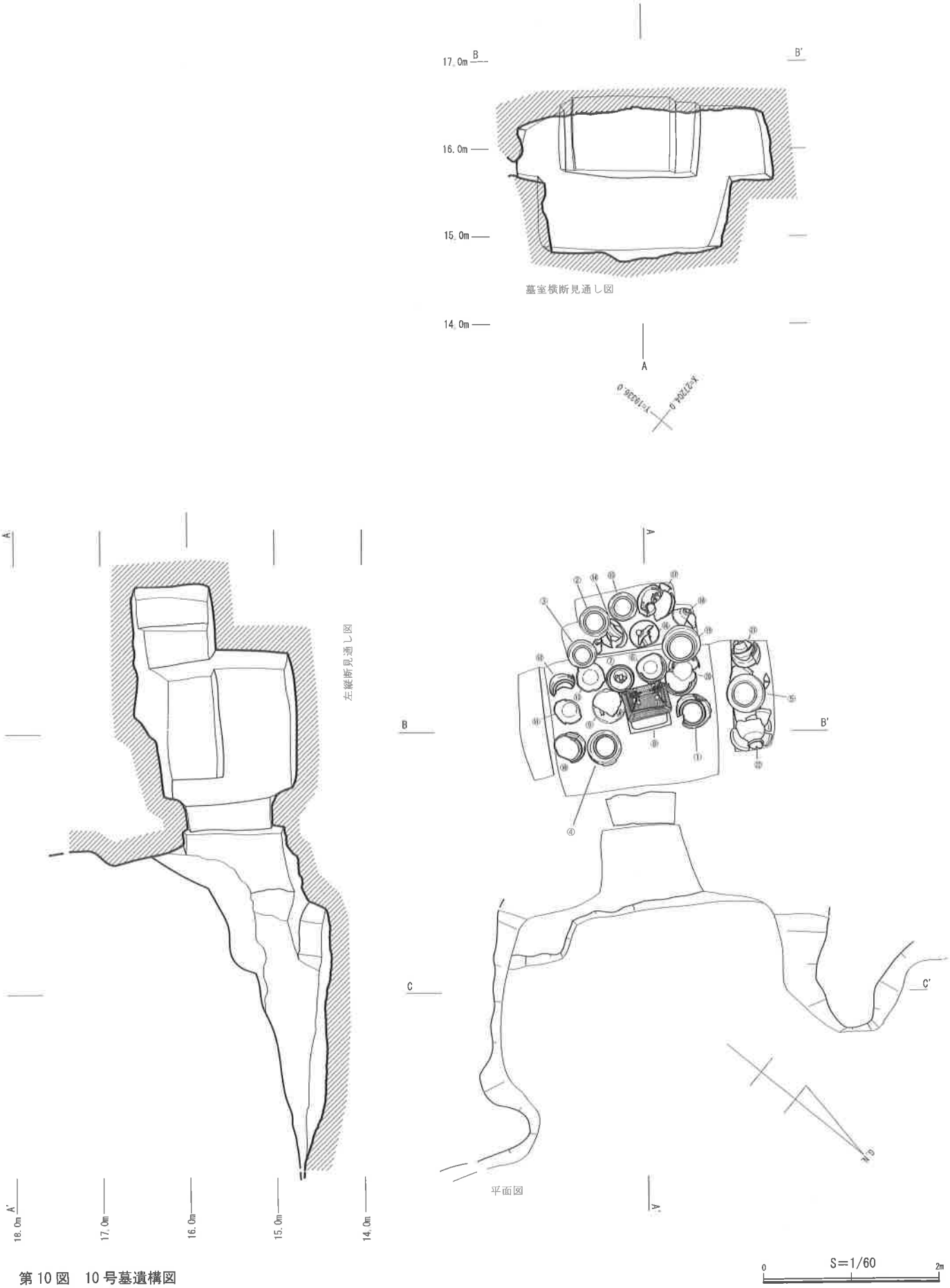
出土遺物（第 11～17 図・図版 18～20）

墓室内の各蔵骨器は、正立した状態で検出されたが、個々の蔵骨器は破損している状態のものが多くみられた。また、蓋はほぼ全ての蔵骨器で外れた状態であったことから、過去に人為的な撹乱を受けたものとみられる。

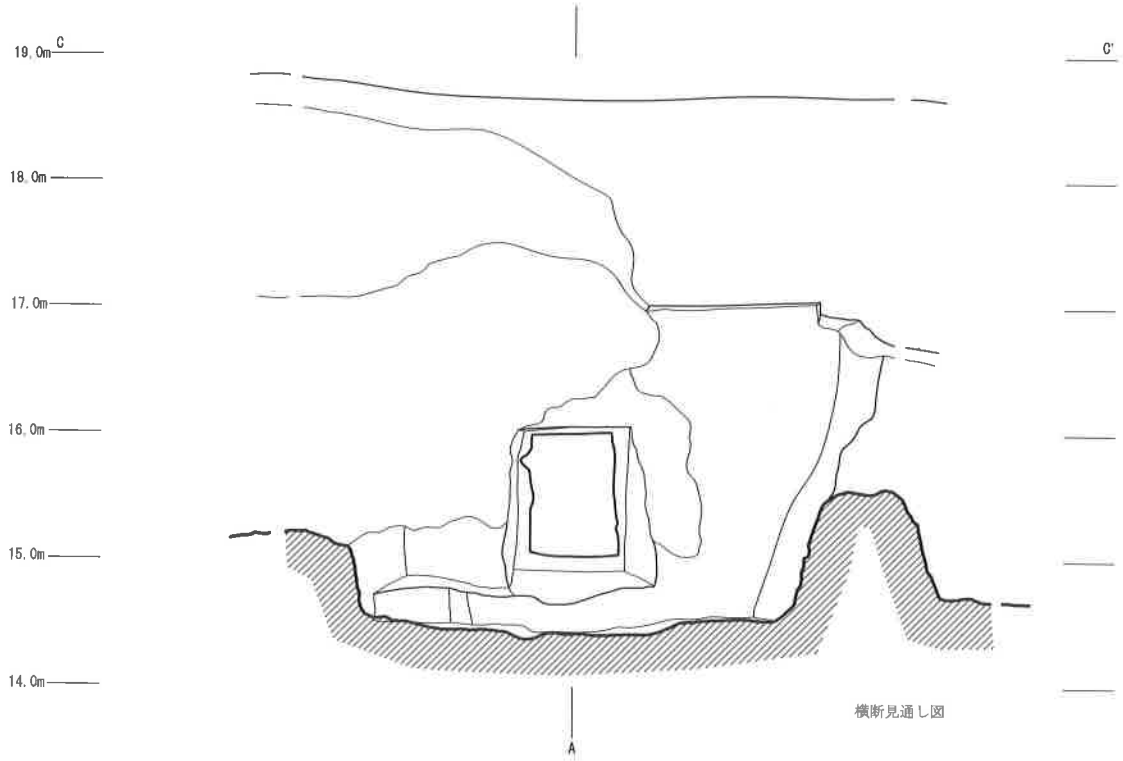
10 号墓からは墓室の棚やシルヒラシに安置されていた蔵骨器で確認できた完形個体は 25 点であった。その他に破片等の出土があったため、実際に安置されていた蔵骨器はそれ以上だと考えられる。内訳は陶製無頸蔵骨器（ボージャー厨子）が 18 点、陶製家形蔵骨器（赤焼）が身と蓋のセットで１基、転用蔵骨器の沖縄産壷が６点である。破片での確認だが宮古式土器片が 144 点出土していることから、本墓でも宮古式土器による転用蔵骨器があったことが推察される。蔵骨器（身）で確認できた 25 基のうち、ボージャー厨子が約 70%を占めており、1 号墓とは異なる様相を示している。本墓は他墓と比較して戦争の被害から免れた部分が多く、



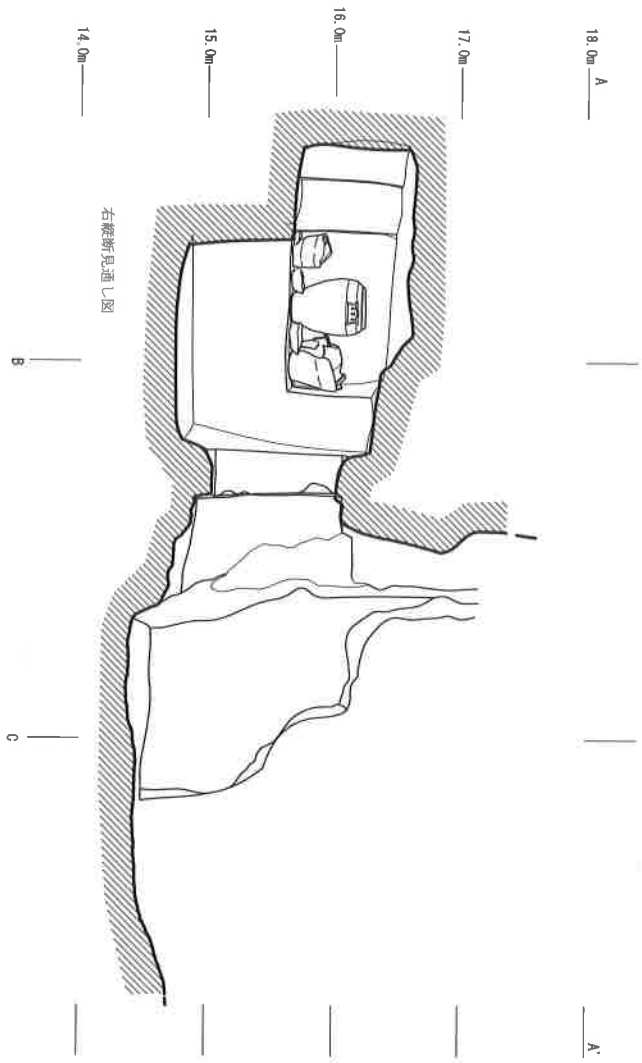
第９図　10号墓墓室横断見通し図（遺物有り）



第10図　10号墓遺構図



横断見通し図



右縦断見通し図

S=1/60

蔵骨器の残存状態も非常に良いのが特徴である。ただし、第 10 図平面図からもわかるように、ほとんどの蔵骨器の蓋が移動されていたもしくは破損し撹乱された状態での検出だったため、陶製蔵骨器で蓋と身のセット関係が分かる資料は残念ながら不明であった。以下、下記のように大別し、個々の遺物の詳細については観察表に記す。

蔵骨器（身）（第 11 図 1～第 15 図 8）

出土した蔵骨器のうち特徴的なものを 8 点図化した。ただし、陶製家形蔵骨器（赤焼）は残存状況が悪く、触れるだけで器面が剥離する状態だったため、図化・撮影等は見送った。

(1) 陶製無頸蔵骨器（ボージャー厨子）（第 11 図 1～第 15 図 7、図版 18～19 の 1）

ボージャー厨子では第 11 図 1 は窓下方の身の中央に「仲上はんかなし」の線彫り銘書が確認できた。窓の庇は寄棟瓦葺を表現し、窓の左右には貼付の僧形人物像が片側 3 体ずつ施され、それぞれの像の下位に線彫りの蓮華を施している。第 11 図 1 のほかに、第 12 図 2 のボージャー厨子でも貼付の僧形人物像が窓の片側に 3 体ずつの計 6 体見られた。第 13 図 3 や第 14 図 4 では沈線で草花文や蓮華葉文が描かれたもの、第 14 図 5 から第 15 図 7 は無文のボージャー厨子である。

(2) 転用蔵骨器（第 15 図 8、図版 19 の 2）

小型の沖縄産陶器壷を蔵骨器として転用した壷である。胎土や泥漿等からいわゆる喜名・知花焼だと思われる。接合により全形がうかがえた資料。接合資料のため正確な打割の範囲は不明だが、口縁部の一部から底部にかけて打割されたと見られ、蔵骨器としては割れ口を上部に向ける横倒しでの使用が考えられる。

蔵骨器（蓋）（第 15 図 9～第 17 図 16）

18 基確認したボージャー厨子の蓋の中から特徴的なものを 7 点、マンガン釉甕形蔵骨器の蓋を 1 点図化した。

(1) 陶製無頸蔵骨器（ボージャー厨子）（第 15 図 9～第 17 図 15、図版 19～20 の 1）

ボージャー厨子の蓋は、飾り棟の有無で 2 種に大別した。

①飾り棟が有るもの（第 15 図 9・第 16 図 10）

草花文の有無で 2 種に分類した。

a.草花文がみられるもの〔第 15 図 9、図版 19 の 3〕

第 15 図 9 は棟状の凸帯貼り付けがつまみ台を中心に口縁部近くまで 4 本伸びる。その凸帯の下端部には渦巻状の装飾をそれぞれに貼り付けるタイプである。区切られた 4 つの区画内には線彫りによる草花文が施される。全体的に丁寧な作りであり、草花文の線彫りを細く鋭い線で表現する。

b.草花文がみられないもの（第 16 図 10、図版 19 の 4）

第 16 図 10 はつまみ台から棟状の凸帯貼付が口縁部近くまで 5 本伸び、その下端部には第 15 図 9 と同様に、渦巻状の装飾を貼り付ける。区画内は無文である。

②飾り棟が無いもの（第 16 図 11～第 17 図 15）

文様で a.草花文、b.幾何学文、c.無文の 3 種に分類した。

a.草花文がみられるもの（第 16 図 11、図版 19 の 5）

第16図11では、外面に櫛描きによる草花文が施される。

b.幾何学文がみられるもの（第16図12、第16図13、図版19の6～7）

第16図12では外面には櫛描きによる波状沈線文を上下に2条施した後、次につまみ台直下から放射状に櫛描きによる沈線が口縁部まで5本施す。一部草文のような沈線文が見られた。第16図13は、つまみ台下部に櫛描きによる波状沈線文が1条施され、その下位には放射状に9本の櫛描き沈線が短く施される。

c.無文のもの（第16図14、第17図15、図版19の8・図版20の1）

第16図14は無孔つまみ、第17図15はつまみ無しとなり、両者とも無文である。

(2) 陶製有頸蔵骨器（マンガン釉）（第17図16、図版20の2）

同図 16 はマンガン釉の蓋で渦巻状の貼り付けが残存状況から3箇所の貼付であったことが考えられる。

その他の出土遺物（第17図17～19、図版20の3～5）

(1) 沖縄産施釉陶器　瓶（第17図17、図版20の3）

墓室内のシルヒラシから出土した。第17図17は瓶の完形を窺い知ることが出来る資料である。口縁部がラッパ状に開き、頸部で細くなり、胴部が膨らむ。底部はやや開く程度となっている。釉薬は泥釉が頸部内面から底部外面まで掛けられる。釉薬は窯変の影響か微弱な凹凸が目立つ。箇所によっては素地が見える箇所もある。器面に石灰が付着している箇所があり、内底面では特に石灰の付着が目立つ。胎土には小形の貝、石英の細粒、赤色粒等を含む。法量は、口径4.30cm、底径6.30cm、器高16.80cmを測る。

(2) 金属製品　煙管（第17図18～19、図版20の4～5）

煙管は金属製のものが出土しており、部位は雁首と吸口となっている。両者ともシルヒラシから出土しており、内部に羅宇として使用された竹と思われる植物が残存している。また、雁首と吸口はセット関係であると思われる。

第17図18は吸口の火皿で直口となり、内部に炭化した刻み煙草が残る。火皿の下部には補強体を有している。胴から脂返しの側面に金属板の繋ぎ目が見られ、繋ぎ目は補強体の下から羅宇接続部まで続く。羅宇接続部付近に破損が見られ、破損は繋ぎ目から生じている。雁首の法量は、長さ7.5cm、火皿径1.25cm、羅宇接続部径1.0cm、厚さ0.1cm、重量10.12gを測る。

第17図19は吸口で最大径が羅宇接続部にくる。口元に向かうにつれて窄まり、吸口部で径が微弱に拡大する。吸口の繋ぎ目は側面にあり、羅宇接続部から吸口部まで続く。吸口の法量は長さ8.75cm、厚さ0.1cm、重量9.70gを測る。

第９表　10号墓出土蔵骨器（身）観察 表

（単位：cm）

挿図番号 図版番号	取上番号	出土地点	型式（名称又は仮称）	口径 胴径 底径 器高	窓枠／屋門	窓数／形	帯	文様	調整痕	底面円孔	釉薬等	窯印	銘書	備考
第11図　1 図版18　1	①	シルヒラシ	陶製 無頸 甕形 (ﾎﾞｰｼﾞｬｰ)	27.2 40.5 21.0 54.8	寄棟形	3個/3方	①段状凹線2条 ②凹線1条 ③凹線1条 ④－	窓は粘土貼付により寄棟瓦葺を表している。窓左右に3体ずつ同サイズの僧形像を配置する。それぞれの像の下位に線彫りの蓮花が見られる。さらにその下位に同じく線彫りの蓮葉様を施す。	外面、轆轤成形。丁寧なナデ調整を全面に施す。また削り調整も見られる。底部立ち上がりを横位の削り調整。 内面は轆轤成形。粗いナデ調整が見られる。	17個円形	泥釉	無	仲上はんかなし	窓より左側僧形像の下部に、縦3mm程度の圧痕が数列を単位に数条見られる。方向や幅に機械性が無く、文様の一部か調整痕の一部なのか判然としない。 喜名・知花焼か？
第12図　2 図版18　2	②	奥棚	陶製 無頸 甕形 (ﾎﾞｰｼﾞｬｰ)	28.4 39.8 21.5 54.4	平葺形	3個/3方	①凹線2条 ②凹線1条 ③凹線1条 ④－	窓の左右に3体ずつ僧形像を配置する。窓側の両像は他の像と比較して一回り小さい。左側の各像の下位には線彫りによる蓮華が見られる。また、右側の像の下位には大小の蓮華が計2つ描かれている。更に、左右の像の外側と窓の下方に蓮葉が1つずつ見られる。	外面、轆轤成形。丁寧なナデ調整を全面に施す。また削り調整も見られる。底部立ち上がりを横位の削り調整。 内面は轆轤成形。粗いナデ調整が見られる。	11個円形	泥釉	無	無	窓の上部には、焼成時の降灰による自然釉がかかる。 喜名・知花焼か？
第13図　3 図版18　3	③	奥棚	陶製 無頸 甕形 (ﾎﾞｰｼﾞｬｰ)	24.3 36.3 21.3 51.8	唐破風形	3個/3方	①凹線1条 ②凹線1条 ③凹線1条 ④－	窓左側に線彫りによる草花文（植物種は不明）、右側に線彫りによる蘇鉄文が見られる。	外面、轆轤成形。全面ナデ調整及び削り調整が施されている。胴下半部から底部にかけて横位の削り調整。内面、轆轤成形後、粗いナデ調整。	8個円形	無	無	無	据えた時、やや左に傾く。 湧田焼か？
第14図　4 図版18　4	④	シルヒラシ	陶製 無頸 甕形 (ﾎﾞｰｼﾞｬｰ)	27.4 43.3 21.8 58.0	平葺形	5個/1方4円	①凹線1条 ②凹線1条 ③－ ④－	窓の左右に線彫りによる蓮華文・蓮葉文が一対見られる。口唇部に重ね焼きの痕を剥ぎ取ったと思われる剥離痕が見られる。	外面、轆轤成形。全面ナデ調整及び削り調整が施されている。胴下半部から底部にかけて横位の削り調整。内面、轆轤成形後、粗いナデ調整。	無	泥釉	無	無	口唇部の剥離痕は形状から珊瑚枝の痕だと考えられる。 喜名・知花焼または湧田焼か？
第14図　5 図版18　5	⑤	左棚	陶製 無頸 甕形 (ﾎﾞｰｼﾞｬｰ)	31.4 45.6 21.6 59.8	唐破風形	3個/3方	①凹線1条 ②凹線1条 ③凹線1条 ④－	無	外面、轆轤成形。全面ナデ調整及び削り調整が施されている。胴下半部から底部にかけて横位の削り調整。内面、轆轤成形後、粗いナデ調整。	5個円形	無	有	無	窓の庇の上方に「〇」の字の窯印が有る。 壺屋焼。
第15図　6 図版18　6	⑥	シルヒラシ	陶製 無頸 甕形 (ﾎﾞｰｼﾞｬｰ)	28.1 35.9 23.4 51.2	平葺形	3個/1方2円	①凹線2条 ②凹線2条 ③凹線1条 ④－	無	外面、轆轤成形。全面ナデ調整及び削り調整が施されている。胴下半部から底部にかけて横位の削り調整。内面、轆轤成形後、粗いナデ調整。	5個半円型	無	有	無	窓の左側に浅い沈線で、「↑」・「ナ」などの窯印が並列して見られる。 壺屋焼。

第 10 表　10 号墓出土蔵骨器（身）観察表

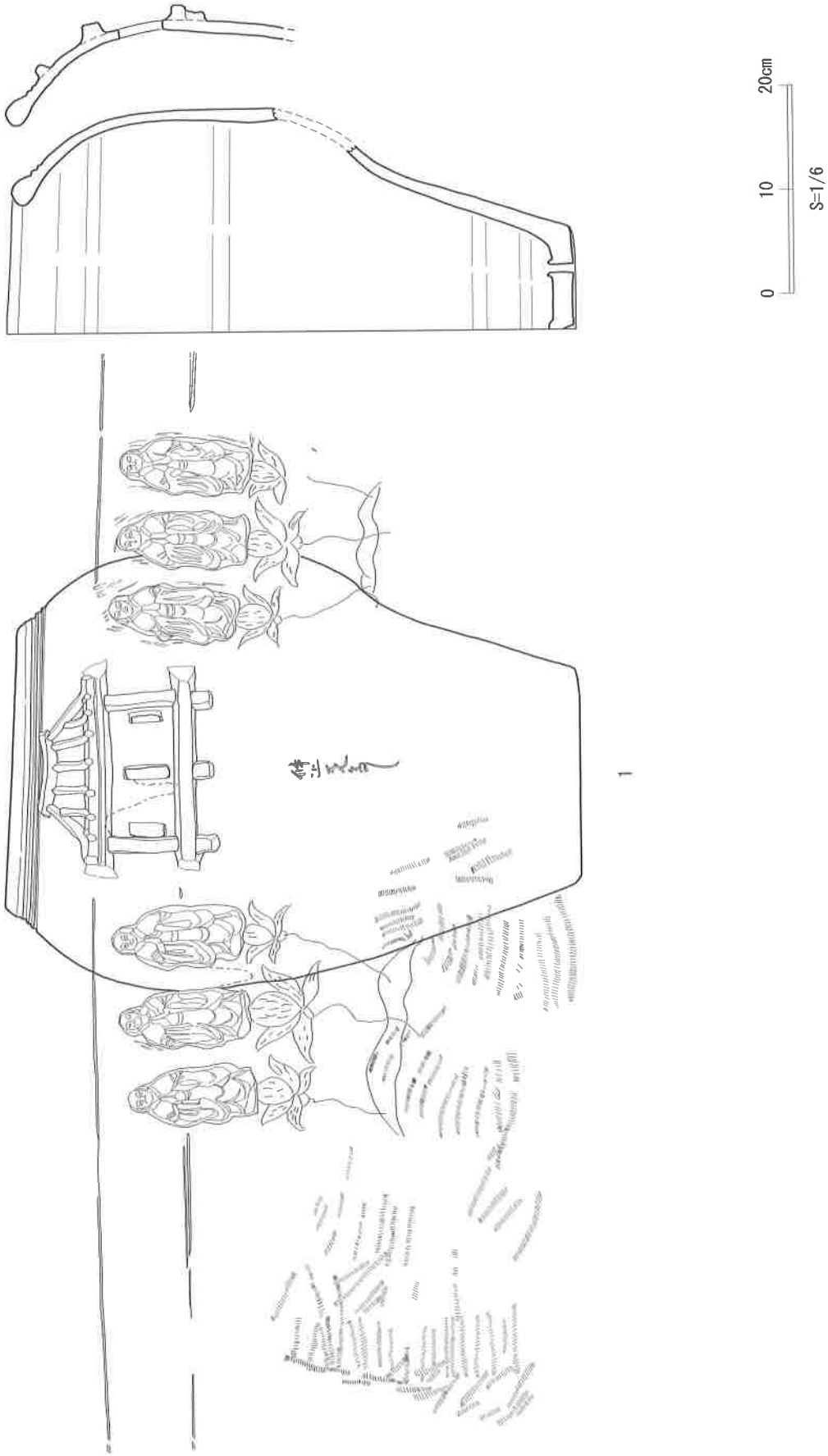
（単位：cm）

挿図番号 図版番号	取上番号	出土地点	型式（名称又は仮称）	口径 胴径 底径 器高	窓枠／屋門	窓数／形	帯	文様	調整痕	底面円孔	釉薬等	窯印	銘書	備考
第15図　8 図版19　2	—	シルヒラシ	転用蔵骨器（沖縄産）	10.7 — 3.8 5.35	—	—	—	無	外面、轆轤成形。全面ナデ調整及び削り調整が施されている。胴下半部から底部にかけて横位の削り調整。内面、轆轤成形後、ナデ調整。	無	泥釉	—	無	底部から緩やかに立ち上がり、最大径は胴部中央にある。頸部は無く、口唇は丸みをもつ。肩部には2条の沈線が廻り、また直径約2.8cmの楕円形の孔が、2箇所みられ、対角線上に配されている。暗褐色の胎土および泥釉から喜名・知花焼か。内底面と肩部の片側の孔には細かな石灰が付着している。

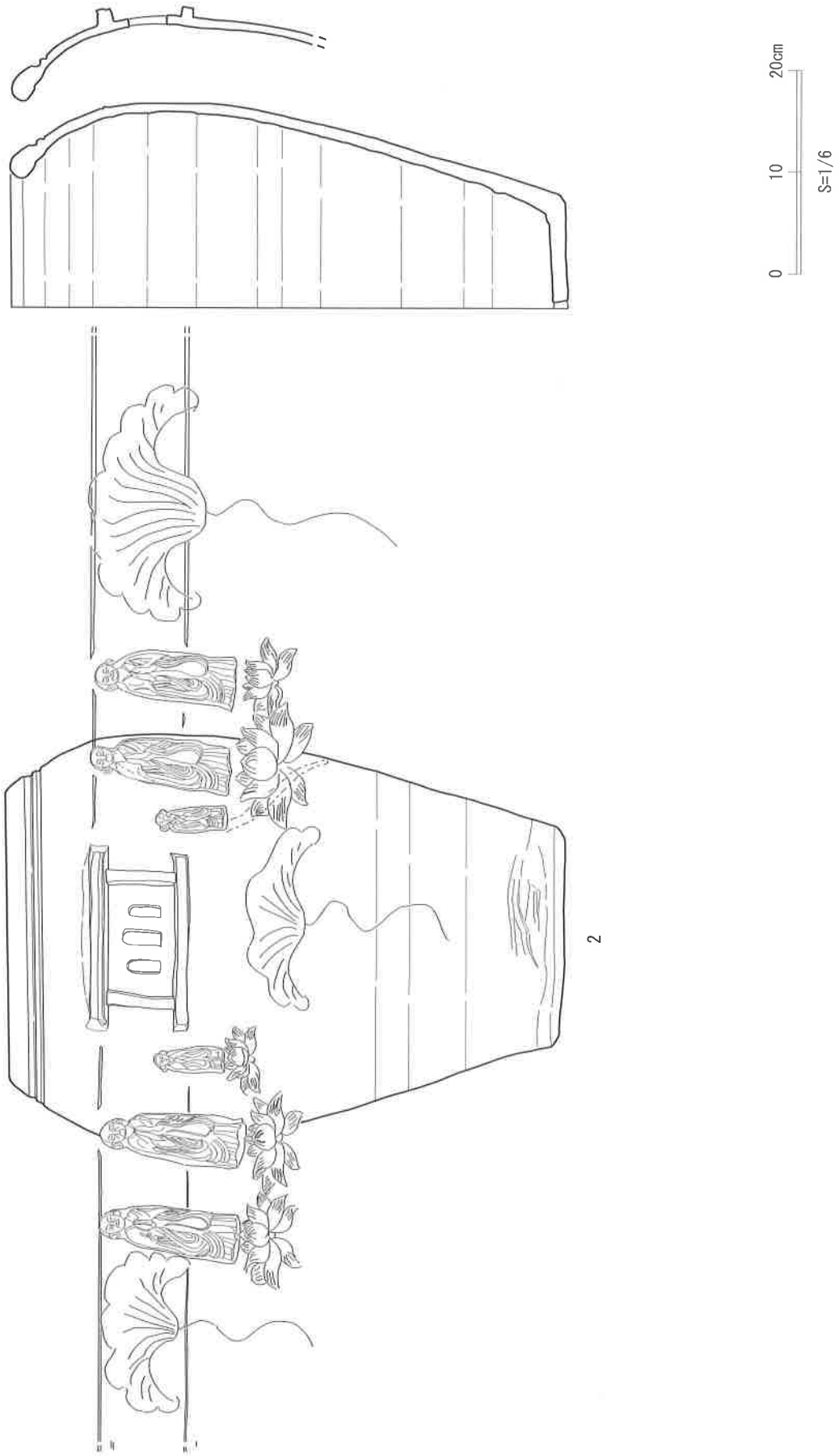
第 11 表　10 号墓出土蔵骨器（蓋）観察表

（単位：cm）

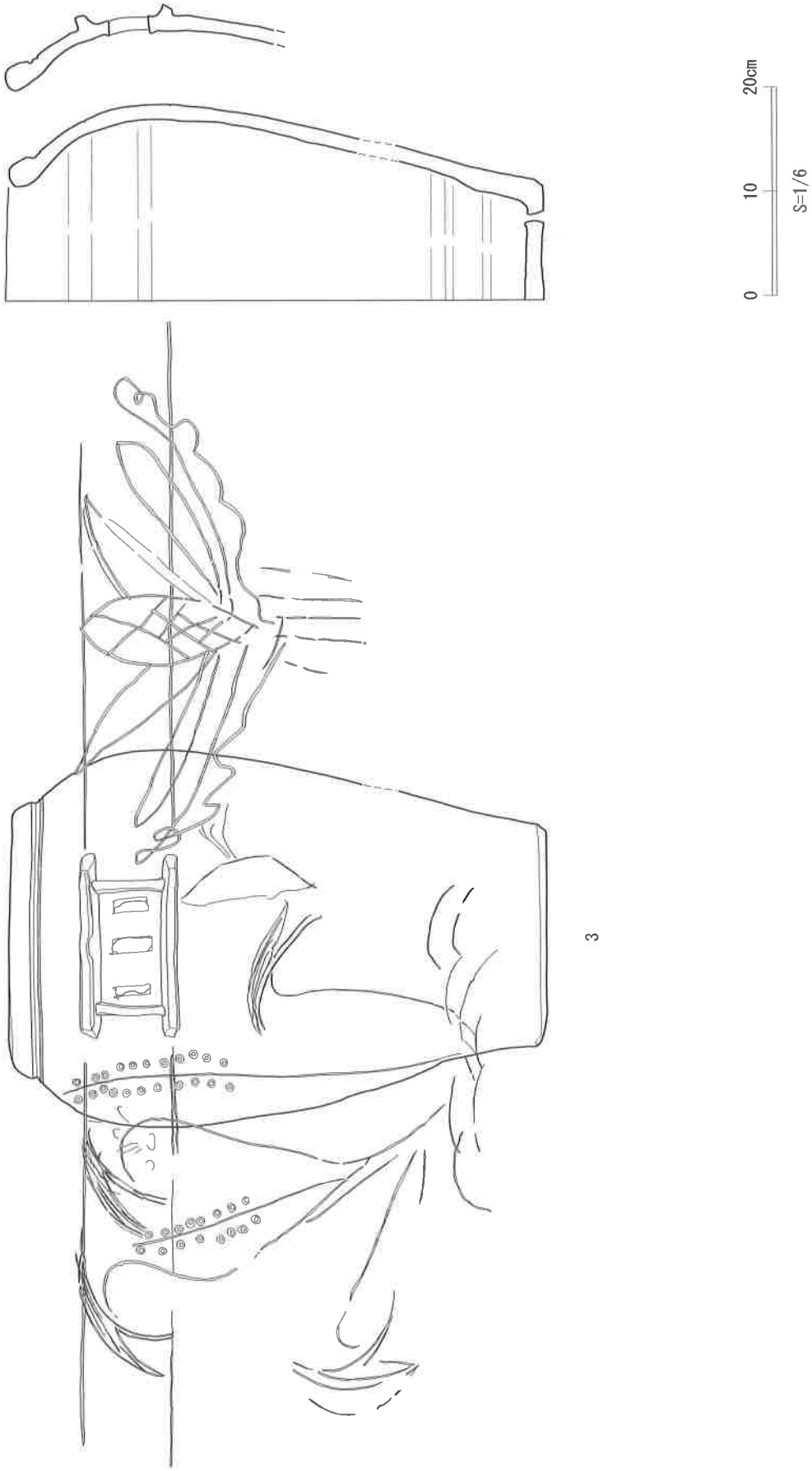
挿図番号 図版番号	出土地点	型式（名称又は仮称）	上部径 口径 内径 器高 体部高	つまみ形	つまみ接合部孔 つまみ台 鍔 き（かえり）	文様	調整痕	釉薬等	銘書	死去年	洗骨年	備考
第15図　9 図版19　3	奥棚	陶製無頸甕形（ﾎﾞｰｼﾞｬｰ）	8.3 31.2 — 13.8 8.4	宝珠形	有孔 有：1段 無 無	つまみ台から棟状の凸帯が放射線状に4本伸び、体部を4つに区画する。凸帯の下端部には左右対称の渦巻状の装飾を棟と平行に貼り付け、その二股の部分には棘状の貼り付けが見られる。体部の各区画には、線彫りの草花文がそれぞれ施される。草花文は2種類以上あると見られる。	外面、轆轤成形。体部ナデ調整の後、つまみ台下方から体部中央まで削り調整が見られる。つまみ台と区画帯を貼り付け後、接合部をナデつける。	無	宮城村玉貫細工又吉仁也同人妻まな卯七月七日洗骨	不明	不明	全体的に丁寧な造りで、草花文の線彫りも細く鋭い。渦巻状の貼り付けは粘土紐を折り曲げたような厚みがある。器面、二次焼成によるものか光沢は無く、片面石灰が厚く付着する。
第16図　10 図版19　4	奥棚	陶製無頸甕形（ﾎﾞｰｼﾞｬｰ）	6.6 31.7 — — 8.7	宝珠形	有孔 有：1段 無 無	つまみ台から棟状の凸帯が放射線状に5本伸び、体部を5つに区画する。凸帯は体部中央まで伸び、その下端部には同図9と同様に左右対称の渦巻状の装飾を棟と平行に貼り付ける。二股の部分には棘状の貼り付けが見られる。体部の区画内は無文である。	外面、轆轤成形。体部ナデ調整の後、つまみ台下方から体部中央まで削り調整が見られる。つまみ台と区画帯を貼り付け後、接合部をナデつける。	無	無	—	—	棟状凸帯の下端にある渦巻状の装飾は第15図9のものよりも幅が薄く稜を持つ。器面、二次焼成によるものか光沢は見られない。
第16図　11 図版19　5	墓室	陶製無頸甕形（ﾎﾞｰｼﾞｬｰ）	7.8 30.7 — 9.8	宝珠形？	有孔 有：1段 無 無	体部に櫛描きによる草花文が見られる。	外面、轆轤成形。体部ナデ調整の後、つまみ台下方から体部中央まで削り調整。内面、轆轤成形後、粗くナデ調整。	無	本那覇瀬長村鍛治細工うた城間村被死 /■子■■■/かま戸比	不明	不明	
第16図　12 図版19　6	墓室	陶製無頸甕形（ﾎﾞｰｼﾞｬｰ）	7.9 33.5 — 13.9 9.8	宝珠形	有孔 有：1段 無 無	体部に櫛描き波状沈線文2条。次につまみ台から放射状に5条の櫛描き沈線で区画。一区画の体上部に花文のような線彫りの文様が見られる。	外面、轆轤成形。体部ナデ調整の後、つまみ台下方から体部中央まで削り調整。内面、轆轤成形後、粗くナデ調整。	無	無	—	—	
第16図　13 図版19　7	奥棚	陶製無頸甕形（ﾎﾞｰｼﾞｬｰ）	8.4 30.4 — 12.0 8.0	宝珠形	有孔 有：1段 無 無	つまみ台下部に櫛描きによる波状沈線文が1条。体部の中央には放射状に9本の櫛描き沈線を施す。	外面、轆轤成形。体部ナデ調整の後、つまみ台下方から体部中央まで削り調整。内面、轆轤成形後、粗くナデ調整。	無	宮城むら■■改	不明	不明	
第16図　14 図版19　8	シルヒラシ	陶製無頸甕形（ﾎﾞｰｼﾞｬｰ）	— 32.0 — 12.8 10.3	饅頭形	無孔 無 無 無	無	外面、轆轤成形。体部ナデ調整の後、つまみ台下方から体部中央まで削り調整。口唇部ナデ調整により、凹面に仕上げる。内面、轆轤成形。	無	豊見　豊見城間切伊羅波村　生鍛治細工城間村比嘉妻	不明	不明	伊良波村か？
第17図　15 図版20　1	シルヒラシ	陶製無頸甕形（ﾎﾞｰｼﾞｬｰ）	10.0 30.0 — 8.8 —	無	無孔 無 無 無	無	外面、轆轤成形。体部ナデ調整。内面、轆轤成形、体部ナデ調整。	無	浦添間切屋富祖村故みや里■■■/妻	不明	不明	外面に二箇所、内面に一箇所でオニノツノガイ科またはウミニナ科と思われる小型の巻貝の跡が見られる。
第17図　16 図版20　2	シルヒラシ	陶製有頸甕形（ﾏﾝｶﾞﾝ釉）	12.5 31.2 25.4 15.7 9.8	宝珠形	有孔 有：1段 有：水平 有：12mm	つまみ台の下方、三箇所に渦巻状の装飾を貼り付ける。残存状況の破損面から第15図9や第16図10のように、二股の部分に棘状の貼り付けがあったと見られる。	外面、轆轤成形。体部は全面にナデ調整。内面、轆轤成形。粗くナデ調整。	マンガン釉	寅ノ二月九日/西原筑登之	不明	不明	焼成の際に強い熱を受けたのか、鍔の一部が反り上がる。マンガン釉を刷毛により施釉。



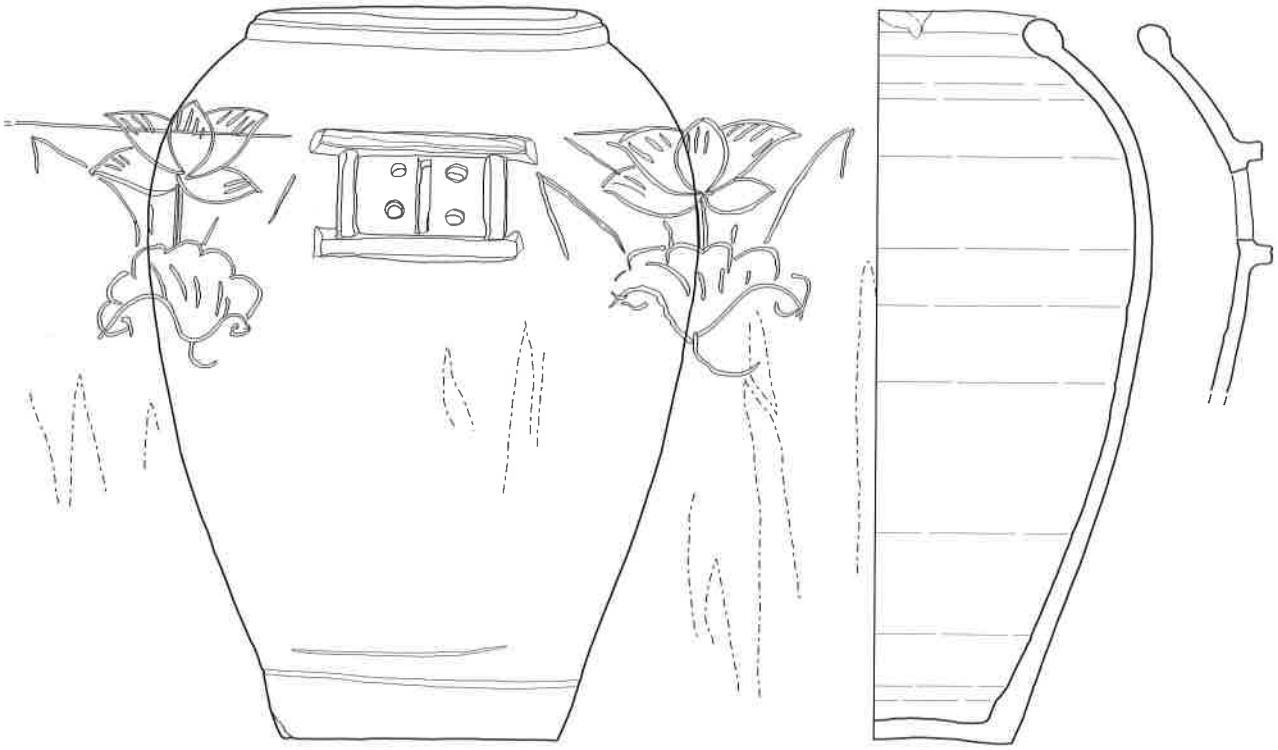
第 11 図　10 号墓出土遺物 1



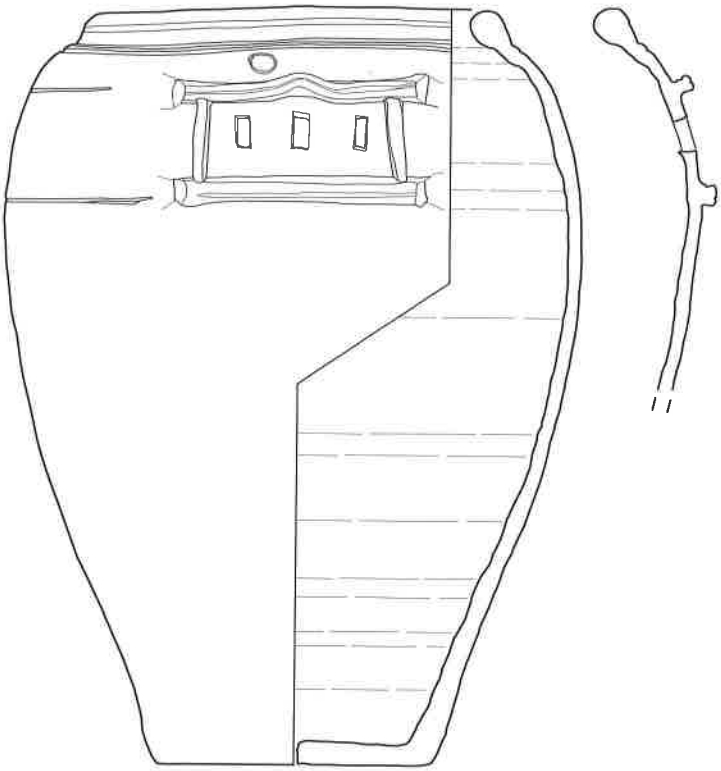
第 12 図　10 号墓出土遺物 2



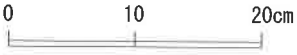
第 13 図　10 号墓出土遺物 3



4

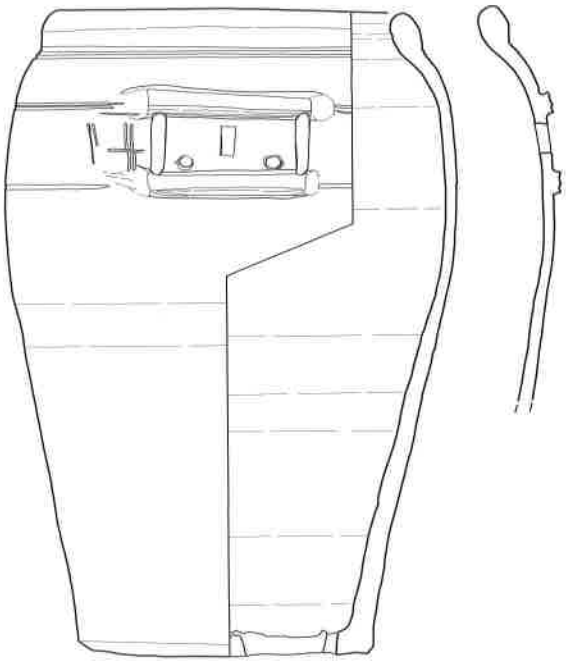


5

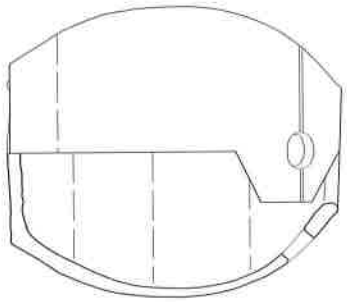


S=1/6

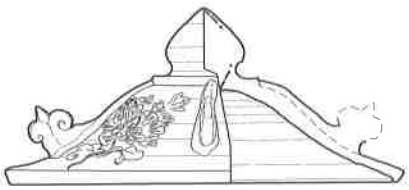
第14図　10号墓出土遺物4



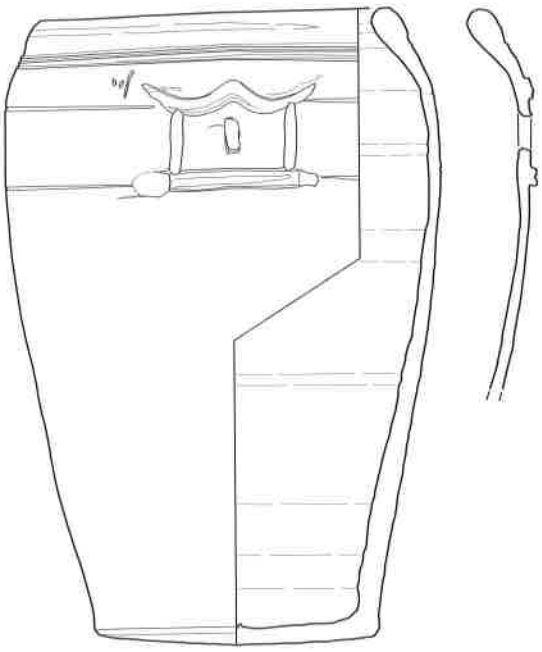
6



8



9

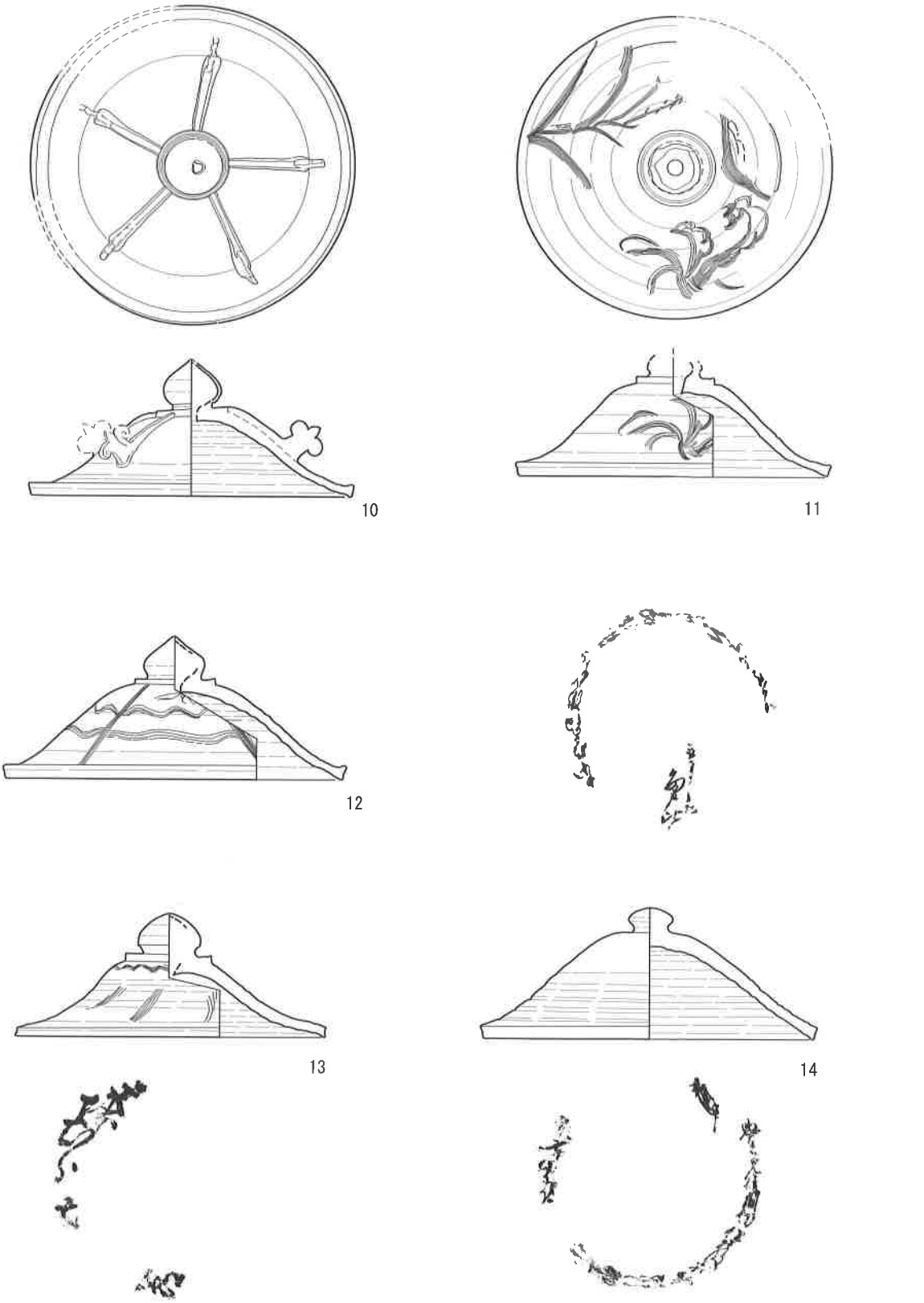


7

0 10 20cm

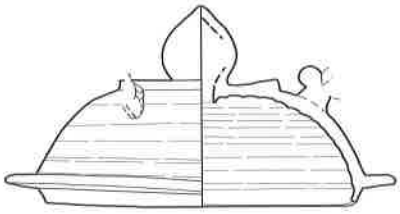
S=1/6

第 15 図　10 号墓出土遺物 5



第16図　10号墓出土遺物6

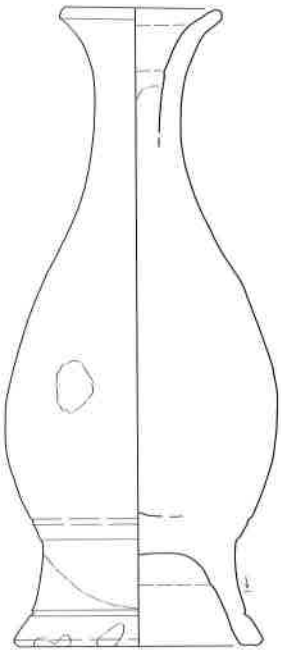
15



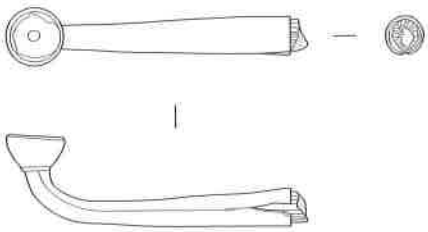
16

0 10 20cm

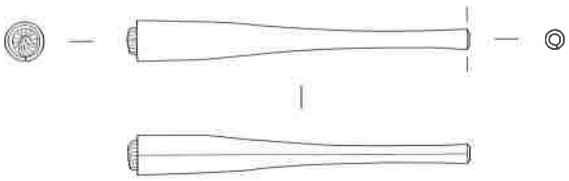
S=1/6



17



18



19

0 S=1/2 10cm

第 17 図　10 号墓出土遺物 7

第４節　16号墓

外　観　16号墓は、調査区北東側斜面に立地し、今回報告する墓では最も南東に位置する堀込墓である。墓は基盤である石灰岩を横方向に掘り込み、手前より墓庭、墓口、墓室を成形する。墓全体を掘り・削りによって仕上げた、いわゆる総堀込の墓である。屋根部の形状は削平により判然としないが、墓正面の上部は庇状の直線的に削り出された部分が残存しており、破風墓か平葺墓などの正面観を連想させる。墓の主軸方向は、北東－南西である。

調査前は、墓口にはコールイシ〈香炉石〉が原位置にあったものの蓋石は無く、開口した状態であった。墓室内の蔵骨器は横転し、蔵骨器の蓋や奥壁にある「イケ」の石灰岩製の蓋石は外された状況であったことから後世に人為的な撹乱を受けた形跡が伺えた。

墓口は幅0.76m、高さ約1.4mの縦長の長方形で墓室までの奥行きは1.04mを測る。ハカヌナー〈墓庭〉は幅2.3～2.5m、奥行きは残存部で1.8mを測る。

墓室内　墓室はシルヒラシの平面形で横長の方形を成し、シルヒラシの奥行き約1.7m、幅約３mで、約5.1㎡の広さを有する。天井までの高さは約1.7mを測る。シルヒラシ部の天井はほぼ平坦だが、奥棚部の天井では奥に向けて傾斜をみせる。シルヒラシ基部は石質に起因する凹凸がみられるが、琉球石灰岩の石粉を敷き詰めて平坦にしている。

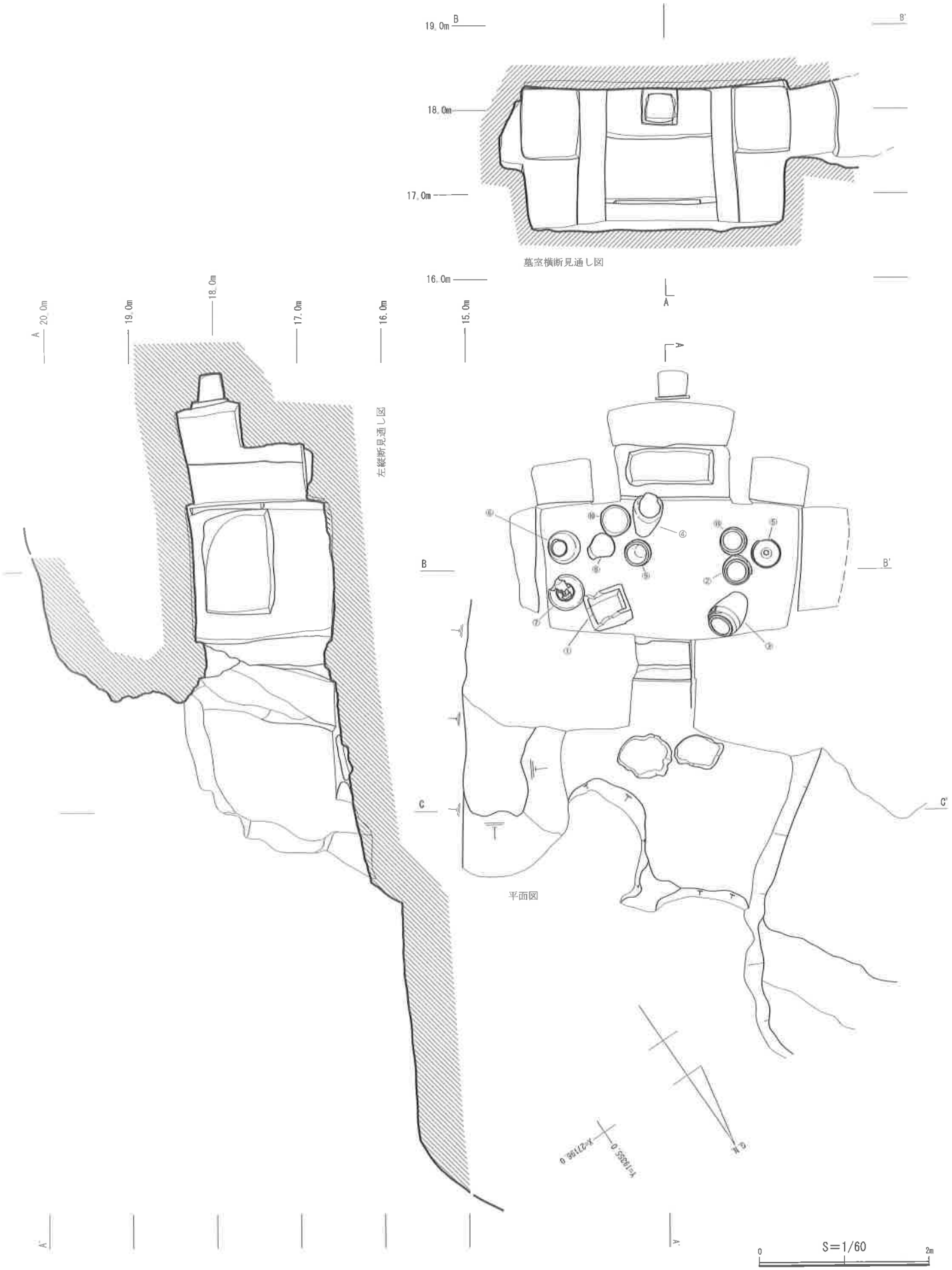
棚は奥壁及び両側壁にそれぞれ凸状に岩盤を掘り込んで造られるが、奥壁の棚は特異な造りをしている（第18図墓室横断見通し図を参照）。奥壁は柱状の縁取り２本によって三つに区画され、それぞれの区画上部に棚が掘り込まれる。

中央の区画は前後二段の雛壇状に成形されるが、手前の段（一段目）は極端に低く、段上面は内側が浅く掘り窪められていることから、蔵骨器を設置するには不自然であり、「棚」ではない可能性がある。奥行きは0.62m、幅1.29mを測り、墓室基底面からの高さは0.20mである。奥の棚（二段目）は他の棚に比べ、より奥まった高い位置に造られる。奥行きは0.50m、幅1.34mを測り、高さは基底面から約0.9mである。

奥壁右棚は奥行き0.48m、幅0.67mを測り、基底面からの高さは0.80mである。奥壁左棚は奥行き0.52m、幅0.65mを測り、基底面からの高さは0.81mである。

奥壁の中央には「イケ」と称される小さな横穴が掘り込まれる。この横穴は、棚上面から更に段を設けて掘り込まれており、内部は平面形で方形、断面形で奥にやや窄まり、奥行き0.31m、幅0.31m、高さは0.32～0.26mを測る。開口部は石灰岩製の蓋石によって閉塞するようになっており、蓋石の中央には縦長の孔が２個穿たれている。

墓室右壁に掘り込まれた右棚は石灰岩礫を充填し、漆喰で塞がれている。奥行き0.30m、幅1.24mを測り、高さは基底面からの0.70mである。掘り込みが浅く、四隅の角が明瞭でないなど粗雑なことから何らかの理由によって、掘削途中で再び埋め戻された状況が伺える。墓室左壁に掘り込まれた左棚は奥行き0.52m、幅1.20mを測り、基底面からの高さは0.71mである。



第18図　16号墓遺構図

出土遺物（第 19～22 図・図版 20 の 6～図版 22）

16 号墓からはシルヒラシに安置された蔵骨器を確認した。棚からの出土が見られなかったのが特徴である。確認できた蔵骨器（身）の完形個体は 12 点で、その内訳は石製家形入母屋蔵骨器が 1 点、ボージャー厨子が 6 点、転用蔵骨器の宮古式土器が 2 点、沖縄産無釉陶器が 3 基である。マンガン掛け有頸蔵骨器の蓋が 1 点見られたがそれに対する身の出土が無かった為、ボージャー厨子や転用蔵骨器に使用していた可能性がある。確認できた 12 点のうち、ボージャー厨子が 50%、転用蔵骨器が約 40%を占めており、1 号墓や 10 号墓とも異なる様相を示していた。石製蔵骨器以外で身と蓋のセット関係が確認できる資料が 1 点あったが、その他の蔵骨器について他墓同様、セット関係は不明である。蔵骨器以外の遺物として、鉄釘、銭貨、簪と思われる木製品、また戦争遺物の鉄製品などが出土した。以下、下記のように大別し、個々の遺物の詳細については観察表に記す。

蔵骨器（身）（第 19 図 1～第 21 図 7）

出土した身のうち特徴的な 7 点を図化した。

(1) 石製家形入母屋蔵骨器（第 19 図 1、図版 20 の 6）

琉球石灰岩製の入母屋式の身である。シルヒラシから出土した。正面の窓を囲むように線彫りの枠が施され、両側面にも同様な枠が見られた。正面窓右側の下方に墨書の銘書が確認できるが、残りが悪く判読不明である。

(2) 陶製無頸蔵骨器（ボージャー厨子）（第 20 図 2～3、図版 21 の 1～2）

図化した 2 点のボージャー厨子は両者とも壺屋焼と見られる。第 20 図 2 は庇が唐破風形で、庇上方に川の字の窯印が確認できる。第 20 図 3 は庇が平葺形で、窯印は見られなかったが窓上方に線彫りの波状文が 1 条施されている。

(3) 転用蔵骨器（第 20 図 4～5・第 21 図 6～7、図版 21 の 3～6）

大型の沖縄産陶器壺等を転用したものと、宮古式土器を転用したものの 2 種類の転用蔵骨器が出土した。

①沖縄産陶器（第 20 図 4～5、図版 21 の 3～4）

第 20 図 4 は口縁部から肩部にかけて円形状に打割され、蔵骨器として使用した喜名焼または知花焼と見られる壺である。シルヒラシでも最も奥棚側に安置されていた。

第 20 図 5 は口縁部から胴中央部にかけて縦状に打割され、蔵骨器として使用した壺屋焼とられる水甕である。第 22 図 11 の蓋とセット関係にある。

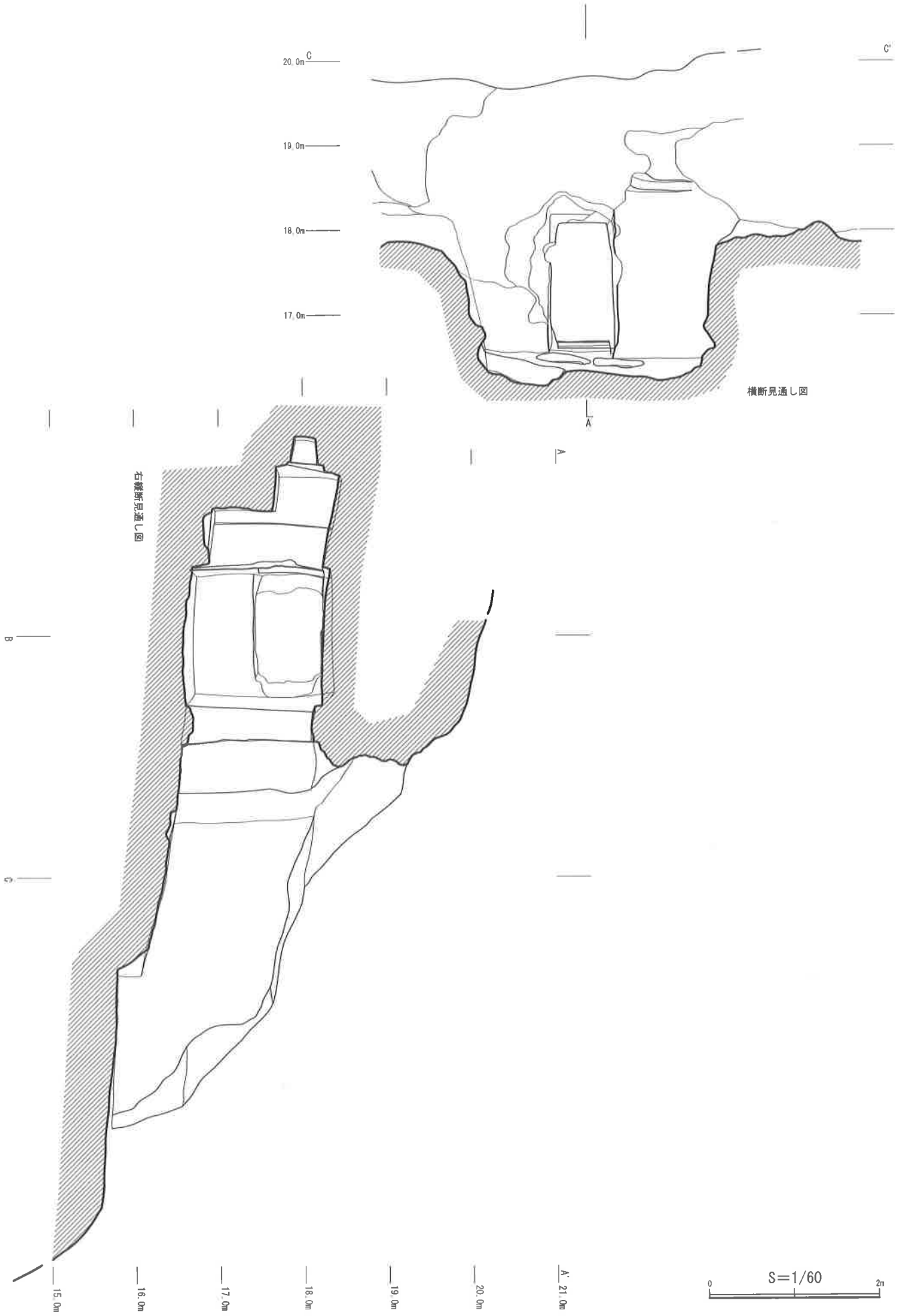
②宮古式土器（第 21 図 6～7、図版 21 の 5～6）

第 21 図 6 は完形の宮古式土器である。正面胴部中央に長径約 5 ㎝の楕円状の孔が穿孔される。

第 22 図 7 は接合により完形資料となった宮古式土器である。最大径は肩部にあり、正面胴部中央に直径約 3 ㎝の孔が穿孔される。頸部直下から肩部にかけて墨書による銘書がみられ、「男(故)かまら/■■■■/父■」のように縦に 1 条の線で消された跡が見られる。口縁部には対角線上に配された半円状の抉りが見られた。

蔵骨器（蓋）（第 21 図 8～10・第 22 図 11～14）

(1) 石製家形入母屋蔵骨器（第 19 図 1、図版 20 の 6）


C
C'
20.0m
19.0m
18.0m
17.0m
横断見通し図
A
A'
右縦断見通し図
B
B'
15.0m
16.0m
17.0m
18.0m
19.0m
20.0m
21.0m
S=1/60
0
2m

上述した琉球石灰岩製の入母屋蔵骨器の蓋と考えられる資料である。墓庭の右袖壁付近埋土より出土した。16号墓内出土の石製蔵骨器は1点のみであり、同図で示した身とセット関係になる資料と考えるのが妥当だと思われる。

(2) 陶製無頸蔵骨器（ボージャー厨子）（第20図8～10・第21図11～13、図版22の1～7）

8点出土した蓋のうち、特徴的な6点を図化した。ボージャー厨子の蓋は、つまみや台の有無により3種に分類した。

①つまみ台が有るもの（第21図8～9、図版22の1～2）

第21図8は宝珠形のつまみを有し、無孔である。外面体部に波状沈線文を1条施される。

第21図9は扁平形のつまみを有し、同図8と同じく無孔である。文様は見られない。

②つまみ台が無いもの（第21図10～第22図11、図版22の3～4）

第21図10及び第22図11は扁平形のつまみを有する。10は内面銘書にて「乾隆三拾三年」（1768年）が確認できる。両者とも内外面に轆轤成形が明瞭に見られる。

③つまみ台及びつまみが無いもの（第22図12～13、図版22の5～6）

第22図12～13はつまみ台の成形が見られず、つまみも無い笠形を呈する蓋である。両者とも無文であり、内外面に轆轤成形が明瞭に見られる。12は口唇を方形に作り出す。内面銘書にて「嘉慶二年」（1797年）が確認できる。

(3) 陶製有頸蔵骨器（マンガン釉）（第22図14、図版22の7）

大振りの宝珠形を呈した有孔つまみでつまみ台は2段を数える。鍔内面に墨書による銘書が見られ、「嘉慶八年」（1803年）が確認できる。

銭貨（第22図15～17、図版22の8～10）

本古墓出土の銭貨は無文銭（鳩目銭）で複数枚が錆（緑青）によって固着している。このことから、16号墓でも1号墓と同様に、複数枚の銭貨が束ねられた状態で本古墓に納められたことが考えられる。

第22図15は2枚の無文銭が固着している資料で、直径1.90cmのものと直径1.85～1.75cmのものが固着している。重量は1.46gを測る。

第22図16はサイズが異なる鳩目銭が3枚固着している資料である。直径1.45cmの無文銭直径1.25ｃｍの無文銭と1.05ｃｍの無文銭が挟んでいる。3枚固着した銭貨の厚さは0.3cm、重量は6.8gを測る。

第22図17は5枚の無文銭が錆によって固着している資料である。5枚の銭貨のサイズは近似しており、直径1.14cmのものが2枚、直径1.1cmのものが1枚、直径0.95cmのものが1枚、0.85cmのもの1枚となっている。固着した資料の厚さは0.34cm、重量は0.70gを測る。

金属製品　鉄釘（図版無し）

16号墓出土の釘は1点が確認されているが、残存状況が悪いため、図化を見送った。本古墓出土の鉄釘は丸釘で、緩やかに屈曲している。胴部のみが残存しており、頭部及び尖端が欠損している。胴部の残存長は2.05cm、径は0.4～0.3cm。重量は0.32gを測る。

第12表　16号墓出土蔵骨器（身）観察表

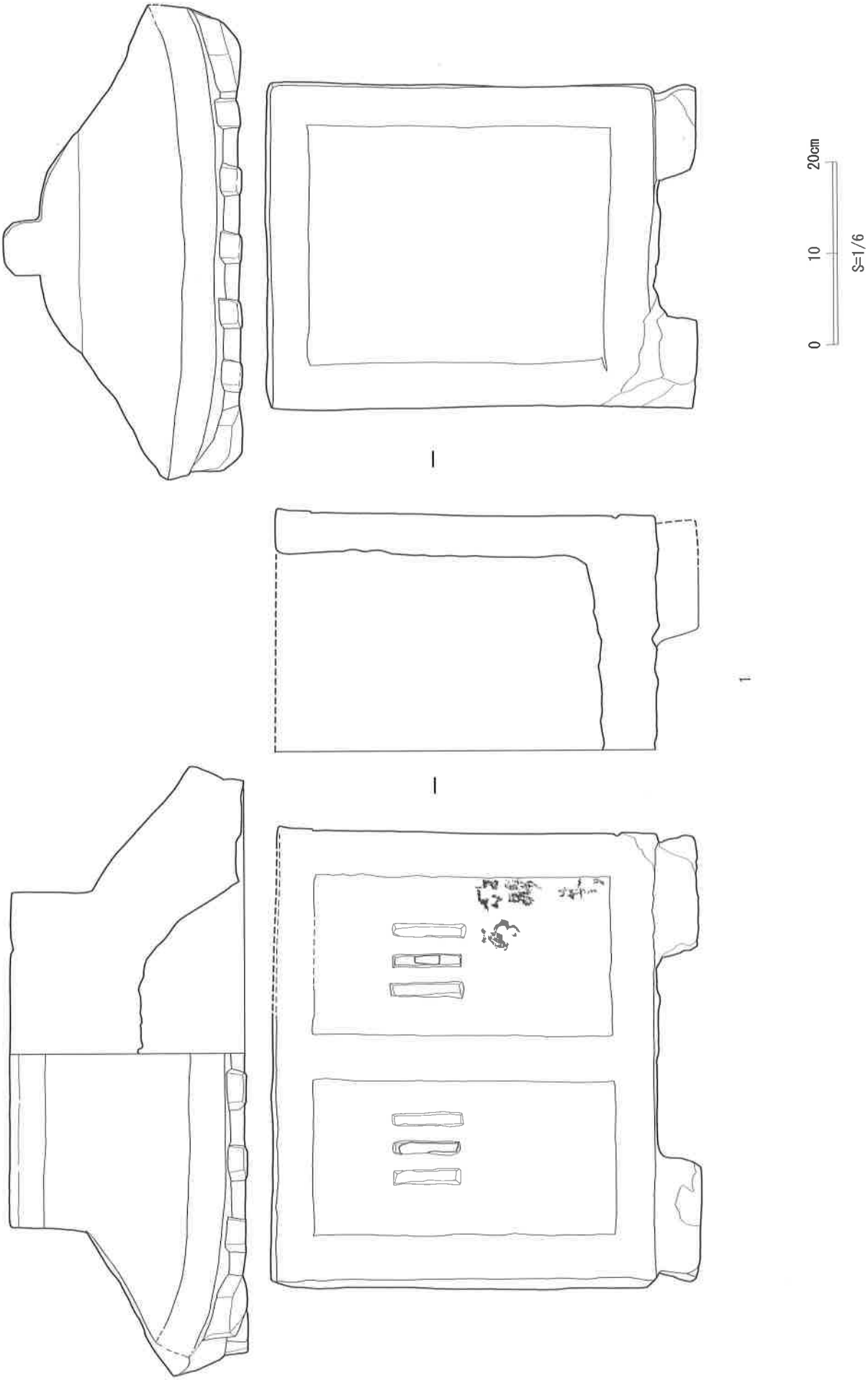
（単位：cm）

挿図番号 図版番号	取上番号	出土地点	型式 （名称又は仮称）	口径 胴径 底径 器高	窓枠／屋門	窓数／形	帯	文様	調整痕	底面円孔	釉薬等	窯印	銘書	備考
第19図　1 図版20　6	①	シルヒラシ	石製家形 （入母屋）	器高 47.5 桁長 51.0 梁長 36.0	—	2つ/ 不定形	—	正面左右に横1.5cm×縦7.5cmの長方形の堀込が3箇所ずつみられ、それぞれ中央の堀込のみ内部へ貫通している。また堀込を囲むように、線彫りによる枠が左右施される。両側面にも同様の枠がある。背面は施されていない。	外面は研磨が施されるが、内面は削り出しのままである。調整がされておらず、ノミの削り痕が明瞭に残る。	—	—	—	故妙　■山/■(■)	
第20図　2 図版21　1	②	シルヒラシ	陶製 無頸 甕形 (ﾎﾞｰｼﾞｬｰ)	25.6 36.6 22.3 47.4	唐破風形	3個/ 3方	①凹線2条 ②凹線1条 ③凹線1条 ④—	無	外面、轆轤成形。丁寧なナデ調整を全面に施す。また削り調整も見られる。底部立ち上がりを横位の削り調整。 内面は轆轤成形。粗いナデ調整が見られる。	5個 円形	無	有	無	庇の上方に天地逆となる「川」の窯印。 窓の下方から底部にかけて焼ひずみの亀裂を漆喰により補修し使用している。
第20図　3 図版21　2	③	シルヒラシ	陶製 無頸 甕形 (ﾎﾞｰｼﾞｬｰ)	27.8 39.6 22.3 54.9	平葺形	5個/ 1方4円	①凹線2条 ②凹線1条 ③凹線1条 ④—	庇の上方に線彫りの波状文を1条施す。	外面、轆轤成形。全面ナデ調整及び削り調整が施されている。胴下半部から底部にかけて横位の削り調整。 内面、轆轤成形後、粗いナデ調整。	4個 円形	無	無	無	口縁に重ね焼の痕が僅かに見られる。
第20図　4 図版21　3	④	シルヒラシ	転用 蔵骨器 （沖縄産）	— 37.0 18.8 —	—	—	—	無	外面、轆轤成形。全面ナデ調整及び削り調整が施されている。胴下半部から底部にかけて横位の削り調整。 内面、轆轤成形後、粗いナデ調整。肩部に押圧当て具痕が見られる。	無	泥釉	有	無	頸部直下に「十」の窯印。喜名・知花焼または初期壺屋か。
第20図　5 図版21　4	⑤	シルヒラシ	転用 蔵骨器 （沖縄産）	29.8 24.5 40.1 21.7 55.1	—	—	—	肩部に粘土紐の貼り付けによる縄目文が1条。	外面、轆轤成形。全面ナデ調整及び削り調整が施されている。底部付近に横位の削り調整。 内面、轆轤成形後、粗いナデ調整。	無	無	有	無	肩部に「丨十 十」の窯印が見られる。
第21図　6 図版21　5	⑥	シルヒラシ	転用 蔵骨器 （宮古式土器）	19.2 40.5 19.1 45.7	—	1個/ 1円	—	—	外面、轆轤または回転台を利用した成形。全面ナデ・削り調整を丁寧に施す。口縁部は調整が粗く、直口である。内面、全面丁寧なナデ・削り調整。	無	無	無	無	胎土は明赤褐色または灰褐色を呈し、混入物は白色微細粒を含むが少量である。焼成は非常に良好。正面胴部中央に長径約5cmの空気孔が穿孔される。
第21図　7 図版21　6	—	シルヒラシ	転用 蔵骨器 （宮古式土器）	22.6 (45.0) 18.0 45.5	—	1個/ 1円	—	無	外面、回転台を利用した成形。全面ナデ・削り調整を丁寧に施す。口縁部は短く外反し肥厚する。	1個 円形	無	無	故 ~~男かまら~~/ ■■■■/ 父■	胎土は明赤褐色または灰褐色を呈し、混入物は白色微細粒を含む。正面胴部中央に直径約3cmの空気孔が穿孔される。

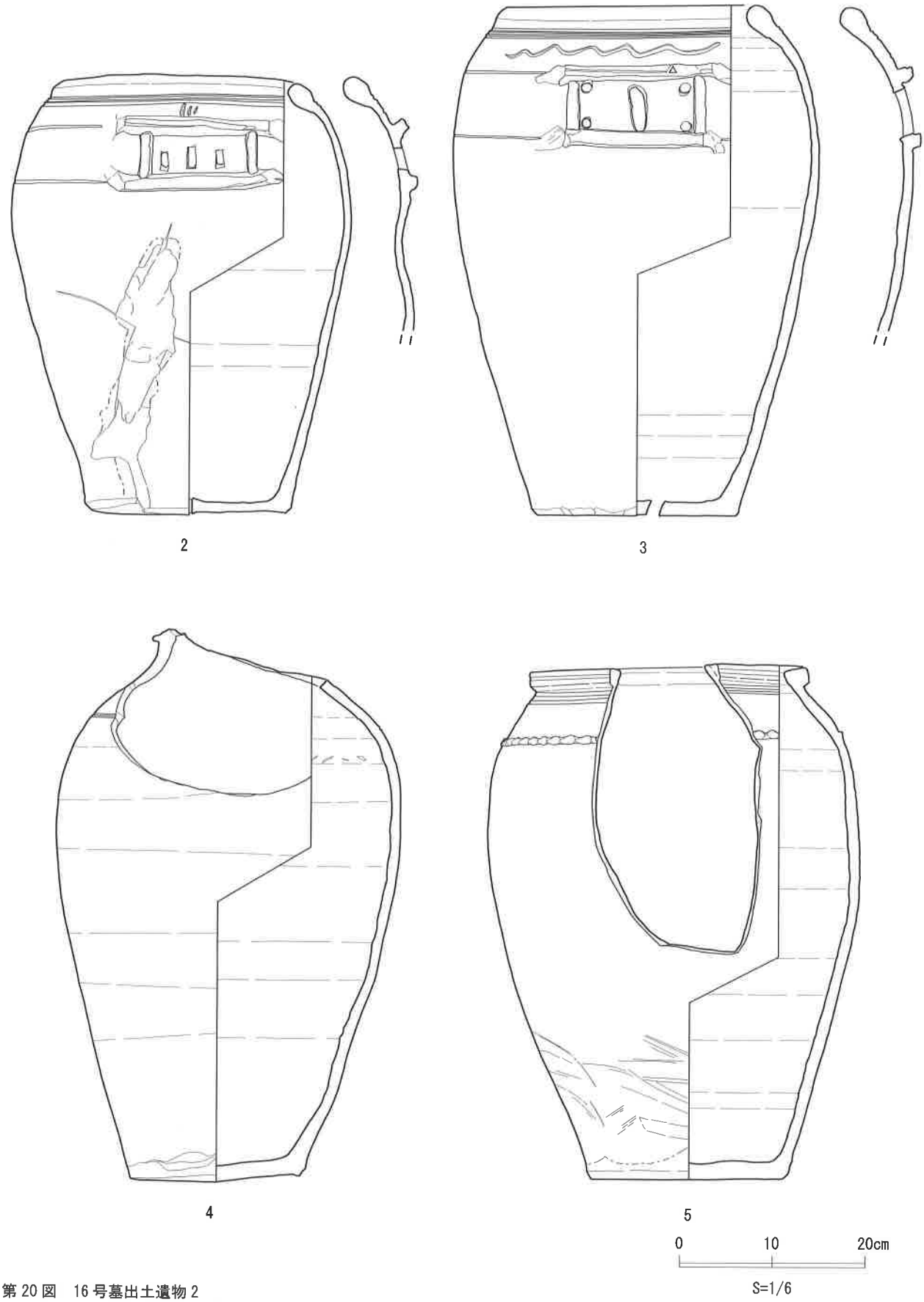
第 13 表　16 号墓出土蔵骨器（蓋）観察表

（単位：cm）

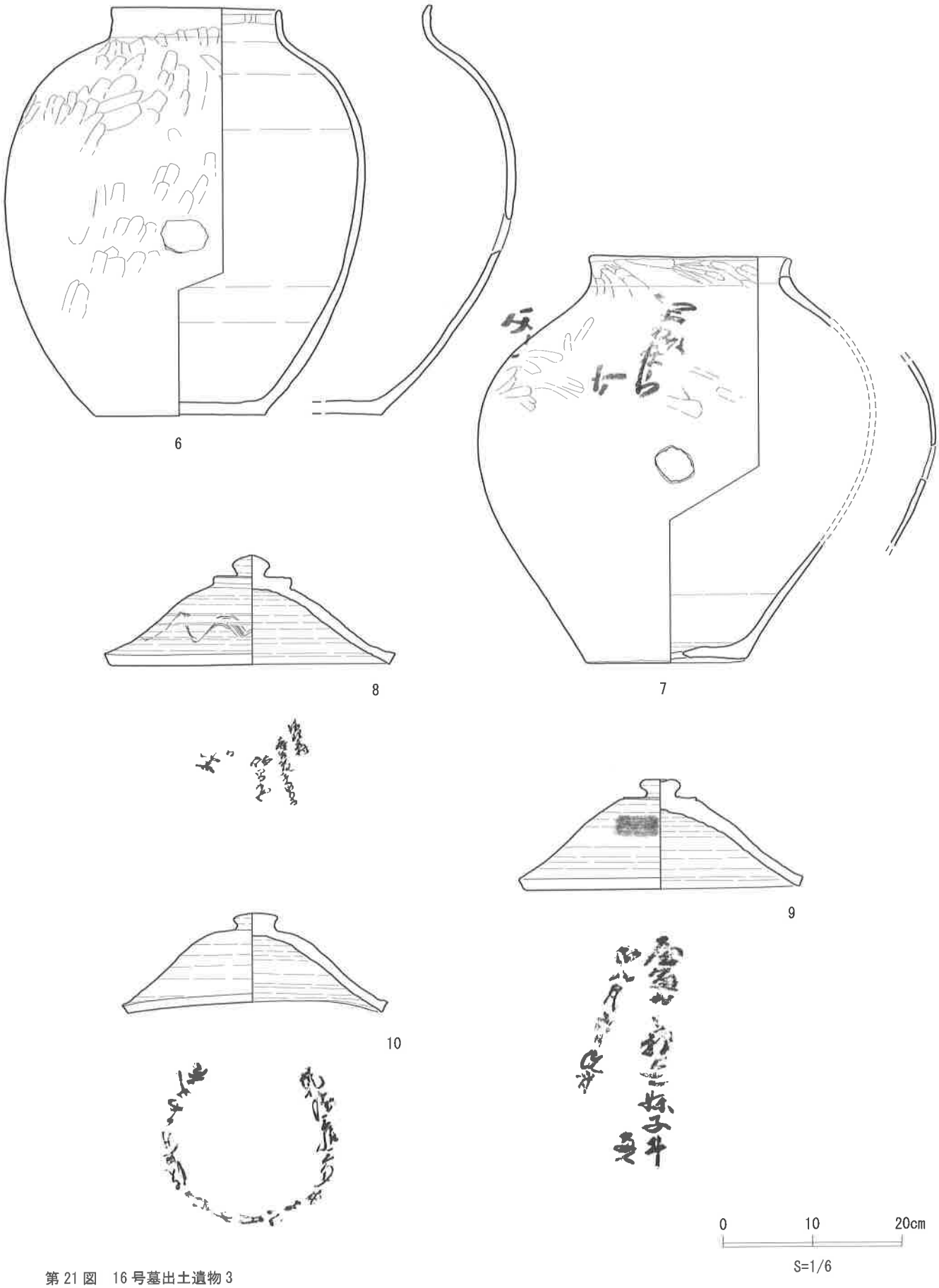
挿図番号 図版番号	出土地点	型式（名称又は仮称）	上部径 口径 内径 器高 体部高	つまみ形	つまみ接合部孔 つまみ台 鍔き（かえり）	文様	調整痕	釉薬等	銘書	死去年	洗骨年	備考
第19図　1 図版20　6	墓庭	石製家形（入母屋）	器高 26.0 桁長 66.5 梁長 52.5	―	―	屋根は入母屋。軒下の垂木まで詳細に表現されている。	外面は研磨が施されるが、内面は削り出しのまま。兆歳がされておらず、ノミの削り痕が明瞭に残る。	―	無	不明	不明	
第21図　8 図版22　1	シルヒラシ	陶製無頸甕形（ボージャー）	8.6 32.4 ― 12.3 10.0	宝珠形	無孔 有：1段 無 無	外面体部に波状沈線文が1条施される。	外面は轆轤成形。体部ナデ調整の後、つまみ台直下を削り調整。内面は轆轤成形後、粗くナデ調整	無	勢理客村/亀谷筑登之親雲上男子/崎間にや/同妻	不明	不明	内面にオニノツノガイ科またはウミニナ科と思われる小型の巻貝の跡が一箇所見られる。
第21図　9 図版22　2	シルヒラシ	陶製無頸甕形（ボージャー）	8.0 31.6 ― 12.4 10.2	扁平形	無孔 有：1段 無 無	無	外面、轆轤成形。体部ナデ調整の後、つまみ台下から体部中央あたりまで削り調整。内面は轆轤成形後、粗くナデ調整。	無	屋富祖親雲上妹子牛/両人/戌八月六日洗骨	不明	不明	内面にオニノツノガイ科またはウミニナ科と思われる小型の巻貝の跡が一箇所見られる。
第22図 10 図版22　3	シルヒラシ	陶製無頸甕形（ボージャー）	― 29.7 ― 11.1 9.2	扁平形	無孔 無 無 無	無	外面、轆轤成形。体部ナデ調整の後、つまみ台下から体部中央あたりまで削り調整。内面は轆轤成形後、粗くナデ調整。	無	乾隆三拾三年戌子八月十六日洗骨かめ又吉	不明	1768年	
第22図 11 図版22　4	シルヒラシ	陶製無頸甕形（ボージャー）	― 31.8 ― 11.4 9.3	扁平形	無孔 無 無 無	無	外面、轆轤成形。体部ナデ調整の後、つまみ台下から体部中央あたりまで削り調整。内面、轆轤成形。粗くナデ調整。	無	（■■）山… 親雲上■■壷ニ安置但壷ニ書記無之ニ付彼婦■八月九日洗骨■時（■■■）壷にも書記無之故誰々と書記候也	不明	不明	文意：〇〇親雲上が〇〇の壷に安置されていて（記録されるべきことがらが書かれていないけど）八月九日に洗骨を行った。誰々の骨は本当は洗骨されるべき時期があったはずだがわからなかったので（書かれていなかったので）…
第22図 12 図版22　5	シルヒラシ	陶製無頸甕形（ボージャー）	7.8 29.3 ― 10.0 ―	無	無孔 無 無 無	無	外面、轆轤成形。体部ナデ調整が施されるが、上部の調整がほとんど見られない。体部ナデ調整の後、つまみ台下から体部中央あたりまで削り調整。口唇を方形に作り出す。内面、轆轤成形。粗くナデ調整。	無	嘉慶二/年十一月/死去　津嘉山筑登之女子/玉金/はあ前	嘉慶二年＝1797年	不明	内面にオニノツノガイ科またはウミニナ科と思われる小型の巻貝の跡が四箇所見られる。その他、約3mmの白色粒が数箇所見られる。
第22図 13 図版22　6	シルヒラシ	陶製無頸甕形（ボージャー）	10.5 33.2 ― 8.8 ―	無	無孔 無 無 無	無	外面、轆轤成形。体部ナデ調整の後、つまみ台下から体部中央あたりまで削り調整。内面、轆轤成形。粗くナデ調整。	無	未　十月二十五日/洗骨/浦添間切/勢理客村/新川筑登之親雲上/女子/まえつあ/んま/泊村まんつ母	無	無	内面にオニノツノガイ科またはウミニナ科と思われる小型の巻貝の跡が二箇所見られる。
第22図 14 図版22　7	シルヒラシ	陶製有頸甕形（マンガン）	12 33.3 26.3 18.9 12.8	宝珠形	有孔 有：2段 有：水平 有：4mm	無	外面、轆轤成形。体部ナデ調整の後、つまみ台下から体部中央あたりまで削り調整。内面、轆轤成形。粗くナデ調整。	マンガン	嘉慶八年癸亥三月■■■原洗骨仕候	不明	嘉慶八年＝1803年	体部内面に「〇」



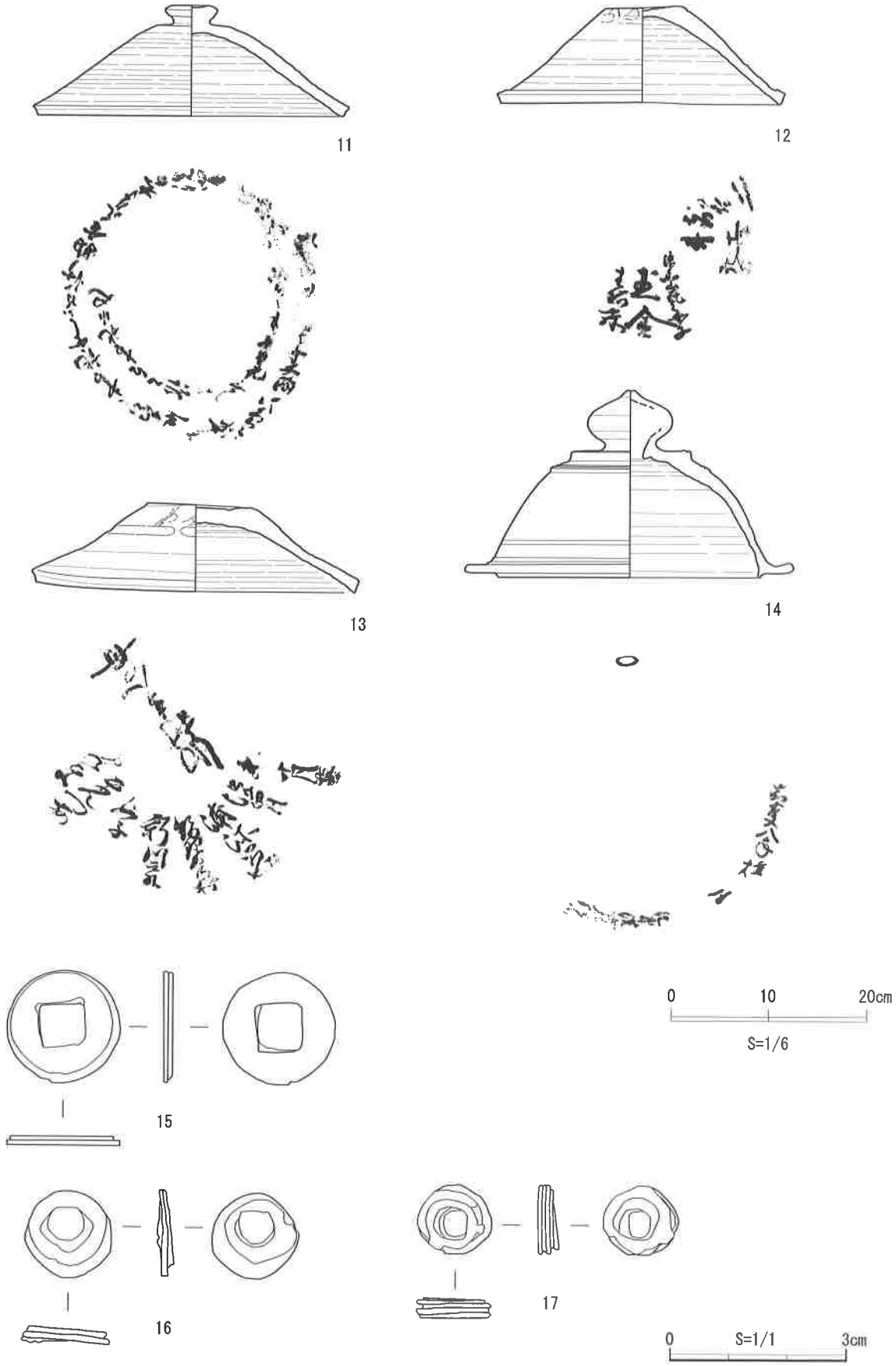
第19図　16号墓出土遺物1



第 20 図　16 号墓出土遺物 2



第 21 図　16 号墓出土遺物 3



第22図　16号墓出土遺物4

第５節　その他の墓の出土遺物

本遺跡では蔵骨器以外の遺物として、沖縄産陶器、本土産磁器、青花、白磁、瑠璃釉、土製品、金属製品、玉製品、煙管、銭貨、ガラス製品などが出土しており、先に報告を行った１号墓・10 号墓・16 号墓以外の古墓でも本遺跡を語る上で重要な資料が見つかっている。また、２号墓から転用蔵骨器のパナリ焼が出土しており本稿で報告を行うこととした。

パナリ焼は破片による出土であったが、接合により頸部から底部まで復元できた資料である。残存状況からは頸部を打ち欠いた資料なのか断定し難い。

沖縄産陶器は壷屋以前の湧田古窯、喜名古窯・知花古窯などといった壷屋焼以前の窯の製品と考えられる資料が出土しており、12 号墓からは喜名焼の伝世品とされている類例資料と類似したものや湧田古窯跡において類例が見出せる資料が出土している。

本土産磁器は赤絵が施された青磁瓶や白磁の合子が出土しており、この資料は肥前系の資料に類似している。また、それ以外の製品として、型絵付けが施された近現代の碗も出土している。

金属製品は釘、簪、指輪などが出土している。釘は銅釘と鉄釘となっており、銅釘は角釘のみ、鉄釘は角釘を主体に丸釘が少数出土している。簪、指輪は釘類と比べて点数が少ない。簪は女性用のものとなっており、頭部が耳掻き形のものと匙形のものが確認されている。簪、指輪は副葬品であると考えられる。

玉製品はガラス玉が出土している。ガラス玉は先に報告した１号墓の資料以外に 12 号墓から丸玉が出土している。両者とも巻き上げ技法によって作られるが、サイズは異なっており１号墓出土資料の方と比べて、12 号墓出土資料はサイズが小さい。

１号墓、10 号墓出土資料以外の煙管は陶製無釉のものと金属製のものが確認されている。陶製無釉の資料は１号墓の出土資料同様、雁首のみの出土となる。但し、１号墓出土資料とは異なり、器面が焼しめられたものとなっている。金属製煙管の状態が悪いため、本稿では陶製のもののみ報告を行う。

１号墓・16 号墓以外の出土銭貨は永樂通寶、寛永通寶、不明銭、半銭、無文銭が挙げられる。銭貨のなかには複数枚が錆によって固着したものがあり（図版 24 の 8）、それらの資料の一部には繊維質の物質が銭貨の孔に残存しているものが見られた（図版 24 の 9）。このことから無文銭は複数枚を縄で束ねた状態で墓室に納められたと考えられる。なお、固着している銭貨は寛永通寶、無文銭が見られた。近世の銭貨以外にも明治期の半銭も出土しており、このことから明治期以降の人の出入りを想定できる資料となっている。

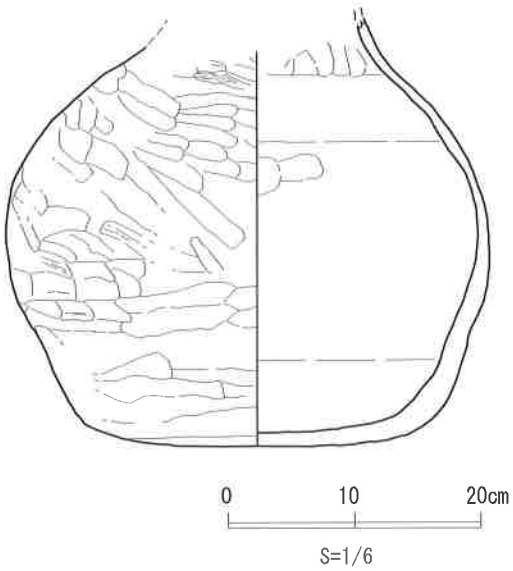
ガラス瓶は戦中から戦後にかけて持ち込まれたものと考えられ、「Duraglas（ダグラス社）」の陽刻を有することから外国産の可能性がある。丸瓶と十角形の角瓶があり、小形の瓶であることから薬瓶であることが考えられる。いずれの資料も風化によって虹彩が生じている。

以上、上述した遺物を図と詳細な観察により報告し、銭貨や金属製品については観察表を用いて報告を行う。

〔1〕蔵骨器（身）（第23図1、図版23の1）

（1）転用蔵骨器：パナリ焼

第23図1は接合により頸部から底部まで復元できた資料である。墓室内奥壁側の崩落土より出土した。残存状況から頸部を打ち欠いた資料かは不明。最大径は胴部にあり、38.4㎝を測る。内外面共に丁寧なナデ調整が施され、焼成も良好である。胎土は黄褐色または橙褐色を呈し、白色の細粒を多く含む。底径22.6㎝。



第23図　転用蔵骨器（パナリ焼）

〔2〕沖縄産陶器（第24図1～4）

沖縄産陶器は壷屋以前の湧田古窯、喜納古窯・知花古窯などといった壷屋焼以前の製品と考えられる資料が出土しており、壷屋焼と考えられる資料は少ない。このことから蔵骨器以外の資料からも本遺跡の年代観をうかがい知ることができる。蔵骨器以外の沖縄産陶器は瓶や徳利といった器種が主体となる。

（1）瓶（第24図1～3、図版23の2～4）

第24図1は口縁部が欠損した資料で、12号墓の墓室内崩落土より出土した。黒釉が頸部から腰部まで掛けられており、底部まで釉ダレする箇所も見られる。内面は頸部途中まで黒釉が掛けられている。胴部に3箇所、釉薬が掛っていない箇所があり、これらの箇所は気泡が目立つ。以上の箇所は焼成時に他の製品と接していた箇所と思われる。底部には焼成の際の歪みが見られる。胎土には石英粒などが含まれる。法量は、底径約7.20cmを測る。湧田窯跡の一括廃棄土壙出土資料に類似した資料が見られる。

第24図2は高台部分が欠損した資料で、12号墓の墓室内崩落土より出土した。外面は茶褐色の泥釉が掛けられ、内面は頸部途中まで泥釉が掛けられている。外底面の一部に泥釉が見られることから、高台内面まで釉が掛っていた可能性がある。口縁部はラッパ状に開き、頸部がすぼまり、胴部が膨らむ。伝世品から高台は高さが低いものと思われる。腰部にはケズリによって成形された蓮座（連弁）文を有する。蓮座（連弁）文は5個あり、蓮座（連弁）文にはそれぞれ沈線による装飾が見られる。胎土には小形の貝、石英粒などが混入物として含まれる。口径は4.60cmを測る。本製品は喜名焼の伝世品といわれている資料に類似している。

第24図3は口縁部から頸部までが欠損した無釉の製品で、5号墓墓室床面の埋土より出土した。肩部はナデ肩になり、胴部が張る。底部は高台を持たず、ベタ底となる。胴部最大径の上部に一条の圏線が見られ、それ以外には文様・圏線は見受けられない。底面は調整がなされておらず、凹凸が目立つ。底面中央付近に窯印の可能性がある線彫りが施される。器色は褐色を呈し、素地には灰色の素地と褐色の素地がサンドイッチ状に入っている。本資料の底径は5.9cmを測る。

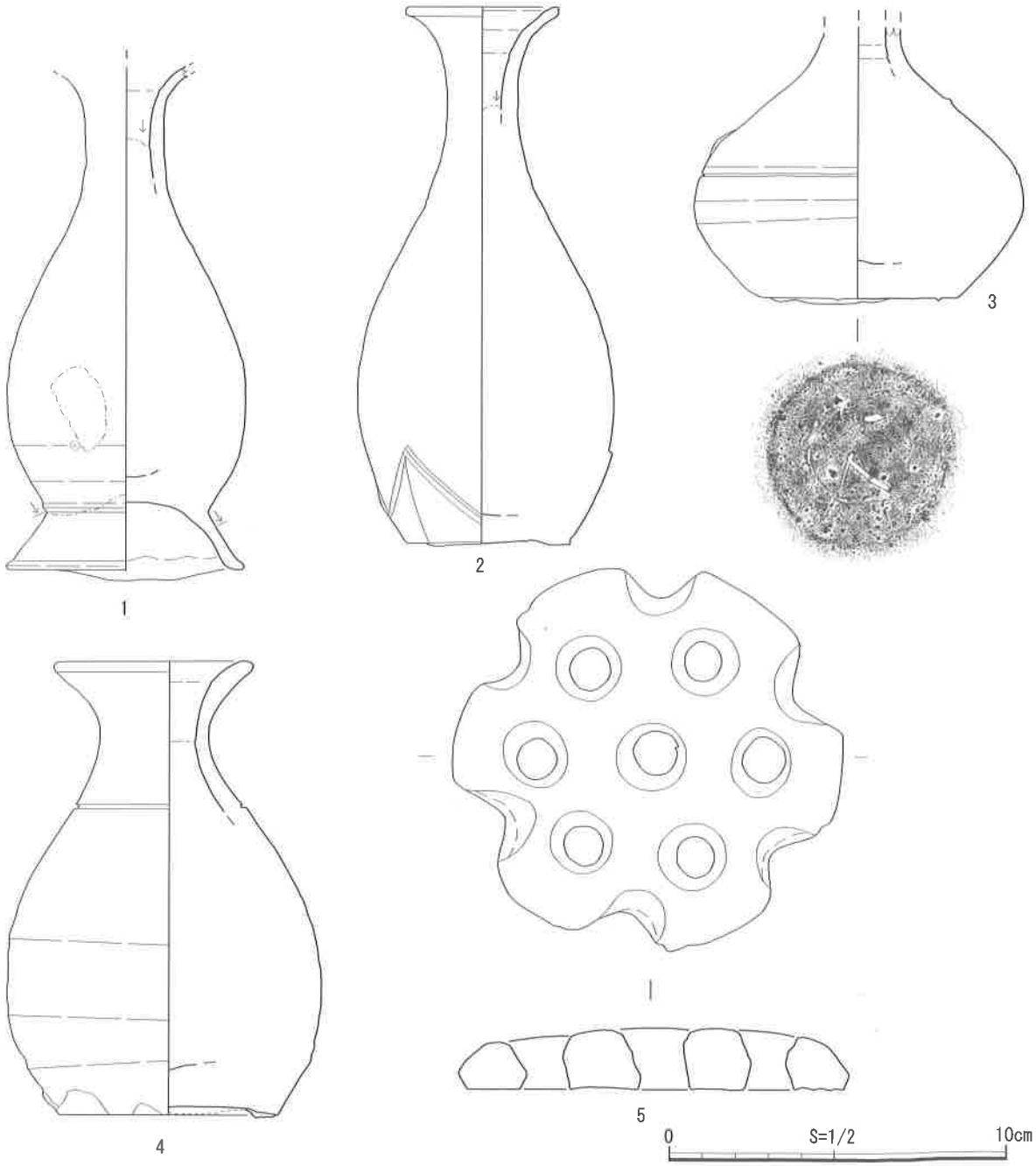
（2）徳利（第24図4、図版23の5）

第24図4は無釉の製品で、5号墓墓室床面より出土した資料である。器面には気泡が複数見られる。頸部に一条の沈線が廻る。畳付はきれいに成形されておらず、凹凸が目立ち、焼成時の溶

着物が付着する。法量は口径が 6.0cm、底径が 6.60cm、器高が 13.60cm を測る。

〔3〕土製品（第 24 図 5、図版 23 の 6）

第 24 図 5 は類例資料から七輪の灰おとしと思われる製品で、12 号墓墓室内崩落土より出土した。素焼の製品で、平面形は歯車状を呈している。側面観はレンズ状となり、緩やかな凸面と平坦面を有している。中に 7 個の孔が有しており、孔は砂時計状に中ほどで窄まる断面形状となる。凸面はナデ調整などの器面調整が行われているが、平坦面は器面調整があまり行われておらず、器面に微弱なゆがみが見られる。凸面の端部には布目痕も見られる。胎土中には石灰岩礫、赤色粒などを含む。また、籾殻の圧痕が見られたことから、籾殻も胎土中に混入している可能性がある。長軸 11.8ｃｍ、短軸 9.4ｃｍ、最大厚 1.9cm を測る。なお、類例資料は那覇市に所在する御細工所跡より出土している。



第 24 図　沖縄産陶器・土製品

〔4〕青花（第25図1、図版23の7）

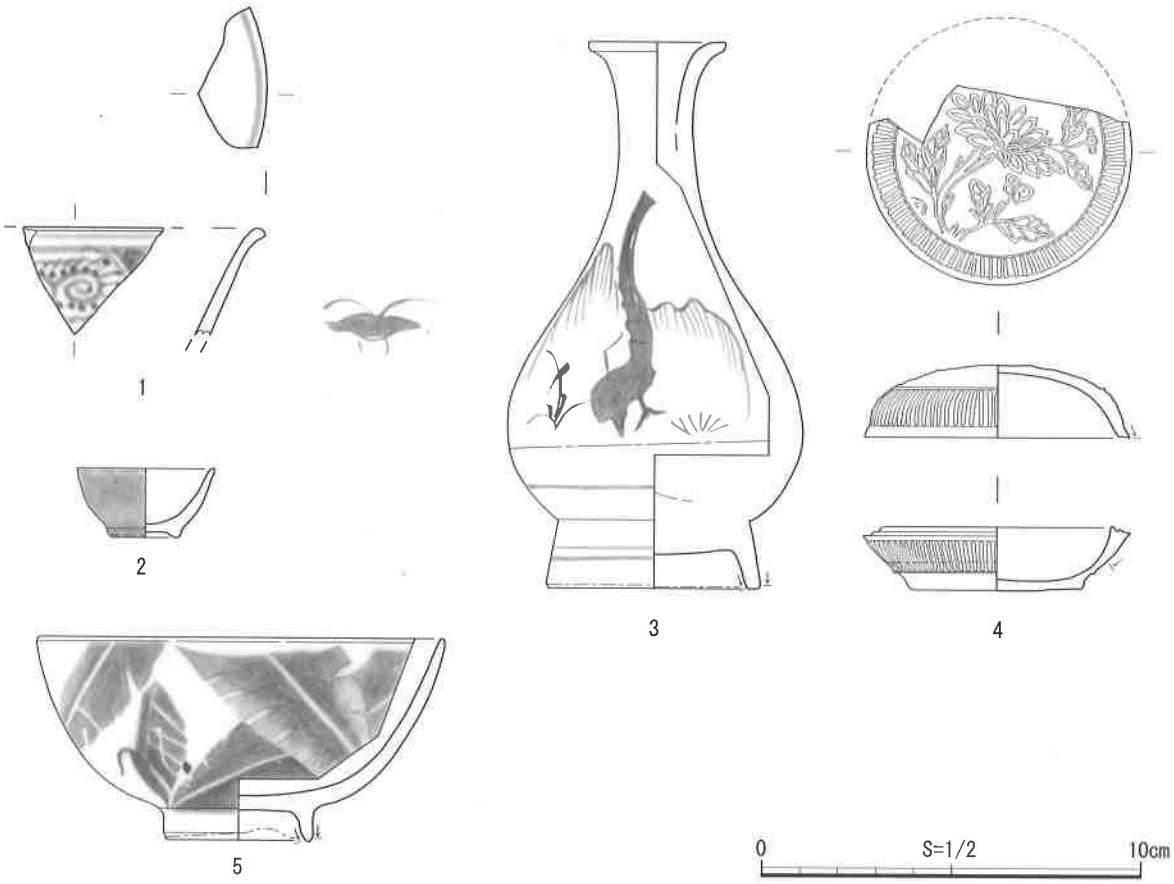
碗の口縁部片が1点出土している。第25図1は4号墓前壁基底部埋土より出土した。口縁部は外反しており、口唇直下に2本の圏線を施した後、圏線の下に唐草文を施す。内面の口唇付近には呉須によって一条の圏線を施している。

〔5〕瑠璃釉（第25図2、図版23の8）

瑠璃釉の製品は1点が出土している。第25図2は小杯の完形品で、8号墓墓室奥壁棚より出土した。.口縁部は微弱に外反し、腰部は丸みをもつ。高台は緩やかに屈曲して畳付へと至る。瑠璃釉は外面、高台内に施されるが、腰部以下は施釉にムラが見られる。内面には透明釉が掛けられ白色を呈している。胴部に焼成の際に他の製品と当たり露胎する箇所が見られる。法量は、口径が3.6cm、底径が1.8cm、器高が1.8cmを測る。産地不明。

〔6〕本土産磁器（第25図3～4、図版23の9～10）

第25図3は青磁に赤絵で文様を施した瓶で、5号墓墓室床面埋土より発見された。頸部はラッパ状に開き、胴部の下半部が最大径となる。胴部から高台にかけて微弱な凹凸が見られる箇所があり、この凹凸は焼成の際の窯変と思われる。高台は微弱ながらハの字状に開く。畳付は露胎しているが、一部に釉が残る。また畳付の一部に糸切り痕のような痕跡が見られる。文様は胴部に赤絵によって柳文と蝶が施され、柳文の下に一条の圏線を廻らせている。高台には2条の圏線を廻らせる。法量は口径が推定3.6ｃｍ、底形5.5cm、器高が14.3cmとなる。本資料は肥前系の製品の可能性がある。



第25図　青花・瑠璃釉・本土産磁器・近現代磁器

第25図4は白磁で合子の蓋と身のセットが出土している。5号墓墓室床面の埋土中より出土した。蓋には円の中に草花文が施される。蓋は外面が施釉され、内面は無釉となる。身は外面の上半のみ施釉され、外面下半と内面は無釉となる。蓋の法量は径が 7.0cm、器高が 1.90cm を測り、身の法量は口径 7.0cm、底径 4.40cm、器高 1.70cm を測る。

〔7〕近現代磁器（第 25 図 5、図版 23 の 11）

第 24 図 5 は直口碗で、文様から近代以降のものと考えられる。2 号墓墓室内崩落土中より出土した。畳付は釉剥ぎがなされている。外面の口縁部から腰部にかけて型絵付けで芭蕉と思われる植物の葉と花が描かれている。法量は口径 10.7cm、底径 3.8cm、器高 5.35cm を測る。

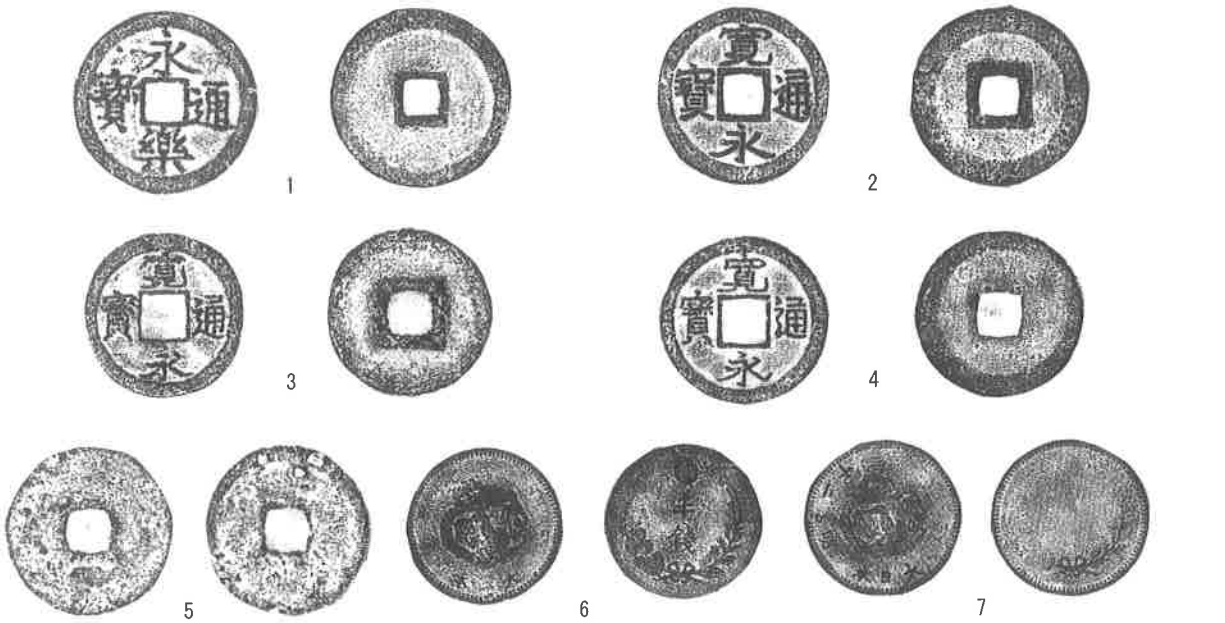
〔8〕銭貨（第 26 図 1～7、図版 24 の 1～7）

先述した墓以外の箇所で出土した銭貨は永楽通寶、寛永通寶、半銭、不明銭などが発見されている。法量などは観察表において記述する。

第 14 表　出土遺物観察表（銭貨）

（単位：cm・g）

挿図番号 図版番号	出土場所 出土層	貨銭名	初鋳年/ 鋳造年	法量	材質	観察事項
第25図　1 図版24　1	4号墓 前壁基底部 埋土	永楽通寶	1408年	外径：2.60 孔径：0.75 銭厚：0.18 重量：4.48	銅	微弱に歪む。表面の「寶」の文字周辺と裏面の左半分が磨耗している。
第25図　2 図版24　2	2号墓 墓室内崩落土 （右壁側）	寛永通寶 （古寛永）	1639年	外径：2.50～2.45 孔径：0.58 銭厚：0.12 重量：3.24	銅	青錆が付着。輪の一部が青錆のため若干不明瞭となっている。
第25図　3 図版24　3	5号墓 墓室床面埋土	寛永通寶 （新寛永）	1697年	外径：2.30 孔径：0.65 銭厚：0.11 重量：2.33	銅	全体的に青錆が付着。裏面の輪・郭がやや不明瞭。
第25図　4 図版24　4	2号墓 墓室内崩落土 （右壁側）	寛永通寶 （新寛永）	1697年	外径：2.40 孔径：0.68 銭厚：0.12 重量：2.72	銅	全体的に青錆が付着。裏面の輪・郭がやや不明瞭。



第 26 図　銭貨

0　S=1/1　3cm

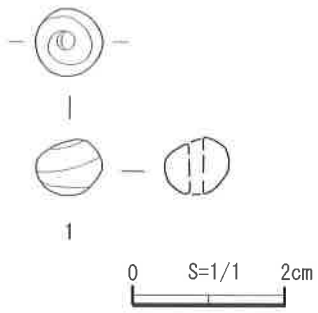
第 15 表　出土遺物観察表（銭貨）

（単位：cm・g）

挿図番号 図版番号	出土場所 出土層	貨銭名	初鋳年/ 鋳造年	法量	材質	観察事項
第25図　5 図版24　5	4号墓 前壁基底部 埋土	不明銭	-	外径：2.40 孔径：0.65 銭厚：0.15 重量：3.14	銅	表面、裏面に外輪は確認できるが、青錆の付着しており状態が悪く、銭文の判読は困難。
第25図　6 図版24　6	5号墓 墓室床面埋土	半銭	鋳造年：不明	外径：2.20 銭厚：0.1 重量：3.18	銅	表面は中央に龍文と外縁に「大■（日）本　明治■■年　・1/2　SEN　・」の陽刻が施される。輪郭内側は歯車状になる。 裏面には中央に「半銭」の文字、その上に菊花文、文字の下に根元を束ねた桐と菊の葉が配される。菊花文の右側に「二百枚」の陽刻を有する。
第25図　7 図版24　7	5号墓 墓室床面埋土	半銭	鋳造年：1888年（明治二一年）	外径：2.20 銭厚：0.11 重量：3.33	銅	表面に「大日本　明治二一年　・1/2SEN　・」の陽刻が見られる。輪郭内側は歯車状となる。 裏面は上記のものと異なり、「半銭」「二百枚」の陽刻が見られない。それ以外は同様となる。

〔9〕玉（第 27 図 1、図版 24 の 10）

玉製品は 1 号墓の資料のほかに、ガラス玉が1点、12号墓より出土している。第27図1はガラス製の丸玉で12号墓内崩落土から出土した。巻き付け技法で製作されており、器面には製作技法によるスジが見られる。完全な球形ではなく、やや歪みを有している。法量は直径0.9cm、高さ0.75cm、孔径 0.2cm、重量 0.89g を測る。色調は青色を呈する。



第 27 図　ガラス玉

〔10〕煙管（第 29 図 1～2、図版 24 の 1～2）

煙管は先述した 1 号墓、10号墓出土の資料以外に陶製無釉の資料が確認されている。

第 29 図 1 は陶製無釉の雁首で、4 号墓前壁墓底部の埋土より出土した。火皿の平面形及び接続部が八角形に整形されているが、接合部の面の長さは一定ではない。火皿内の中ほどで稜が形成され、そこから更に窪む。接合部の孔は接合部から火皿に向かって傾斜し狭くなり、火皿の孔へと繋がる。長さ 4.3cm、火皿径が 1.8cm、羅宇接続部径が 1.35cm を測る。

第 29 図 2 も 1 と同様の製品で、4 号墓前壁墓底部埋土より出土した。火皿、接合部が八角形に面取りされるが、本製品は火皿の平面形が丸みを帯びている。また、接合部の面の長さも一定ではない。火皿内は内側に向かって傾斜するが、中ほどで角度が変わり、稜が形成される。接合部の上部に欠損が見られる。長さ4.7cm、火皿径1.2cm、羅宇接続部径0.85cmを測る。

〔11〕金属製品（第28図1・第29図3～19）

金属製品は簪、指輪、釘、不明品といった製品が出土している。釘は 1 号墓、16 号墓の鉄釘のほか、4 号墓で確認されている。なお、簪、釘に関しては観察表でも記述を行う。

(1) 簪（第 29 図 3～4、図版 25 の 1～2）

簪は頭部が耳掻き形のものと、匙形のものの 2 種が検出された。いずれも真鍮製であると考えられる。

①耳掻き形のもの（第 29 図 3）

第 29 図 3 は耳掻き形の頭部を持つ簪で、5号墓墓室床面の埋土より出土した。首部の断面形

は円形となり、竿部の断面形は六角形となる。竿部の尖端は尖っており、六角錐を呈している。本資料の法量は、全長12.3cm、重量5.87gとなる。

②匙形のもの（第29図4）

第29図4は匙形の頭部を持つ簪で、5号墓墓室床面の埋土より出土した。真鍮製の製品で、首部・竿部の断面形は六角形を呈する。竿部先端は磨耗し、丸みを帯びている。全長は 17.0cm、重量は 12.58g。

第16表　出土遺物観察表（簪）

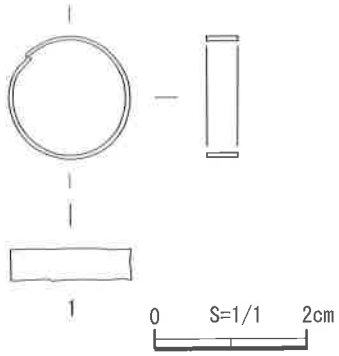
（単位：cm・g）

挿図番号 図版番号	出土場所 出土層	器種・種別	材質	法量				観察事項
				長さ	幅	厚さ	重量	
第28図　3 図版25　1	5号墓 墓室床面	簪	真鍮	12.30	頭部：0.6 竿部：0.4～0.3	頭部：0.07 竿部：0.4～0.3	5.87	耳掻き形の頭部を持つ資料。断面形は首部が円形、竿部が六角形となる。
第28図　4 図版25　2	5号墓 墓室床面	簪	真鍮	17.00	頭部：1.4 竿部：0.4	頭部：0.15～0.1 竿部：0.45～0.3	12.58	匙形の頭部を持つ資料。首部・竿部ともに断面形が六角形となる。竿部でわずかに湾曲している。

(2) 指輪（第28図1、図版24の11）

指輪は1点のみが確認されており、6号墓墓室床面で出土している。本資料には文様は施されていない。合わせ目は1箇所あり、ややずれているが、間隔は開いていない。器面には青錆が生じている。

法量は径が1.6cm、幅0.4cm、厚さ0.05cm、重量は0.48gを測る。



第28図 指輪

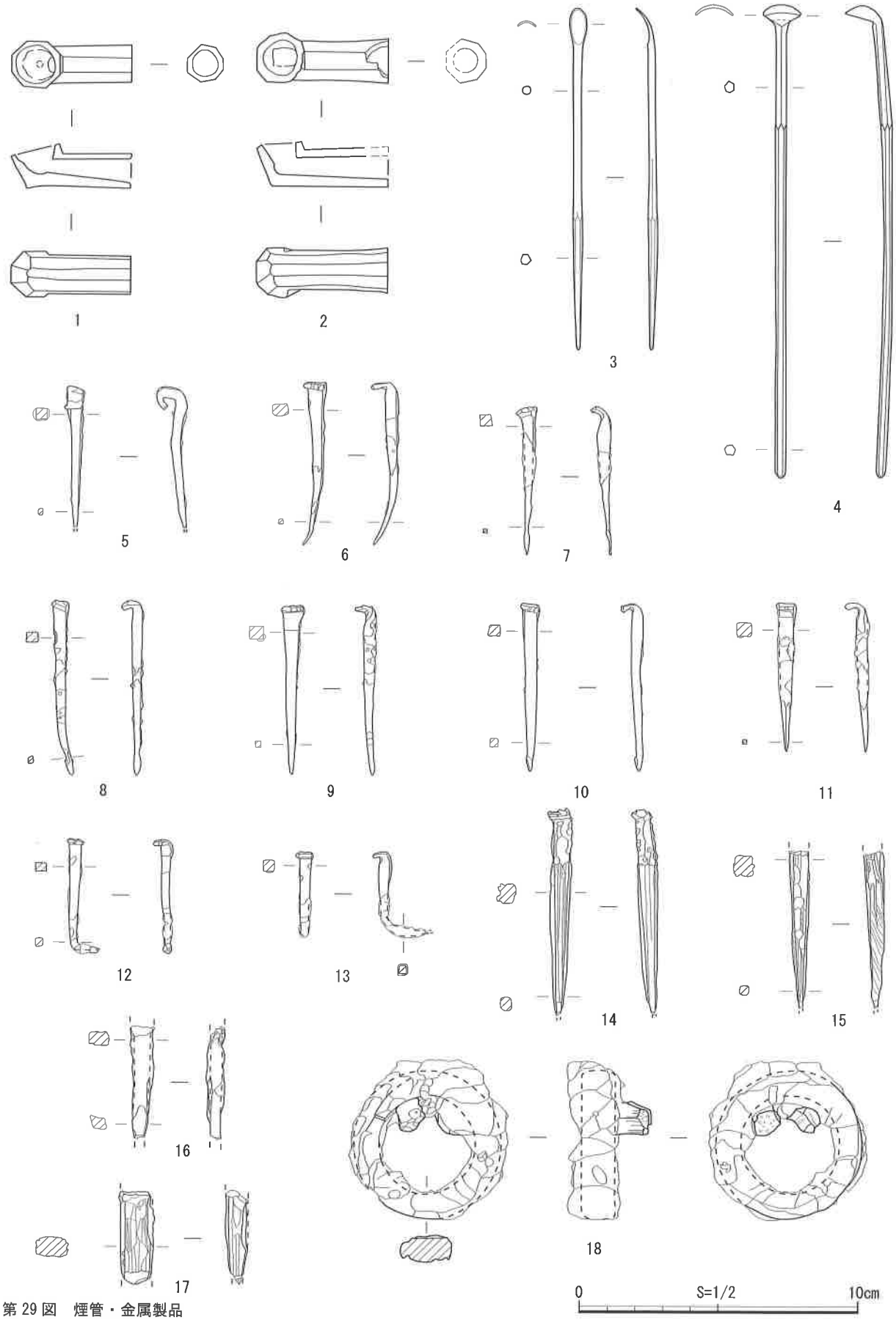
(3) 釘（第29図5～17、図版25の3～15）

釘は銅釘と鉄釘が出土している。銅釘は全て角釘となり、鉄釘は角釘と丸釘が検出されている。銅釘は青錆の付着が著しく、鉄釘も同様に錆が付着しており腐食が著しい。先述した古墓以外では、4号墓で銅釘が18点、鉄釘が完形2点・破片5点出土している。4号墓では墓室床面から出土していることを考えると、一次葬の木棺が存在していた可能性がある。

第17表　出土遺物観察表（釘）

（単位：cm・g）

挿図番号 図版番号	出土場所 出土層	器種・種別	材質	法量				観察事項
				長さ	幅	厚さ	重量	
第28図　5 図版25　3	4号墓 墓室床面	銅釘（角釘）	銅	5.05	頭部：5.5 基部：0.45	頭部：1.1 基部：0.4	4.82	頭部がステッキ状に屈曲する。尖端は欠損している。
第28図　6 図版25　4	4号墓 墓室床面	銅釘（角釘）	銅	5.80	頭部：0.73 基部：0.5	頭部：0.73 基部：0.45	4.68	完形品。基部の下方で緩やかに屈曲する。
第28図　7 図版25　5	4号墓 墓室床面	銅釘（角釘）	銅	5.30	頭部：0.7 基部：0.45	頭部：0.6 基部：0.45	4.00	頭部の一部が欠損している。
第28図　8 図版25　6	4号墓 墓室床面	銅釘（角釘）	銅	6.20	頭部：0.65 基部：0.45	頭部：0.7 基部：0.4	4.48	尖端付近でわずかに屈曲する。
第28図　9 図版25　7	4号墓 墓室床面	銅釘（角釘）	銅	6.05	頭部：0.8 基部：0.5	頭部：0.7 基部：0.45	4.80	完形品。頭部がわずかに傾いている。尖端は磨耗・錆の影響で丸くなる。



第29図　煙管・金属製品

第 18 表　出土遺物観察表（釘）

（単位:cm・g）

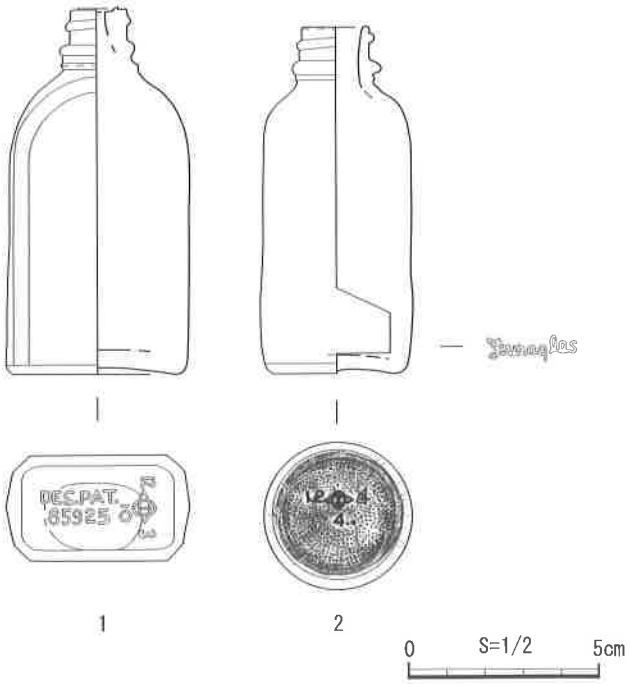
挿図番号 図版番号	出土場所 出土層	器種・種別	材質	法量				観察事項
				長さ	幅	厚さ	重量	
第28図 10 図版25　8	4号墓 墓室床面	銅釘（角釘）	銅	6.04	頭部：0.7 基部：0.45	頭部：0.8 基部：0.4	5.24	完形品。頭部がわずかに傾く。尖端はわずかに欠損していると思われる。
第28図 11 図版25　9	4号墓 墓室床面	銅釘（角釘）	銅	5.40	頭部：0.73 基部：0.58	頭部：0.7 基部：0.48	5.02	完形品。端部以外の箇所は青錆に覆われている。
第28図 12 図版25 10	4号墓 墓室床面	銅釘（角釘）	銅	4.90	頭部：0.6 基部：0.4	頭部：0.57 基部：0.4	3.24	基部の下部でL字状に折れる。尖端は欠損する。
第28図 13 図版25 11	4号墓 墓室床面	銅釘（角釘）	銅	4.40	頭部：0.6 基部：0.4	頭部：0.68 基部：0.4	2.84	基部の中程から下部にかけて、L字状に折れる。尖端は欠損する。
第28図 14 図版25 12	4号墓 墓室床面	鉄釘（角釘）	鉄	7.35	頭部：0.85 基部：0.7	頭部：0.72 基部：0.75	6.60	頭部が欠損しているが、折れ曲がった形状であると思われる。尖端も欠けている。基部途中から縦のヒビが見られる。
第28図 15 図版25 13	4号墓 墓室床面	鉄釘（角釘）	鉄	残存長：5.6	0.75	0.70	4.48	基部のみが残存し、頭部と尖端が欠損する。
第28図 16 図版25 14	4号墓 墓室床面	鉄釘（角釘）	鉄	残存長：4.05	0.75	0.50	2.68	基部のみが残存し、頭部と尖端が欠損する。
第28図 17 図版25 15	4号墓 墓室床面	鉄釘	鉄	残存長：3.35	1.20	0.85	6.02	基部のみが残存。他の資料とは異なり、扁平を呈し、残存形状がクサビ状となる。
第28図 18 図版25 16	4号墓 墓室床面	不明	鉄	5.65	5.70	全体：3.0 鐶：1.9	75.00	内側に釘状の製品が2本錆により固着し、途中で折れている。 内径：3.25～2.70

（4）用途不明品（第 29 図 18、図版 25 の 16）

第 29 図 18 は用途不明の鉄製品で、4 号墓墓室床面より出土している。リング状の鉄製品で、全体的に錆が付着しており、腐食が著しく、状態は悪い。リングの内側に、折れた状態の釘状の製品を 2 本癒着して有していることから、元来は何らかの製品に着いていたが、欠落して現在の状態で残存したことが考えられる。本製品の推定法量は、外径が 5.3cm、内径が 3.5cm。重量は錆を含めて 75g を測る。

〔12〕ガラス製品（第30図1～2、図版 25 の 17～18）

ガラス製品は瓶が出土している。第 30 図 1 は薬瓶と考えられ、2 号墓墓室内右壁側の崩落土中より出土した。無色透明の瓶で、底面形は横長の十角形となる。注ぎ口は狭く、口縁はねじ式、肩部はなで肩、両器面は風化による虹彩が生じている。底面に「DES.PAT.2」「85925」「12」「3」と記号の陽刻が施される。また底面には円と菱形？を合わせた記号の陽刻が見られる。口唇部から底部にかけて二箇所、金型の合わせ目が見られる。口縁部の外径1.5cm、口縁部の内径0.4cm、



第 30 図 ガラス製品

底径 4.8cm×2.8cm、器高 9.6cm を測る。

第 30 図 2 も薬瓶と思われる資料で、2 号墓墓室崩落土より出土している。本資料は無色透明の丸瓶で、口縁部はねじ式、肩部はいかり肩、肩部から底部まで径が一定となる。外面底部付近の 2 箇所、対角線上にダグラス社の陽刻（「Duraglas」）が見られる。また、底面には円と菱形を合わせた記号と「12」「4」「4」の陽刻が見られる。1 の資料同様、風化しており、虹彩（銀化）が生じている。口径 1.8cm、底径 9.1cm、器高 3.4cm を測る。

〈参考文献〉

・沖縄県立埋蔵文化財センター2011　『ヤッチのガマ　カンジン原古墓群　－県営かんがい排水事業（カンジン地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』

・平川信幸・倉成多郎・仲程香野・吉田健太・宮原まなみ編 2011　『沖縄県立博物館・美術館×那覇市立壺屋焼物博物館合同企画展　琉球陶器の来た道』　株式会社沖縄文化の杜

・沖縄県教育委員会 2003　『沖縄の陶器類関係資料調査報告書』

・桜井準也 2006　『ガラス瓶の考古学』　六一書房

・永井久美男編 1994　『中世の出土銭　―出土銭の調査と分類―』　兵庫埋蔵銭調査会

・永井久美男編 1996　『中世の出土銭　補遺Ⅰ』　兵庫埋蔵銭調査会

・沖縄県教育委員会文化課編 2011　『沖縄のガラス・玉等製品完形資料調査報告書』

・沖縄県教育委員会 1987　『古我地原内古墓』

・今帰仁村教育委員会 1983　『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』

・那覇市教育委員会 1991　『御細工所跡　―城西小学校建設工事に伴う緊急発掘調査報告―』

第４章　勢理客城門原古墓群出土の人骨

第１節　はじめに

本章では各墓から出土した人骨について基礎的なデータと観察所見の記載を行う。全体的に人骨の残存状況は良くないため、ここでは人骨の部位と出土量および基本的な観察事項に絞って報告する。

第２節　人骨の出土概要

調査では全部で 16 基の堀込墓が検出されており、そのうち 15 号墓を除く 15 の墓から人骨が出土している。出土状況は蔵骨器内に納められている状態で出土したものと墓室内に散乱していたものと大きく二つに分けることができる。墓室内の原位置で出土している蔵骨器内には埋没土などの流入もそれほどなく納められた人骨は確認しやすかったものの、遺存状況は悪く、断片的に形を留めるものや細片となっているものが多くを占めている。また、散乱人骨は、墓室内の床面・棚・シルヒラシ直上あるいは埋土・崩落土中から出土したものである。これらは元来、蔵骨器に納められていたもので蔵骨器の破壊や人為的な墓の攪乱などにより飛散したものと考えられる。一次葬状態の人骨の遺存を窺わせる出土状況はいずれの墓からも確認されていない。散乱人骨も、その多くが破片資料であるが、一部に比較的形状を留める頭蓋骨や遊離歯・四肢骨が残存している。本稿ではこれらの人骨を中心に観察と分析所見の記載を行ってゆく。

観察は部位同定可能な全ての資料を対象として行い、各墓及び蔵骨器ごとに埋納された個体数を算出した。個体数は基本的に残存する部位の重複から計数を行ったが、異なる部位同士であっても成人と未成人などの違いやサイズ・発達形態などから別人であることが明らかである場合にはそれぞれを一個体としてカウントした。

第３節　墓ごとによる人骨の記載（第 19 表）

・1号墓（成人6・未成人1）

墓室内の棚上およびシルヒラシからそれぞれ人骨が散乱した状態で出土している。墓室内には棚上ないしシルヒラシから蔵骨器が8基出土しているが、そのうち6基が横転・破砕し、原位置を保っていない。そのため、出土した人骨がいずれの蔵骨器内に納められたものであるかを判断することは困難であった。そこで蔵骨器の転倒状況等を踏まえ、奥棚・右棚から出土した人骨については、それぞれのまとまり毎に個体識別および最小個体数を推定した。シルヒラシについては蔵骨器⑧（第 7 図8）内に残存していた一群については個体数算出の対象としたが、床面に散乱して出土した資料については一括として対象外とした。

右棚上からは成人骨と未成人骨が確認され、軸椎が重複することから成人が少なくとも2体含まれることが窺われる。未成人骨は、成人骨と容易に区別することができ、部位重複も見られないことから1体分であると推測される。また、いずれの人骨にも焼骨と認められる変色等が観察されている。また、一部の骨には火葬骨の特徴とされる表面の亀裂が認められた。

奥棚上からは成人骨のみが確認された。人骨の大半が被熱しているとみられ、表面・破面が黒色化していた。一方で、それら被熱の痕跡が全く認められない骨も含まれる。このことから、埋葬に際して異

なる取り扱いをなされた2体分が含まれているものではないかと想定される。しかしながら、形態的には断片的であるため詳細な観察は困難である。

・2号墓（成人6・未成人2）

墓室奥壁沿いの床面から蔵骨器と共に人骨が集中して出土している。蔵骨器は全て破片であることから埋納時の状況を窺い知ることはできない。人骨は2号墓一括出土として取り扱った。

人骨は成人6体・未成人2体分が同定された。上腕骨の重複から成人が最低6体含まれていると推定される。上腕骨以外の成人骨の部位は概ね全身が見られるものの、6体分としては不足している。また、未成人骨はサイズから小児段階と乳幼児段階のもの各1体分ずつを識別した。

・3号墓（成人2）

墓室に堆積していた埋土中より成人2体分の人骨が検出された。中手・中足骨や四肢骨の一部を残存するのみであるが、第4中足骨が重複することから2個体分と推定できる。ただし、いずれも断片的な残存状態であることから性別・年齢等の推定は困難と判断した。

・4号墓（成人6・未成人1）

墓室埋土および床面から他の墓に比べ量の多い人骨が出土している。頭蓋骨は破片のみしか残存していないものの、それ以外は概ね全身の部位が複数体分混在していることが観察される。最小個体数は舟状骨（足根）から成人6を数えるほか、未発達の距骨と遊離歯から小児1体分が含まれるとみられる。

・5号墓（成人8・未成人1）

墓室内に堆積した埋土中より多量の蔵骨器片に混じり成人8・未成人1の人骨が出土しており、一括して部位同定作業を行った。完形を留める資料はほとんど見られないものの、側頭骨や下顎骨・上腕骨・橈骨・尺骨・脛骨・踵骨などが複数体分ずつ存在する。成人の最小個体数は大腿骨により示され、サイズの違いから小児が識別される。

・6号墓（成人6・未成人2）

墓室内は崩落土により埋没していた墓で、土中あるいは床面から多量の人骨が得られている。前頭骨・頭頂骨・側頭骨などの頭蓋の一部のほか椎骨や四肢骨などが、部位によって複数体分が同定されている。距骨の残存状況から成人6が混在するとともに、サイズの異なる小児段階の大腿骨などが2個体分検出されている。また、成人骨の寛骨に女性の形状を有するものがあることから、成人のうち1人は女性であることが窺える。

・7号墓（成人2）

墓室床面所及び崩落土中から成人2体分の骨が出土している。下顎骨・上腕骨・尺骨・橈骨・大腿骨・膝蓋骨・脛骨が左右2対ずつ検出されており、残存状況の良好な大腿骨で個体識別№を付している。複数遺存する部位を各々の個体に識別することは困難であると思われる。

・8号墓（成人3・未成人1）

人骨は大きく二つのまとまりに分かれて検出された。一つは蔵骨器等の破片と混在しながら埋土中および奥壁際に集中して出土した。四肢骨を中心に断片的に出土しており、成人2体分が含まれていると推定される。

これとは別に、墓室右壁際に検出されたピット内から焼骨が集中して出土している。部位同定可能な資料はそれ程残存していなかったものの大半が火を受けており、焼かれた後に埋められたものであると思われる。埋土中から検出された一群とは異なる個体群であると判断し、成人1体・未成人1体分であると算出した。

しかしながら、上記の二者とも断片的な資料であることから詳細を窺うのは困難である。

・9 号墓(成人2・未成人1)

墓室右側に位置する棚上から割れた蔵骨器とともに人骨が検出されたほか、崩落土中から出土している。両者が元来、同一か別々のまとまりのものであったか判別がつかなかったため9号墓の一括資料として取り扱った。

各部位が断片的に残存しているが、下顎骨・腓骨・距骨・踵骨などが複数あることから成人2体分が含まれると考えられる他、未成人の脛骨が1点含まれる。未成人骨はサイズの比較から乳幼児段階の年齢であると推測される。また、成人のうち1人に女性が含まれることが、寛骨の形状からうかがうことができる。

・10 号墓

検出された墓の中でも最多となる 22 基の蔵骨器が出土しており、この内 10 基中に人骨が残存していることが確認された。また、その他シルヒラシに散乱して検出された人骨や崩落土中に混在している人骨が遺存している。本報告では蔵骨器中から出土している人骨は部位同定および個体識別を行ったが、蔵骨器の外から検出されたものについては、いずれの蔵骨器に属していたものであるか窺うことが全くできないことから、検出された部位のみ一括資料として記載するに留め、それ以上の分析については省略した。以下には、蔵骨器出土分について概略を述べる。

○蔵骨器1(成人2)

頭蓋骨の一部および大腿骨の重複から成人2体分が含まれていると推定される。資料の多くは細片となっており、部位同定可能であった大腿骨等についても風化が進行していることから、詳細を観察することが困難である。

○蔵骨器2(成人1・未成人2)

成人骨と未成人骨が同定された。成人骨は断片的ながら頭骨の一部と主要四肢骨が同定された。未成人骨は部位重複等がないものの、同定された大腿骨・脛骨のサイズが乳児段階程度とみられる一方、未萌出と思われる第 1 大臼歯の遊離歯が見られたことから、発達段階の異なる未成人骨が少なくとも2体分含まれていると考えられる。

○蔵骨器7(成人3)

比較的多量の骨が遺存しており複数体分が混在していることを窺わせる。いくつかの部位で重複が見られるが、本分析では大腿骨により成人3と推計している。明確な年齢推定が可能な部分が残存する部位はみられないが、全体的な形状からみて、全て成人のものと推測した。

○蔵骨器9(不明1)

形状を留める資料は僅かに遊離歯が数点のみである。そのため、年齢・性別等の判断は保留した。

○蔵骨器 14(成人1)

頭頂骨・側頭骨・後頭骨など頭蓋骨の破片および中手骨・手根骨が1体分出土している。

○蔵骨器 15(成人1)

頭骨片や一部の四肢骨が同定は出来たものの、成人1体分が最低限含まれることが窺えるのみである。

○蔵骨器 17(成人1)

下顎骨・四肢骨・指骨など部位同定は他の蔵骨器に比べ可能ではあったが、完形の部位は残存していない。断片的ながら、骨端の残る部位などから成人であることを推定するのみである。

○蔵骨器 18(成人1)

大半が破片の状態となっている中で、大腿骨・脛骨と手根骨・中手骨・足根骨・中足骨の一部が残存している。残存している脛骨遠位端から成人であると推測している。

○蔵骨器 20(成人1)

大半の資料が破片となっている中で、四肢骨の一部および中手骨・中足骨などの一部が同定可能であった。

○蔵骨器 21(成人1)

手根・足根骨などの一部が断片的に同定されたのみである。

上記に述べた蔵骨器収納骨以外に 10 号墓からは、他の墓に比べて多量の人骨が出土している。これらは、上記の蔵骨器中から零れ落ちたと思われるものの他、上記以外の蔵骨器に納められていたもの、破砕されて形状を留めない蔵骨器に納められていたものとが混在しているものと思われる。基本的に個体識別は不能であるが、成人・小児・乳幼児骨が存在することのみ補記しておく。

・12 号墓(成人8・未成人4)

本墓から出土した人骨は僅かに墓室崩落土中に確認されたものであるが、大半は墓室右側に掘り込まれた横穴内から出土しているものである。多量の骨が散乱しており、解剖学的な元位置を保つものは見られなかったことから、一次葬あるいは蔵骨器に納められた後のものが、何らかの意図により集積されたのではないかと考えられる。

残存する人骨には概ね全身の部位がみられ、成人8名・未成人4名が含まれていると推定される。成人は左の腓骨の重複から最小個体数を算出し、未成人はサイズに基づく発達差から4名が混在していると考えられる。

・14 号墓(成人1・未成人2・不明1)

2基の蔵骨器が完存しており、それぞれに人骨が残存していた。蔵骨器1からは成人1・未成人2が同定された。また、未成人は小児段階と乳幼児段階であることから個体識別が可能である。蔵骨器2には僅かに指骨が残存するのみであり、詳細について窺うことはできなかった。

・16 号墓

墓室から 11 基の蔵骨器が出土しており、そのうち 10 基の蔵骨器に人骨が残存していた。以下、蔵骨器ごとに部位同定と個体識別を行った。

○蔵骨器1(成人1)

完存する資料はほとんど見られないが、主要な部位が断片的に残存している。遊離歯にはエナメル質減形成や上顎大臼歯に齲歯が観察されている。

○蔵骨器2(成人1・未成人1)

成人と未成人が含まれていることが観察され、いずれも残存状態はそれ程良くないものの、部位重複などが見られないことから、各1体ずつが含まれているものと想定される。未成人は遊離歯ながら第2大臼歯の歯冠が形成されている点や鎖骨のサイズなどから小児段階の年齢であると推察される。

○蔵骨器4(未成人2)

未成人が2体分含まれていることが窺え、大腿骨および脛骨は個体識別が可能であったが、それ以外の部位は、いずれに属するか不明である。

○蔵骨器5(成人1・未成人1)

上肢骨を中心に成人1体分が検出されていることに加え、未成人の上下顎骨および遊離歯が同定された。未成人骨の下顎骨を観察すると第1大臼歯の歯冠が形成中かつ第2大臼歯が未形成であることから幼児段階程度であると推定される。

○蔵骨器6(成人1)

断片的な残存状態であることから詳細を窺うことは困難である。

○蔵骨器7(成人1)

頭頂骨・後頭骨・椎骨の一部が検出されたのみであるため、詳細は不明である。

○蔵骨器8(成人1)

部位同定可能な資料は、一部が断片的に残存しているのみであることから詳細は不明である。

○蔵骨器9(成人1・未成人2)

成人骨と未成人骨が混在している様子が窺えるが、部位同定可能な資料であってもそのほとんどは破片であることから、詳細に言及することは難しい。なお、未成人骨は乳幼児であるが、異なる年齢段階にある個体が存在すると想定されたことから、少なくとも二体分が含まれると想定している。

○蔵骨器 10(成人1・未成人1)

成人と未成人がそれぞれ1体分ずつ含まれることが推定されるが、両者ともごく一部の部位が残存するのみであることから、これ以上の詳細は不明である。

○蔵骨器 11(成人2)

大腿骨の残存から最低2体分が混在すると思われるが、全体的に遺存状態は悪く、性別・年齢等の詳細を窺うことは困難である。

第 4 節　人骨の形態にみられる変異

ここでは観察の中で形態的に変異が認められたもののうち、特徴的な資料について記載する（第 23 表）。

（1）前耳状溝

腸骨の耳状面直下にできる妊娠の痕跡とされる溝状の窪みが、出土資料中 4 点の腸骨に確認された。6 号墓・9 号墓および 10 号墓の一括資料中に含まれる寛骨で、9 号墓は同一個

体に属する左右の寛骨であると思われる。溝状の痕跡はいずれも幅約 10 ㎜前後で、9号墓の資料は他の二つに比べ溝がやや深い様子が観察される。

（2）骨増殖

10号墓シルヒラシから出土した脛骨及び腓骨の一つに骨増殖が認められた。脛骨は近位端下から骨幹中心付近が残存する資料で、後面を中心に瘤状のふくらみが形成されており、断面形状が円形に近くなるほどにまで形状が変異している。また、表面全体にも細かな溝状の筋が認められる。腓骨についても内側稜へ板状に発達した骨増殖が認められる。両者が同一個体に属するのではないかと想定され、骨折が治癒した痕跡ではないかと思われる。

（3）変形性関節症

上記の骨増殖とは異なる変形のタイプとして、骨端・関節面あるいは椎骨の椎体辺縁に骨棘ないしそれに近い骨増殖が形成される資料がみられる。一般的に変形性関節症とされるものに当てはまる変異の一つと思われる。

第5節　焼骨について

1号墓・4号墓および8号墓から被熱により黒色ないし灰色に変色した人骨群が確認された。4号墓出土の頭蓋骨破片のうちの数点に、8 号墓出土の上腕骨に焼痕が確認されたが、該当の部位以外の大半の人骨には認められなかった。一方で、1 号墓の出土人骨では、大多数の破片に黒色あるいは灰色への変色がみられた。これらはすべて骨の外面だけでなく内面や破断面にも同様の変色がみられることから、破片となるまであるいはある程度破片となった後に火を受けたものと考えられる。また、大腿骨など一部の部位には「火葬骨」の特徴とされる、被熱による収縮に伴う変形を呈する資料もみられた。

第6節　まとめ

各号墓ごとに同定された部位の検討から算出したものを合計すると、本調査で出土した人骨の最小個体数は 104 という結果が得られる。そのうち成人は 70 体分であるが、頭蓋骨や四肢骨などの部位で完存かそれに近い状態で残存する資料はほとんどないため、性別や年齢を推定することは基本的に困難であったが、かろうじて寛骨形状から 3 人分の女性を特定することができた。未成人骨では小児と乳幼児を中心に 27 体分を算出した。ただし、全体的に破損している資料が多くを占める状況であることから、成人骨に比べ未成人骨の残存にかかわる強度が低いものと思われることから、被葬者の年齢構成を検討する際には留意が必要なものと考えられる。

また、形態的な変異や焼骨の問題などについては、本分析の結果を踏まえたうえで、遺構や他の遺物との関係、また文献上の記録などとも合わせてその意義を考察することが、今後の課題といえよう。

第19表　勢理客城門原古墓群出土人骨一覧

L・R：左右とも残存、L/R：左右不明、（ ）：同定数、（ ）の無いものは1点（破片・遊離歯は除く）

出土箇所			人骨No.	年齢	性別	出土組成
墓No.	蔵骨器No.	地点				
1	—	墓室内右棚	1	成人	不明	軸椎
1	—	墓室内右棚	2	成人	不明	軸椎
1	—	墓室内右棚	3	小児	不明	肩甲骨R、上腕骨L、尺骨L、距骨L、第3中足骨R、遊離歯
1	—	墓室内右棚	一括	—	—	前頭骨L、後頭骨（2）、側頭骨L（2）・R、上顎骨R、下顎骨（2）、頸椎破片、胸椎破片、仙椎破片、椎骨破片、肋骨L（2）・R・破片、肩甲骨L（2）・R、鎖骨L（2）・R、上腕骨L・R（2）、橈骨L、尺骨L（2）・R（2）、第1中手骨L/R、第2中手骨L、基節骨、中節骨、寛骨L・R（2）、大腿骨L（2）・R（2）、脛骨L/R、腓骨L、踵骨R、距骨L（2）、内側楔状骨L、第1中足骨R、第3中足骨L、中節骨、指骨（7）
1	—	墓室内	一括	—	—	頭蓋骨破片、四肢骨破片、遊離歯
1	—	墓室奥棚	1	成人	不明	後頭骨、側頭骨L・R、頬骨L、仙椎破片、椎骨破片、肋骨L・R・破片、鎖骨L、上腕骨R、大菱形骨L、小菱形骨R、有頭骨R、有鉤骨R、舟状骨R、月状骨R、第2中手骨L、第3中手骨R、第4中手骨L、第5中手骨L、基節骨（6）、中節骨（5）、末節骨、大腿骨L・R、踵骨R、距骨R、外側楔状骨L、中間楔状骨L・R、舟状骨L・R、第2中足骨R、第4中足骨L、第5中足骨L、基節骨（5）、末節骨（2）
1	—	墓室奥棚	2	成人	不明	橈骨L、大腿骨L/R、脛骨L
1	—	墓室奥棚	一括	—	—	遊離歯
1	8	シルヒラシ	1	不明	不明	前頭骨R、頭蓋骨破片、環椎、軸椎、頸椎、椎骨（6）、肋骨破片、上腕骨L・R、尺骨R、小菱形骨L、有頭骨R、有鉤骨R、舟状骨L、月状骨R、第3中手骨L、第4中手骨L、基節骨（4）、中節骨（3）、大腿骨L/R、脛骨R、腓骨R、踵骨L、立方骨R、第1中足骨L、第3中足骨R、遊離歯
1	—	シルヒラシ	一括	—	—	後頭骨、下顎骨、肋骨破片、橈骨L/R、第2中手骨L・R、第3中手骨R、腸骨L、大腿骨R、脛骨R、腓骨L、
2	—	墓室内	1	成人	不明	上腕骨L
2	—	墓室内	2	成人	不明	上腕骨L・R
2	—	墓室内	3	成人	不明	上腕骨L
2	—	墓室内	4	成人	不明	上腕骨L
2	—	墓室内	5	成人	不明	上腕骨L
2	—	墓室内	6	成人	不明	上腕骨L
2	—	墓室内	7	小児	不明	椎骨破片、第5中足骨L
2	—	墓室内	8	乳幼児	不明	肋骨破片、上腕骨R、大腿骨破片、脛骨L
2	—	墓室内	一括	—	—	頭蓋骨破片、下顎骨、頸椎、胸椎（3）、腰椎（3）、肋骨L（4）・R（8）・破片、鎖骨R、橈骨L・R、尺骨L・R、舟状骨R、第1中手骨R、第2中手骨L・R、第3中手骨R、第4中手骨R、基節骨（6）、中節骨、坐骨R、大腿骨L・R、膝蓋骨R、脛骨L・R、腓骨L・R、踵骨R、距骨L・R、立方骨L、第1中足骨L・R、第2中足骨L・R、第3中足骨L・R、第4中足骨L・R、第5中足骨L・R、基節骨、末節骨
3	—	墓室内	1	成人	不明	第4中足骨L・R
3	—	墓室内	2	成人	不明	第4中足骨L・R
3	—	墓室内	一括	—	—	肋骨破片、鎖骨R、上腕骨L、第2中手骨L、第4中手骨R、第5中手骨L、基節骨（3）、大腿骨L、内側楔状骨R、舟状骨L、第2中足骨L、第3中足骨L、基節骨（2）
4	—	墓室内	1	成人	不明	舟状骨L・R
4	—	墓室内	2	成人	不明	舟状骨L・R
4	—	墓室内	3	成人	不明	舟状骨L・R
4	—	墓室内	4	成人	不明	舟状骨L
4	—	墓室内	5	成人	不明	舟状骨L
4	—	墓室内	6	成人	不明	舟状骨L
4	—	墓室内	7	小児	不明	距骨R、遊離歯
4	—	墓室内	一括	—	—	頭蓋骨破片、環椎、軸椎、頸椎（3）、胸椎（4）、腰椎、仙椎破片、椎骨破片、肋骨L（5）・R（5）・破片、肩甲骨L・R、鎖骨L・R（3）、上腕骨L・R（3）、橈骨L（2）・R、尺骨L（2）・R、有頭骨L・R、有鉤骨L・R、舟状骨L・R、月状骨R、第1中手骨L（3）・R（2）、第2中手骨L・R（3）、第3中手骨L（4）・R、第4中手骨L・R、第5中手骨L（3）・R（3）、基節骨（31）、中節骨（12）、末節骨、坐骨L、大腿骨L・R（2）、膝蓋骨L（4）・R（2）、脛骨L（2）・R（2）、腓骨L・R（2）、踵骨L（2）、距骨L（2）・R（2）、外側楔状骨R（2）、中間楔状骨L（2）・R（2）、内側楔状骨L・R、立方骨L・R、第1中足骨L・R、第2中足骨L（2）・R（2）、第3中足骨L（4）・R（3）、第4中足骨L・R（2）、第5中足骨L・R、基節骨（17）、中節骨（3）、末節骨（3）
4	3	墓室内	1	成人	不明	前頭骨R、頭頂骨L
4	3	墓室内	2	成人	不明	頭頂骨L・R
4	3	墓室内	一括	—	—	下顎骨、仙椎破片、上腕骨L、橈骨L・R、尺骨R、有鉤骨R、月状骨R、第1中手骨L、第2中手骨R、第4中手骨L・R、第5中手骨R、恥骨R、大腿骨L、膝蓋骨L、脛骨L、腓骨L、踵骨L・R、距骨L・R、舟状骨R、第1中足骨L・R、第3中足骨R、第4中足骨L・R、基節骨、末節骨、指骨（8）、中手/中足骨（8）
5	—	墓室	1	成人	不明	大腿骨R
5	—	墓室	2	成人	不明	大腿骨L・R
5	—	墓室	3	成人	不明	大腿骨R
5	—	墓室	4	成人	不明	大腿骨L・R
5	—	墓室	5	成人	不明	大腿骨L・R
5	—	墓室	6	成人	不明	大腿骨L・R
5	—	墓室	7	成人	不明	大腿骨R
5	—	墓室	8	成人	不明	大腿骨L・R
5	—	墓室	9	小児	不明	頬骨R、遊離歯
5	—	墓室	一括	—	—	側頭骨L（2）・R（2）、下顎骨（3）、肩甲骨L（2）・R（2）、頬骨R、上腕骨L（3）・R（2）、橈骨L・R（2）・L/R、基節骨、尺骨L（3）、寛骨L（2）、膝蓋骨L/R、脛骨R（2）、腓骨R・L/R、踵骨L（2）・R（2）、距骨L（2）・R、第4中足骨R、第5中足骨R
6	—	墓室	1	成人	不明	距骨L・R
6	—	墓室	2	成人	不明	距骨L・R
6	—	墓室	3	成人	不明	距骨L・R
6	—	墓室	4	成人	不明	距骨R
6	—	墓室	5	成人	不明	距骨R
6	—	墓室	6	成人	不明	距骨L・R
6	—	墓室	7	小児	不明	大腿骨L・R、第1中足骨L/R、遊離歯
6	—	墓室	8	小児	不明	頬骨L、大腿骨L
6	—	墓室	一括	—	—	前頭骨、頭頂骨（R）、側頭骨L（2）・R（2）、環椎、頸椎、胸椎破片、腰椎、仙骨（2）、椎骨破片、肋骨L（5）・R・破片、肩甲骨L（4）・R、鎖骨L（2）・R（3）、上腕骨L（5）・R（2）、橈骨L（2）・R（3）、尺骨L（3）・R（3）、舟状骨L、第1中手骨L（2）・R（2）、第2中手骨L・R、第3中手骨L（3）・R（4）、第4中手骨L・R（3）、第5中手骨L（3）、基節骨（15）、中節骨（2）、腸骨L（2）・R、大腿骨L（3）・R（3）、膝蓋骨L（2）・R（2）・L/R、脛骨L・R（2）、腓骨L（2）・R（3）、踵骨L・R（3）、中間楔状骨L、立方骨R（2）、舟状骨L、第1中足骨L（1）・R、第2中足骨L（2）・R（4）、第3中足骨L・R、第4中足骨L（2）・R（2）、第5中足骨L・R（2）、基節骨、中節骨（5）、遊離歯
7	—	墓室	1	成人	不明	大腿骨L・R
7	—	墓室	2	成人	不明	大腿骨L・R

第19表　勢理客城門原古墓群出土人骨一覧

L・R：左右とも残存、L/R：左右不明、（ ）：同定数、〔 〕の無いものは1点（破片・遊離歯は除く）

出土箇所			人骨No.	年齢	性別	出土組成
墓No.	蔵骨器No.	地点				
7	—	墓室	一括	—	—	前頭骨L・R、側頭骨L、下顎骨(2)、仙骨、椎骨破片、肋骨破片、肩甲骨L(2)、鎖骨L、上腕骨L(2)・R(2)、橈骨L・R、尺骨L(2)・R(2)、大菱形骨L、舟状骨L、月状骨L、第1中手骨R、第2中手骨L(2)・R、第4中手骨L、第5中手骨L、基節骨(3)、中節骨、末節骨(2)、坐骨L、恥骨L、腸骨＋坐骨R(2)、膝蓋骨L(2)・R(2)、脛骨L(2)・R(2)、腓骨R(2)、距骨R、中間楔状骨L、内側楔状骨L、立方骨R、舟状骨L・R、第1中足骨L、第4中足骨L、第5中足骨L、基節骨(5)
8	—	墓室右側	1	成人	不明	上腕骨R
8	—	墓室右側	2	成人	不明	上腕骨R
8	—	墓室右側	一括	—	—	頭蓋骨破片、肋骨破片、肩甲骨L、鎖骨R、大腿骨L/R、脛骨L/R、
8	—	墓室床面	1	成人	不明	尺骨R
8	—	墓室床面	2	未成人	不明	尺骨L・R
8	—	墓室床面	一括	—	—	前頭骨L、側頭骨L・R、頬骨L・R、肋骨破片、肩甲骨L、鎖骨R、上腕骨L・R、橈骨R(2)、恥骨R、大腿骨L、膝蓋骨L/R、脛骨L、踵骨L・R、距骨L、立方骨R、舟状骨R(2)、第4中足骨L・R、第5中足骨L(2)、基節骨(2)、中節骨、遊離歯
9	—	墓室右側	1	成人	不明	距骨L
9	—	墓室右側	2	成人	不明	距骨L
9	—	墓室右側	3	乳幼児	不明	脛骨L
9	—	墓室右側	一括	—	—	頭蓋骨破片、下顎骨L(2)・R、頸椎(2)、胸椎、腰椎、椎骨(7)、肋骨R(5)・破片、肩甲骨L(2)・R、鎖骨R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、舟状骨L、第1中手骨L、第2中手骨L、腸骨+坐骨L・腸骨R、大腿骨R・L/R、腓骨L・R(2)、踵骨L(2)、踵骨L、第2中足骨L(2)・R、第3中足骨L・R、第4中足骨L・R、第5中足骨R、中節骨
10	1	—	1	成人	不明	頭蓋骨破片、大腿骨L・R、脛骨L・R
10	1	—	2	成人	不明	前頭骨破片、頭頂骨L・R、後頭骨、大腿骨L
10	1	—	一括	—	—	椎骨破片、肩甲骨R、中節骨、腸骨L、踵骨L、第1中足骨R、基節骨(4)
10	2	—	1	成人	不明	頭頂骨L・R、後頭骨、椎骨破片、上腕骨L・R、橈骨L、尺骨L・R、大菱形骨R、小菱形骨R、有頭骨R、有鉤骨L・R、月状骨R、第3中手骨L、第4中手骨L・R、第5中手骨L、中節骨(4)、寛骨L/R、大腿骨L・R、脛骨L・R、外側楔状骨R、中間楔状骨L・R、第2中足骨L・R、中節骨(2)
10	2	—	2	未成人	不明	頭蓋骨破片、上腕骨L、脛骨L
10	2	—	3	未成人	不明	椎骨破片、遊離歯
10	7	—	1	成人	不明	大腿骨L・R
10	7	—	2	成人	不明	大腿骨L
10	7	—	3	成人	不明	大腿骨L
10	7	—	一括	—	—	後頭骨(3)、頬骨L(2)・R(2)、下顎骨(2)・L、軸椎(3)、頸椎(2)、胸椎(4)、腰椎、仙椎(2)、椎骨破片、肋骨破片、肩甲骨L、鎖骨L、上腕骨L(2)・R(3)、橈骨L(2)・R、尺骨L(2)・R、大菱形骨R、小菱形骨R、有頭骨L(2)・R(2)、有鉤骨L、舟状骨L(2)・R、月状骨L・R、三角骨L、第1中手骨R、第2中手骨L・R(2)、第3中手骨L・R(2)、第4中手骨L(2)・R、第5中手骨R(2)、基節骨(9)、中節骨(4)、末節骨(5)、腸骨L、腸骨＋坐骨R、大腿骨L・R、膝蓋骨L・R、脛骨L・R(2)、腓骨L・R(2)・L/R、踵骨L・R、距骨L(2)・R(2)、外側楔状骨L(2)・R(2)、中間楔状骨L(2)・R(2)、内側楔状骨L(2)・R、立方骨R(3)、舟状骨L・R、第1中足骨L・R(3)、第2中足骨L、第3中足骨L・R、第4中足骨L(2)・R(2)、第5中足骨L(2)・R(2)、基節骨(5)、末節骨
10	9	—	1	—	不明	遊離歯
10	14	—	1	成人	不明	頭頂骨L・R、側頭骨R、椎骨破片、橈骨L/R、有鉤骨L、豆状骨L、第1中手骨L、第2中手骨L、第3中手骨L、第4中手骨L、基節骨、遊離歯
10	15	—	1	成人	不明	頭蓋骨破片、下顎骨R、津骨破片、上腕骨L、橈骨L/R、有頭骨L・R、月状骨L・R、第3中手骨R、大腿骨L/R
10	17	—	1	成人	不明	頭蓋骨破片、 下顎骨L、胸椎(4)、腰椎(4)、椎骨破片、肋骨破片、肩甲骨R、上腕骨L・R、橈骨L、尺骨L、舟状骨R、月状骨L、 第3中手骨L・R、第4中手骨R、 第5中手骨L、基節骨(2)、中節骨、末節骨、坐骨R、大腿骨R、脛骨R、踵骨L、中間楔状骨R、内側楔状骨R、第1中足骨R、第2中足骨L、第3中足骨L・R、第4中足骨R、基節骨(6)、中節骨(3)、末節骨 (2)
10	18	—	1	成人	不明	頭蓋骨破片、椎骨破片、豆状骨L・R、第1中手骨R、第3中手骨L・R、第4中手骨L・R、基節骨(2)、中節骨、末節骨、大腿骨L・R、脛骨L・R、踵骨L、外側楔状骨R、第3中足骨R、基節骨、末節骨
10	20	—	1	成人	不明	頭蓋骨破片、肋骨破片、尺骨R、第3中手骨R、大腿骨L/R、脛骨L、中間楔状骨R、第4中足骨R、第5中足骨R、末節骨(2)
10	21	—	1	成人	不明	三角骨R、基節骨(2)、腓骨R、中間楔状骨R
10	—	墓室など	一括	成人	—	前頭骨L(2)・R、頭頂骨L(2)・R、側頭骨L(4)・R(5)、頬骨R、後頭骨C・R(2)、上顎骨L(2)・R(3)、頭骨破片、下顎骨(8)・破片、環椎、軸椎(3)、頭椎(9)、胸椎(20)、腰椎(7)、仙骨、仙椎破片、椎骨破片、胸骨丙、胸骨体(2)、胸骨破片、肋骨破片、肩甲骨L(4)・R(8)、鎖骨L(6)・R(6)、上腕骨L(12)・R(12)、橈骨L(10)・R(9)、尺骨L(11)・R(10)、大菱形骨L、小菱形骨R、有頭骨L・R、有鉤骨R、舟状骨L・R(3)、三角骨R、第1中手骨L(2)・R(2)、第2中手骨L(2)・R(2)、第3中手骨L(9)・R(4)、第4中手骨L・R(3)、第5中手骨L(2)・R(2)、基節骨(20)、中節骨(9)、寛骨L、腸骨L(3)・R(4)、坐骨R(2)、腸骨＋坐骨L(2)・R、恥骨R、大腿骨L(14)・R(13)・破片、膝蓋骨L(4)・R(6)、脛骨L(10)・R(10)、腓骨L(8)・R(11)、踵骨L(9)・R(11)、距骨L(4)・R(10)、外側楔状骨L・R、内側楔状骨L(2)・R、立方骨L・R(3)、舟状骨L(2)・R(2)、第1中足骨L(4)・R(3)、第2中足骨L(2)・R(7)、第3中足骨L(8)・R(3)、第4中足骨L(6)・R(4)、第5中足骨L(6)・R(6)、基節骨(15)、末節骨
10	—	墓室など	一括	小児	—	下顎骨R、鎖骨L・R、上腕骨L/R、橈骨L、尺骨L、第1中手骨R、基節骨、坐骨L、大腿骨L・R・L/R、脛骨L・R、腓骨R、第5中足骨L
10	—	墓室など	一括	乳幼児	—	仙骨破片、鎖骨L、橈骨R、尺骨L(4)、腸骨R、大腿骨L(3)・R、腓骨R、第1中足骨L/R
12	—	墓室内右室	1	成人	不明	腓骨L・R
12	—	墓室内右室	2	成人	不明	腓骨L・R
12	—	墓室内右室	3	成人	不明	腓骨L・R
12	—	墓室内右室	4	成人	不明	腓骨L・R
12	—	墓室内右室	5	成人	不明	腓骨L・R
12	—	墓室内右室	6	成人	不明	腓骨L
12	—	墓室内右室	7	成人	不明	腓骨L・R
12	—	墓室内右室	8	成人	不明	腓骨L
12	—	墓室内右室	9	小児	不明	腓骨R
12	—	墓室内右室	10	小児	不明	椎骨(2)、肋骨R(2)・破片、上腕骨L・R、橈骨R、尺骨R、坐骨L、大腿骨L/R、腓骨R
12	—	墓室内右室	11	乳幼児	不明	後頭骨、肩甲骨L、鎖骨L・R、上腕骨L・R、尺骨L・R、大腿骨L、腓骨L/R
12	—	墓室内右室	12	乳幼児	不明	下顎骨
12	—	墓室内右室	一括	—	—	頭蓋骨破片、側頭骨L、上顎骨R、下顎骨(4)、環椎、軸椎、頸椎(5)、胸椎(13)、腰椎(5)、仙骨破片、胸骨丙(2)、肋骨L(17)・R(13)・破片、肩甲骨L(3)・R(4)、鎖骨L(5)・R(4)、上腕骨L(2)・R(3)・L/R(2)、橈骨L(5)・R(4)、尺骨L(5)・R(5)、大菱形骨R、有頭骨R(2)、第2中手骨L(3)・R(2)、第3中手骨L(4)・R、第4中手骨L・R(2)、第5中手骨L、基節骨(2)、中節骨(2)、指骨破片、腸骨＋坐骨L・坐骨R(2)、大腿骨L(4)・R(2)・L/R(5)、膝蓋骨L(3)・R(5)、脛骨L(5)・R(3)、腓骨L/R、踵骨L(4)、距骨L(3)・距骨R、内側楔状骨L(2)・R、舟状骨R、第1中足骨L(3)・R(6)、第2中足骨L(2)・R(2)、第3中足骨L(4)・R(2)、第4中足骨L・R(2)、第5中足骨L(5)・R、基節骨(7)、末節骨
14	1	墓室内	1	成人	不明	下顎骨R、橈骨L・R、遊離歯
14	1	墓室内	2	小児	不明	下顎骨L、遊離歯
14	1	墓室内	3	乳幼児	不明	肩甲骨L・R、大腿骨L、腓骨L/R、四肢骨破片、中手骨破片、指骨

第19表　勢理客城門原古墓群出土人骨一覧

L・R：左右とも残存、L/R：左右不明、（ ）：同定数、（ ）の無いものは1点（破片・遊離歯は除く）

出土箇所			人骨No.	年齢	性別	出土組成
墓No.	蔵骨器No.	地点				
14	1	墓室内	一括	—	—	下顎骨、頸椎、胸椎、仙椎、椎骨(3)、肋骨破片、肩甲骨L・R、鎖骨R、上腕骨L・R、橈骨L・R(2)、尺骨L・R、舟状骨L・R、第1中手骨L、第4中手骨R、基節骨(4)、中節骨、大腿骨L、膝蓋骨L・R、脛骨L・R、踵骨L・R、距骨L・R、外側楔状骨L、中間楔状骨L、立方骨L、舟状骨L、第1中足骨L、第2中足骨L・R、第3中足骨R、第4中足骨L・R(2)、第5中足骨L(2)、中足骨破片、基節骨(3)、末節骨
14	2	墓室内	1	不明	不明	指骨
16	1	—	1	成人	不明	頭蓋骨破片、頸椎、椎体(3)、肩甲骨R、上腕骨L・R、橈骨L、尺骨L、小菱形骨R、有鉤骨L・R、舟状骨R、第2中手骨R、第3中手骨L、第4中手骨L、第5中手骨L、基節骨(5)、中節骨(6)、末節骨(5)、寛骨R、大腿骨L、膝蓋骨R、腓骨L・R、踵骨L・R、距骨L、外側楔状骨R、舟状骨L、第2中足骨L、第3中足骨L、第5中足骨L、基節骨(2)、中節骨、遊離歯
16	2	—	2	小児	不明	鎖骨R、膝蓋骨L/R、基節骨、末節骨、遊離歯
16	2	—	1	成人	不明	頭蓋骨破片、仙椎破片、椎体破片(4)、肋骨破片(9)、上腕骨R、橈骨R、尺骨L、大菱形骨L・R、有鉤骨L・R、第2中手骨R、第4中手骨L、基節骨、中節骨、末節骨、種子骨、指骨(3)、腸骨R、坐骨破片(2)、大腿骨L・R、膝蓋骨L・R、脛骨破片、腓骨L、踵骨L、外側楔状骨L、内側楔状骨L・R、第3中足骨L、第5中足骨L、基節骨(2)、中節骨(3)、末節骨(4)
16	4	—	1	未成人	不明	大腿骨L・R、脛骨L・R
16	4	—	2	未成人	不明	大腿骨L・R、脛骨L
16	4	—	一括	—	—	頭蓋骨破片、下顎骨L・R、仙椎、椎体(6)、肋骨破片、肩甲骨R(2)、鎖骨L・R、橈骨破片、尺骨L、腸骨L、坐骨L、恥骨L・R、腓骨破片
16	5	—	1	成人	不明	頭蓋骨破片、頸椎(3)、胸椎、腰椎、椎骨(2)、肋骨破片、指骨(8)、橈骨L/R、有頭骨L、舟状骨L・R、月状骨L・R、三角骨L・R、豆状骨R、第1中手骨L、第2中手骨L、第3中手骨L、第4中手骨R、基節骨(5)、中節骨(5)、腸骨L、大腿骨R、膝蓋骨L、基節骨
16	5	—	2	乳幼児	不明	上顎骨L、下顎骨、遊離歯
16	6	—	1	不明	不明	頭蓋骨破片、椎骨、肋骨破片、橈骨R、舟状骨L、第2中足骨R、第3中足骨R、第4中足骨、遊離歯
16	7	—	1	不明	不明	頭頂骨、後頭骨、椎骨破片
16	8	—	1	不明	不明	頭蓋骨破片、下顎骨破片、椎骨破片、尺骨L、第2中手骨L、第3中手骨L、恥骨L、踵骨R、距骨R、第2中足骨
16	8・9左隣	—	1	不明	不明	遊離歯
16	8・9左隣	—	2	不明	不明	遊離歯
16	8・9左隣	—	3	乳幼児	不明	上腕骨R、指骨(2)、中手/中足骨L/R、遊離歯
16	8・9左隣	—	一括	—	—	頭蓋骨破片、椎骨破片、大菱形骨L・R、舟状骨R、月状骨R、第3中手骨R、基節骨(2)、指骨(2)
16	9	—	1	成人	不明	頭蓋骨破片、頸椎(2)、椎骨破片、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、小菱形骨L・R、有頭骨L、三角骨R、第2中手骨L・R、第3中手骨L、基節骨(4)、中節骨(4)、末節骨、中手骨破片(2)、大腿骨L・R、膝蓋骨L・R、脛骨L、踵骨L、外側楔状骨R、中間楔状骨R、内側楔状骨L、第5中足骨R、基節骨(3)、中節骨、末節骨
16	9	—	2	乳幼児	不明	頭蓋骨破片、肋骨破片、尺骨R
16	9	—	3	乳幼児	不明	遊離歯
16	10	—	1	成人	不明	椎骨破片、小菱形骨R、第4中手骨R、大腿骨破片、内側楔状骨L、末節骨、遊離歯
16	10	—	2	乳幼児	不明	下顎骨破片、椎骨破片、肋骨破片、上腕骨R、遊離歯
16	11	—	1	成人	不明	大腿骨L・R
16	11	—	2	成人	不明	大腿骨破片
16	11	—	一括	—	—	頭蓋骨破片、上腕骨L/R、指骨、橈骨R、脛骨R、立方骨R、第3中足骨R、第4中足骨R、中節骨、足根骨L/R、遊離歯

第20表　年齢・性別構成及び最小個体数一覧

墓No.	成人				未成人					不明	合計
	男性	女性	不明	小計	若年	小児	乳幼児	不明	小計		
1			4	4		1			1	1	6
2			6	6		1	1		2		8
3			2	2					0		2
4			8	8		1			1		9
5			8	8		1			1		9
6		1	5	6		2			2		8
7			2	2					0		2
8			3	3				1	1		4
9		1	1	2			1		1		3
10		1	12	13		1	1	2	4		17
12			8	8		2	2		4		12
14			1	1		1	1		2	1	4
16			7	7		1	5	2	8	5	20
合計	0	3	67	70	0	11	11	5	27	7	104

第21表　上顎骨及び下顎骨残存歯の観察表

墓No.	蔵骨器No.	人骨No.	R 残存状況								L							
1	一括	—		○ ○	○ ○	○ ○	○ ×	／ ○	／ ／	○ ／	○	○	○	／				
1	シルヒラシ	1	×	×	×	×	×	×	△	△	△	△	△	△	○	△	△	／
5	一括	A						／	／	○	○	△	／	／	／			
5	一括	B					／	○	○	／	／	／	／					
6	一括	A									／	／	○	○	○	○	○	○
7	一括	A											○	P_1	○	○	M_2	
7	一括	B																
9	一括	A	／	／	／	／	／											
9	一括	B												／	／	／	×	／
10	7	A	／	／	×	○	○	／	／	／	／	／	／	○	○	○	／	／
10	7	B							／	／	／	／						
10	15	1		×	×	○	○	○	○	／								
12	—	12		(△)	(△)	m_2	△	△	△	△	△	○	○	○	m_2	(△)	／	
12	—	A	M_3	○	M_1	P_2	P_1	○	○	○	○	○	○	○	P_2	M_1	M_2	M_3
12	—	B	M_3	M^2 M_2	M^1 M_1	○ P_2	P_1	C	○	○	○	○	／					
12	—	C	×	×	×	×				／	／	／	／	／				
12	—	D	／	×	／	／	／	／	／									

第21表　上顎骨及び下顎骨残存歯の観察表

墓No.	蔵骨器No.	人骨No.	R 残存状況							L 残存状況						
14	1	1	／	×	／											
14	1	2								／ (I_1)	○ (I_2)	○ (c)	○ (P_1)	○ (P_2)	／ (M_1)	
14	1	A								／	○	○ (c)	○	○	○	／
16	一括	—			(M_1)	○	○									
16	5	2								(I^1) ○ ○	○ ○	○ (c)	m^1 △	m^2 ○	(M_1)	

凡例）歯種記号：残存歯、○：歯槽開放、×：歯槽閉鎖、／破損、△歯根のみ残存

（　）：未萌出、〔　〕：萌出中、網掛：齲歯、空白：欠失/未形成

第22表　頭蓋骨及び下顎骨観察表

墓No.	蔵骨器No.	人骨No.	部位	所見
16	一括	—	頭蓋骨	破片のみ
			下顎骨	R:乳臼歯の歯槽部から関節・筋突起まで残存
16	5	2	上顎骨	L:乳切歯から乳臼歯の歯槽部まで残存
			下顎骨	R:乳切歯部のみ、L:概ね残存
16	7	1	頭蓋骨	ラムダ縫合の癒合進行中
14	1	1	下顎骨	Rの一部のみが残存
14	1	2	下顎骨	Lの一部のみ残存
12	—	12	下顎骨	左下顎枝欠損、m_2萌出完了
10	1	2	頭蓋骨	矢状・冠状縫合外面未癒合、内面癒合済
10	2	1	頭蓋骨	矢状・冠状縫合外面未癒合、内面癒合済
10	14	1	頭蓋骨	矢状・冠状縫合外面未癒合、内面は破損につき不明

第23表　変異等一覧

墓No.	地点	人骨No.	部位	LR	変異種別	観察所見
1	シルヒラシ	1	軸椎	—	焼骨	被熱による変色
1	シルヒラシ	2	軸椎	—	焼骨	被熱による変色
1	シルヒラシ	2	第3中足骨	R	焼骨	被熱による変色
1	シルヒラシ	一括	全て	—	焼骨	被熱による変色
1	墓室右棚	一括	大腿骨	L/R	焼骨	被熱による変色、収縮による細かな亀裂
1	墓室右棚	一括	大腿骨	L/R	焼骨	被熱による変色、収縮による細かな亀裂
1	墓室右棚	一括	全て	—	焼骨	被熱による変色
1	墓室内奥棚	1	全て	—	焼骨	被熱による変色
3	墓室内	2	第4中足骨	L	変形	第3中足骨との関節がやや変形
4	墓室内	—	頭蓋骨破片	—	焼骨	被熱による変色
6	墓室内	一括	寛骨	R	前耳状溝	最大幅９㎜、比較的浅い溝状の痕跡
8	墓室左側	1	上腕骨	R	焼骨	内外面に黒色の焼け跡
8	墓室左側	2	上腕骨	R	焼骨	外面及び内面に黒色焼け跡
9	墓室右側	一括	寛骨	L	前耳状溝	最大幅10㎜、比較的深い溝状の痕跡
9	墓室右側	一括	寛骨	R	前耳状溝	最大幅10㎜、比較的深い溝状の痕跡
10	羨道部	一括	橈骨	R	骨増殖	関節環状面に骨増殖
10	羨道部	一括	脛骨	L	変形	近位側骨幹の変形？
10	シルヒラシ	一括	寛骨	R	前耳状溝	最大幅11㎜、比較的浅い溝状の痕跡
10	シルヒラシ	一括	脛骨	R	変形	近位側骨幹に瘤状の骨増殖など、原形がわかりにくい程度に変形
10	シルヒラシ	一括	腓骨	R	変形	骨幹が骨増殖により変形
10	墓室内南東隅	一括	第4中足骨	L	骨増殖	遠位端に骨増殖
12	墓室内左室	一括	鎖骨	L	変形	鎖骨体にねじれ
12	墓室内左室	一括	仙骨	—	骨棘	椎体復縁に骨棘形成
12	墓室内左室	一括	第1中足骨	R	骨増殖	遠位端に骨増殖による変形

第５章　おわりに

今回、調査対象となった墓は造成工事中に発見されたものであり、限られた期間での調査であったが結果として総数 16 基の調査を行った。以下に調査成果の概要と今後の課題を示し、本書のまとめとしたい。

遺　構　今回、調査対象となった 16 基の墓は全て小湾川南岸の石灰岩小丘陵に掘り込まれた横穴式の掘込墓である。調査前の状況としては使用された当時のまま密閉された墓は無く、全て墓口が空いているか、墓正面の石灰岩盤や石積みがかなり損壊していた。また、これらの墓の多くは墓室内に土砂が堆積していた。発掘調査では沖縄戦当時、砲弾が墓を貫通し墓室奥壁に着弾した痕が複数確認されており、本遺跡が激しい砲撃に晒され破壊されたことが伺える。戦後、城門原一帯は米軍に接収され、昭和 29（1954）年に返還されて沖縄食糧株式会社敷地となったが、その過程で丘陵頂部の削平、丘陵南斜面の切土が広範囲に行われて、更に遺跡の破壊や土砂の流入が進行したものとみられる。戦後、殆どの墓は再使用した形跡がみられず、13 号墓のみ墓前面をコンクリートで改修し再使用していた。以上の状況から蔵骨器の移転行為が推定されるが、詳細については今回の調査で明らかにすることはできなかった。

墓の外観形状については、大きく２種類に分けられる。一つは、いわゆる「板が門」を設ける墓とみられるもので墓開口部から奥壁までストレートに掘り込み、墓入口の側面上部に方形のホゾ穴、墓入口隅や基部に円柱を嵌めたと思われる浅い窪みや溝状の加工痕がみられる墓である（３号・５号墓）。これらの墓には同時に墓口基部に石積みを伴う墓があり（５号墓）、墓の閉塞について木製から、後に石積みに改修した形跡が認められるものである。

もう一つは屋根形状が不明ながら破風・平葺墓的な要素を持つ家型の墓（以下、家型墓という。）で、基本的に墓室、墓口、庭で構成され、墓口は隧道である。墓口の構造は、墓口を含め全体を岩盤掘り込みで造る（１・10・16 号墓）墓と、羨道部（墓口）のみ石積で仕上げた墓（７・11 号墓）がみられた。墓口のサイズは高さ 140 ～ 150cm× 幅 70 cm前後のものと 18 世紀以降に典型化するとされる高さ 90cm× 幅 60 cmのものがみられた。墓口の閉塞方法については蓋石や切石を用いたと推測されるが、１号墓では墓口左側壁の上部にホゾ穴があることから、閉塞材に木材が使用されたものとみられる。このようなホゾ穴を有する墓は板が門の墓を含め、調査区域の北西側にまとまって分布する傾向にある。一般に木材を用いて閉塞する形式の墓は古式とされることから、丘陵北東側で造墓が始まり、墓群が形成されていったものと考えられる。

墓室内部の平面形状については横長の方形や楕円形を基本とし、多くの墓で奥壁や左右壁の一部を「凸状（出窓状）」に掘り込み、棚を設ける（２・３・５・７・８・９・10・11・16 号墓）。また、イケとみられる墓室壁面に小規模な横穴を設ける墓があり、奥壁中央に設ける墓（1・16 号墓）と側壁に設ける墓（８号墓：内部から焼骨検出）が見られた。

墓室床面に小穴を掘り、ブタの頭骨などを埋納する遺構は７・９・11・13号墓から検出されている。これらは造墓時の祭祀に伴う遺構とされる。埋納物の構成は、ブタ頭骨のみ、ブタ頭骨+炭、ブタ頭骨+炭+無文銭、炭のみといった組み合わせがみられ、いずれも墓室内の基底部を浅く掘り込む（７・９・11号墓）か、礫敷き内（13号墓）に埋納している。墓室形状との関係でみると、方形+出窓状の

棚を有する墓から検出される傾向にある。埋納位置については一定でなく、シルヒラシの中央や左前方端などである。シルヒラシの左前方隅に埋納する事例は世利原の近世墓（浦添市教育委員会 2008）にみられる。

16号墓の墓室棚は、調査した墓の中で、最も複雑な加工が施される。出窓状の棚を左右の側壁に各１棚設け、奥壁に柱状の縁取りで３つに仕切られた中央にイケや棚を設けるなど特異な墓である。類例として安謝西原古墓群第35・37・45号墓（那覇市教育委員会2001）があり、18世紀初頭に構築されたものと推定されている。那覇市例は更に精緻で複雑な加工が施されており那覇市内でも特異な墓であるという。両遺跡は安謝川を挟む近い距離にあり、興味深い遺構である。

遺　物　出土遺物について蔵骨器から見てみると、専用蔵骨器には家形（石製・陶製（赤焼））と甕形（陶製）がある。転用蔵骨器には宮古式土器やパナリ焼の土器壷、沖縄産水甕、中国産褐釉壷などがあり、転用にあたって口縁～胴部にかけて大きく打ち欠くものや胴部に小穴を穿孔するといった加工が施される。転用蔵骨器には火を受けた骨片が納められているものがあり、骨片に混じって多数の無文銭が検出されている（1 号墓蔵骨器№⑤）。その他の遺物としては、本土産磁器瓶や沖縄産陶器瓶、近現代の磁器碗や合子などの陶磁器、金属製飾り金具、青銅製や陶製の煙管、古銭、指輪、釘、洋鋏、ガラス玉などが得られた。

１号墓からは、大型のガラス玉、崇寧重寶、大量の無文銭が出土している。これらの遺物構成は、那覇市首里金城町のナカンダカリヤマの古墓群出土資料に類似しており、首里との関係も考えられるなど、被葬者を推測する重要な資料であろう。

蔵骨器に記されたミガチ（銘書）をみると、10・16 号墓出土蔵骨器では、浦添間切宮城村・勢理客村・屋富祖村といった近隣のムラ名や仁也、筑登之、筑登之親雲上などの身分を示す名称が記されていた。また、10 号墓では豊見城間切伊羅波（伊良波）村、本那覇瀬長村といった被葬者にまつわる地名、玉貫細工（宮城村）や鍛治細工（前記伊羅波村・瀬長村）といった職業を記した銘書が確認されている。後者は銘書に年代は記されていないが、ボージャー厨子蓋の編年（安里 2006）から、瀬長村資料が 1660 ～ 1690 年代、伊羅波村資料が 1740 ～ 1770 年代に比定される。17 世紀後半及び 18 世紀中頃の専門技術者の出自や他間切からの移住を示唆する可能性がある資料と思われる。

今後の課題　古老の話（浦添市史６）として、かつての勢理客集落はグスクジョー（現沖縄食糧）付近にあったといわれ、戦前まではヒヌカンや勢理客之殿などがあったという。集落と墓域という位置関係が注目されるが、旧集落とされる一帯の詳細は不明であり、今後、集落に関する調査が課題となろう。

小湾川周辺に目を移すと、かつて小湾川河口の突端にあるグスクジョー御獄の崖下周辺には古代人骨が収納された墓がみられたという。また、小湾川北岸の斜面には仲西村を村立てした人々の共同墓とされる仲西世代墓（ユデーバカ）が所在する。仲西世代墓は、板門墓（イタジョー墓）とも呼ばれ、戦後は仲西集落内に移設（墓正面に記銘「仲西世代墓／一九六二年十一月十六日建立」）されて現在は空墓となっているという。かつての小湾川下流域は古くから墓域として利用されており、本遺跡については、城間村や宮城村、屋富祖村、勢理客村など浦添市西部一帯の村々の地方役人や他の地域から来た職工に連なる人々が葬られる広域の墓地であった可能性が考えられる。

本市の墓制は明治時代において既に家族墓となっていることが知られており、戦前、浦添市西部の

集落（城間、屋富祖、宮城、仲西）は各字内に墓地が所在していた。しかし、本古墓群の被葬者は、様々な地域の人々から成っており、各集落に墓域が成立する以前の状況を示唆しているのかも知れない。小湾川北岸を含め一帯の調査はこれからであり、今後とも注意が必要である。

最後に、今回の調査にあたり、施主の沖縄食糧株式会社、施工の国場組並びに関係者の皆様には多大な御協力を頂きました。重ねて感謝申し上げます。

参考・引用文献

・浦添市教育委員会 1984　『浦添市史』第 5 巻資料編 4 戦争体験記録
・浦添市教育委員会 1984　『浦添市史』第 6 巻資料編 5 自然・考古・産業・歌謡
・浦添市教育委員会 1988　『浦添の地名』
・外間太和 1989　『仲西村の沿革誌』
・浦添市教育委員会 1990　『浦添市文化財悉皆調査報告書』
・浦添市教育委員会 1992　『城間古墓群－牧港補給地区開発工事に伴う緊急発掘調査報告書－』
・那覇市教育委員会 2001　『安謝西原古墓群－那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告Ｘ－』
・沖縄県立埋蔵文化財センター2005　『ナカンダカリヤマの古墓群－急傾斜地崩壊危険区域内擁壁工事に伴う発掘調査報告書－』
・浦添市仲西自治会 2005　『浦添市仲西自治会創立 60 周年（戦後）記念誌　仲西』
・那覇市教育委員会 2007　『銘苅古墓群－重要遺跡確認調査報告－』
・浦添市教育委員会 2008　『当山世利原古墓群　当山宗地原近世墓群　世利原の近世墓－浦添大公園整備事業に伴う発掘調査報告書－』

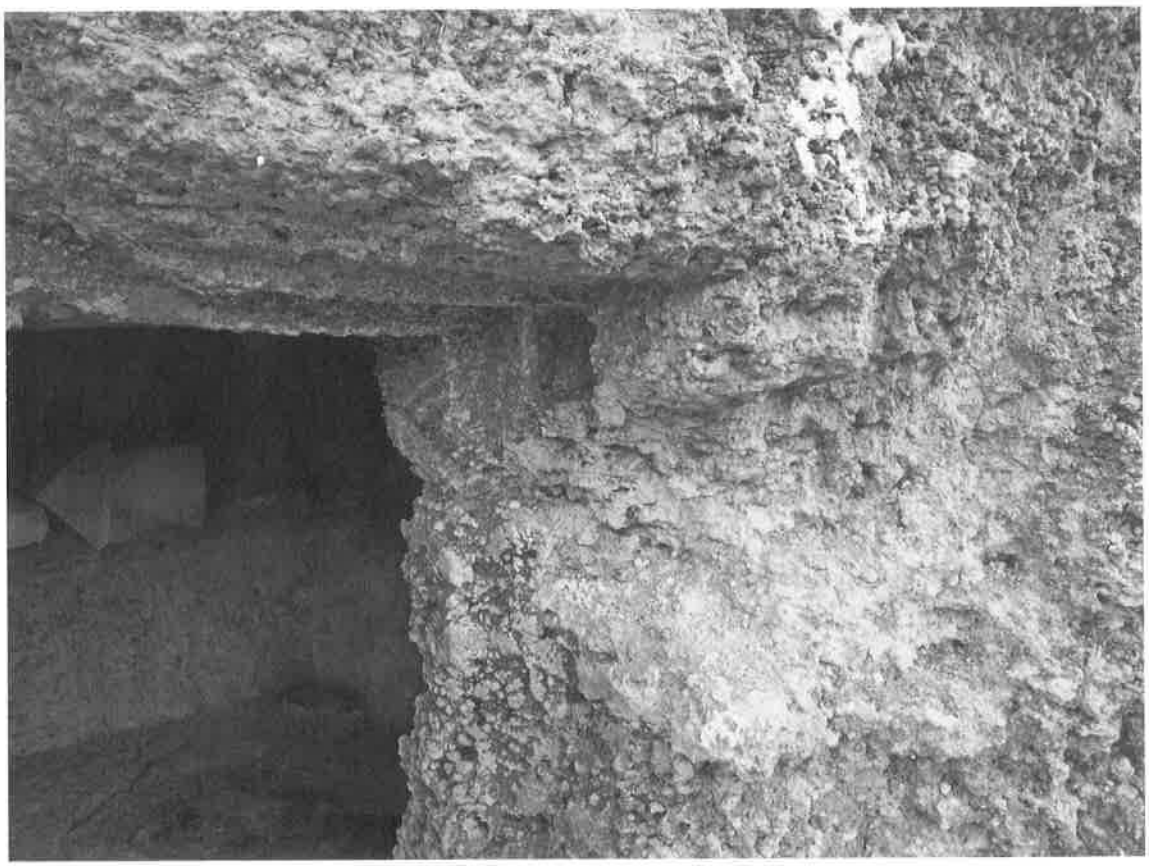
写　真　図　版

図版 1

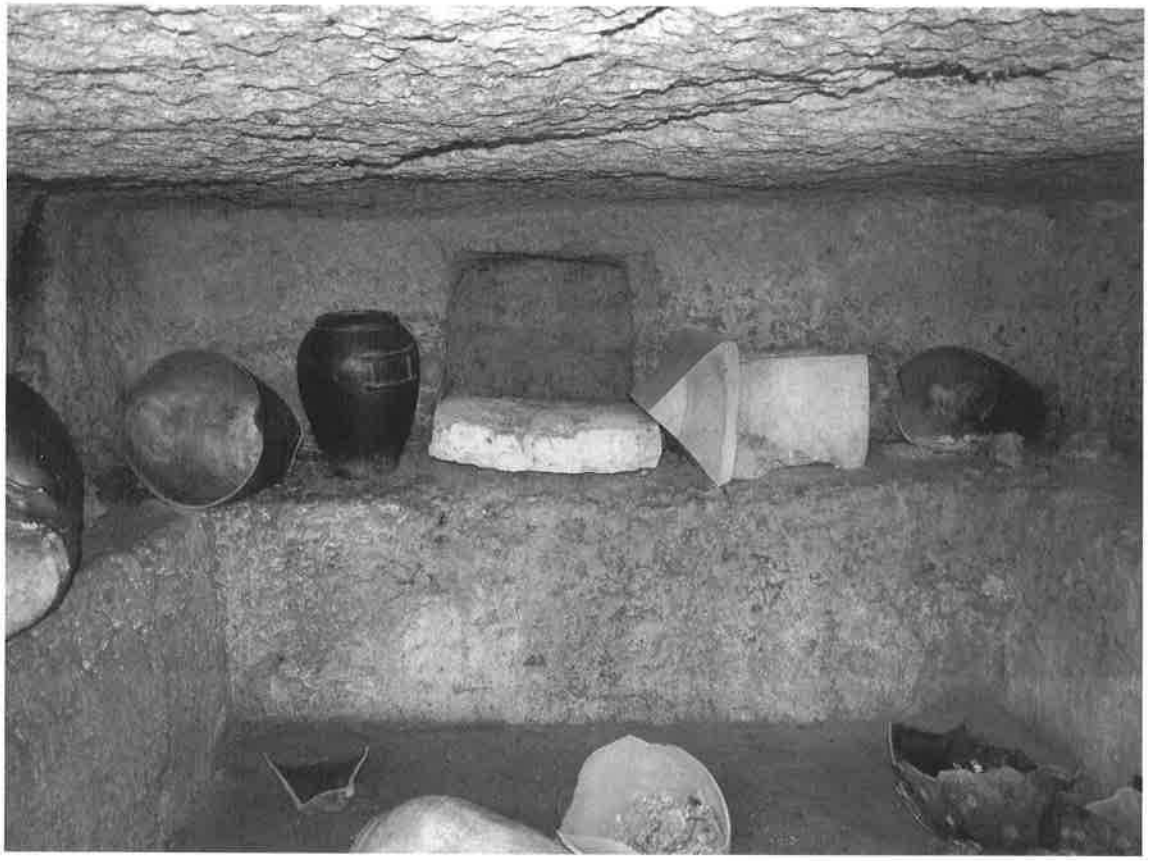
調査地遠景（円内）：上空から

調査前状況（伐採後：北より）

1 号墓 遺構完掘状況

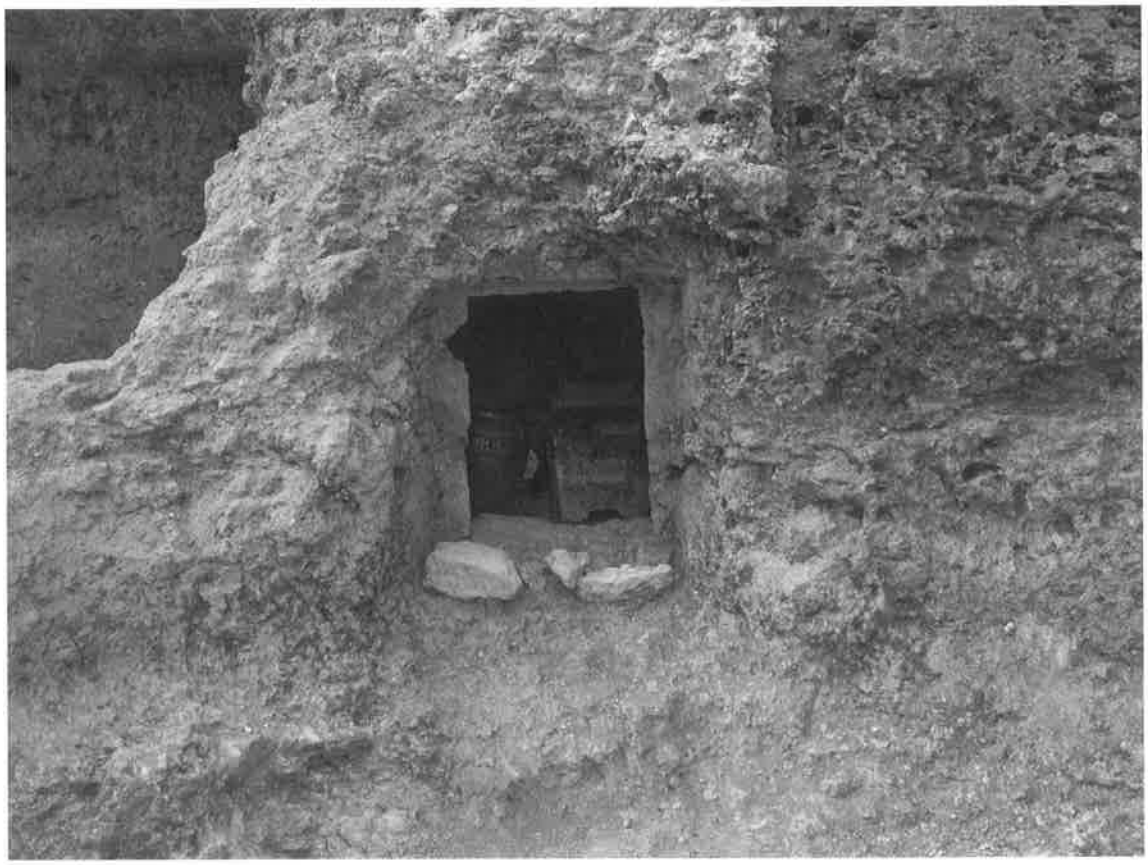


1 号墓 墓口左側面のホゾ穴検出状況



1 号墓 墓室内蔵骨器検出状況

1 号墓 墓室内奥壁の完掘状況



10 号墓 遺構完掘状況

10 号墓 墓室内蔵骨器検出状況 1（床面）

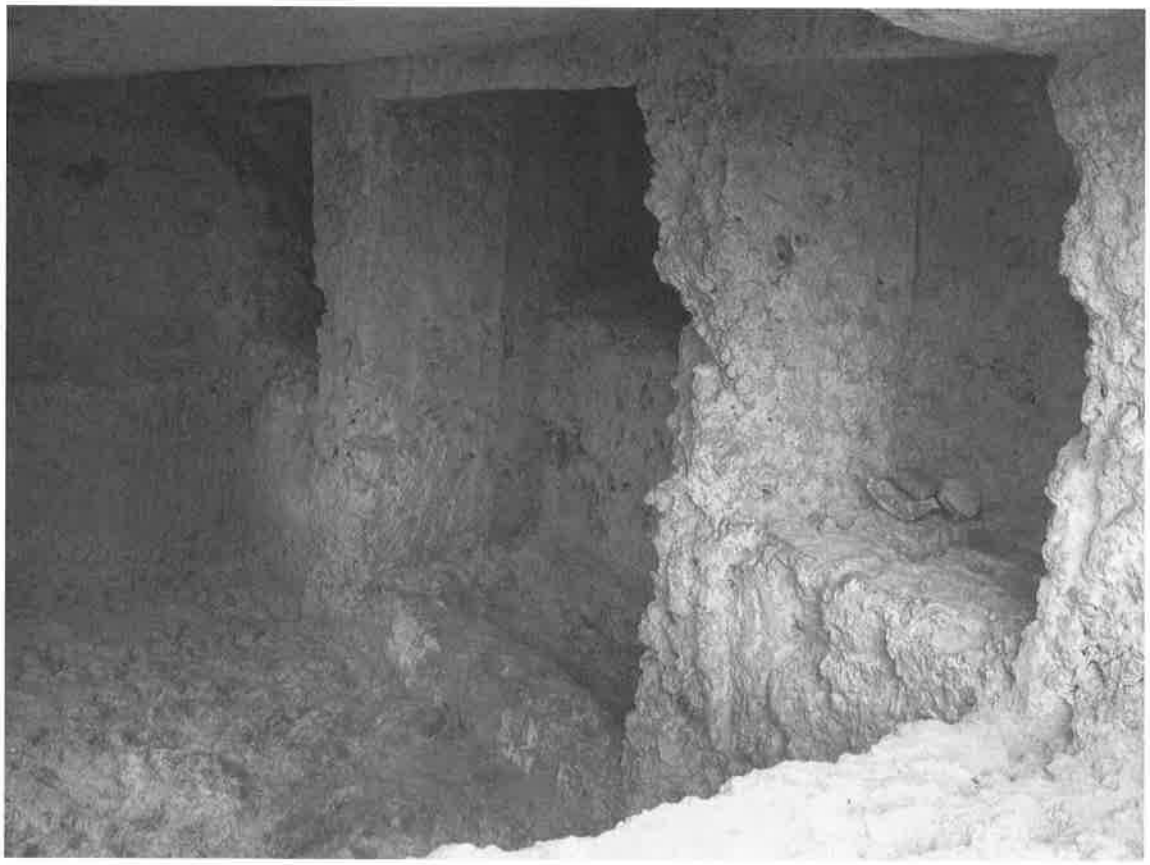
10 号墓 墓室内蔵骨器検出状況 2（奥棚）

10 号墓 墓室内蔵骨器検出状況 3（左棚）

16 号墓 遺構完掘状況

16 号墓 墓室内遺物検出状況

16 号墓 墓室奥壁完掘状況（正面より）



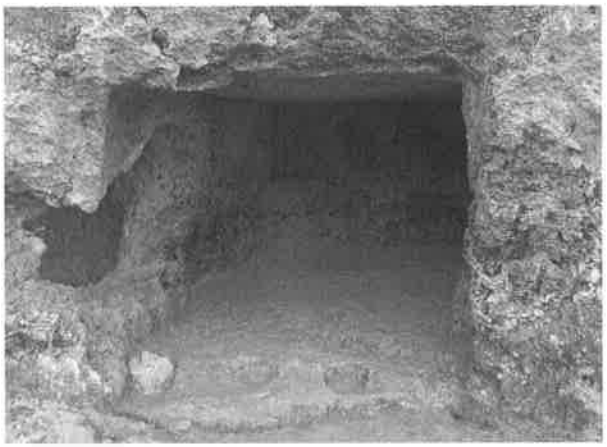
16 号墓 墓室奥壁完掘状況（左側面より）

2 号墓 遺構完掘状況

2 号墓 墓室入口の溝状の凹み検出状況

2 号墓 墓室内遺物検出状況

2 号墓 墓室内完掘状況



3 号墓 遺構完掘状況

3 号墓 墓室入口の 小穴完掘状況

3 号墓 墓室入口の溝状の凹み検出状況

3 号墓 墓室入口のホゾ穴検出状況

3 号墓 墓室内左側壁の完掘状況

4 号墓（奥）・5 号墓（手前）遺構検出状況

4 号墓 遺構検出状況

4 号墓 墓室内遺物出土状況

5 号墓 遺構検出状況

5 号墓 墓室内遺物出土状況

5 号墓 墓室入口の溝状の凹み検出状況

5 号墓 墓室内の完掘状況

6 号墓（中央）・7 号墓（手前）遺構検出状況

6 号墓 墓室内の遺構掘削作業状況

6 号墓 墓室奥壁の礫検出状況

6 号墓 墓室内の完掘状況

7 号墓 遺構完掘状況

7 号墓 墓室内蔵骨器出土状況（左側面より）

7 号墓 墓室内埋納遺構検出状況

8 号墓（中央）・9 号墓（手前）遺構検出状況

8 号墓 遺構検出状況

8 号墓 墓室内蔵骨器出土状況

8 号墓 墓室右側壁下の小穴検出状況

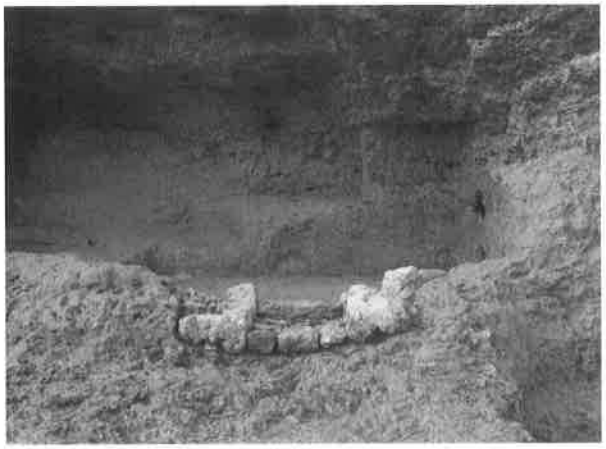
8 号墓 小穴内の焼骨検出状況

9 号墓 遺構検出状況

9 号墓 墓室内完掘状況

9 号墓 墓室内棚の蔵骨器検出状況

11 号墓（右）・12 号墓（中）・13 号墓（左）発掘調査状況



11 号墓 遺構検出状況

11 号墓 遺構検出作業状況

11 号墓 墓室内完掘状況

11 号墓 墓室内埋納遺構検出状況（中央：炭 右：ブタ頭骨）

11 号墓 墓室内埋納遺構検出状況（ブタ頭骨）

12 号墓 遺構検出状況

12 号墓 墓室内完掘状況

12 号墓墓室右側壁下の掘込遺構と蓋石検出状況

13 号墓 調査前の状況

13 号墓 遺構完掘状況

13 号墓 墓室内床面の造成状況

13 号墓 墓室内埋納遺構検出状況

14 号墓 遺構の調査前状況

14 号墓 墓室内蔵骨器検出状況

15 号墓 調査前の状況

15 号墓 遺構完掘状況

石製家形入母屋蔵骨器

陶製無頸甕形蔵骨器

陶製無頸甕形蔵骨器

陶製無頸甕形蔵骨器　口唇部で見られたサンゴ目

転用蔵骨器（沖縄産）

転用蔵骨器（沖縄産）口縁内部で見られたサンゴ目

1号墓出土遺物（1）

転用蔵骨器（沖縄産）

転用蔵骨器（沖縄産）　割れ面及び内部状況

転用蔵骨器（褐釉陶器）

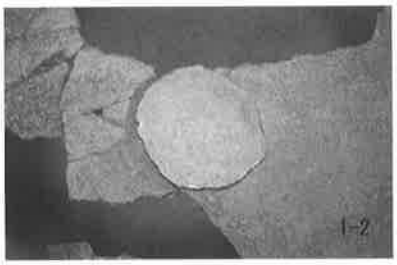
転用蔵骨器（褐釉陶器）　割れ面及び内部状況目

転用蔵骨器（褐釉陶器）

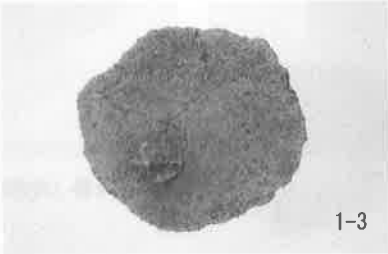
転用蔵骨器（褐釉陶器）　割れ面及び内部状況

1号墓出土遺物（2）

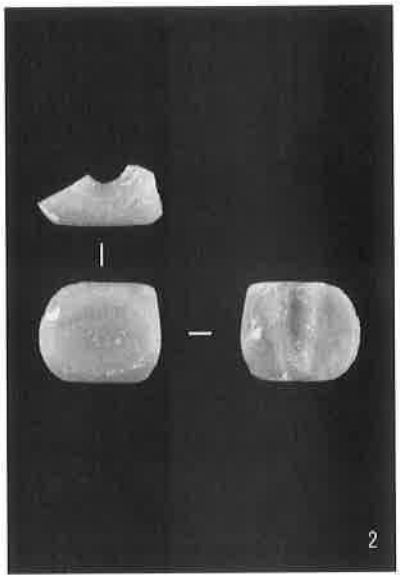
転用蔵骨器（宮古式土器）



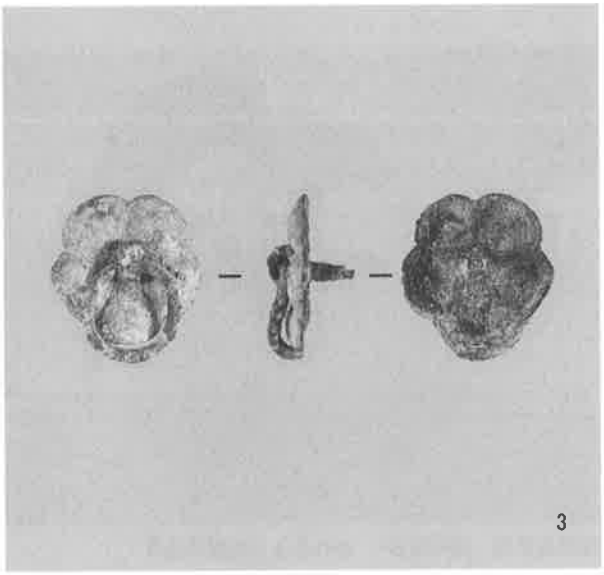
石灰製の蓋？



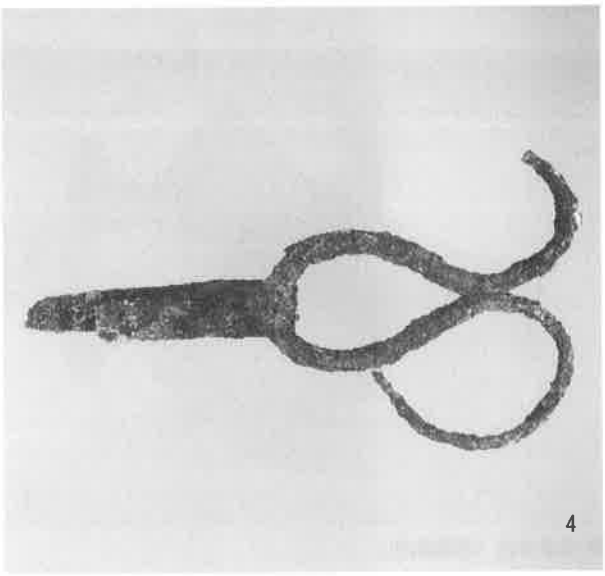
蓋？裏



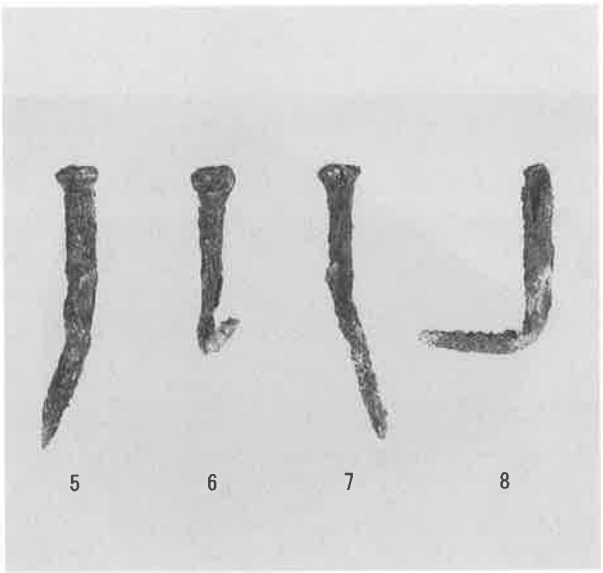
副葬品　ガラス玉



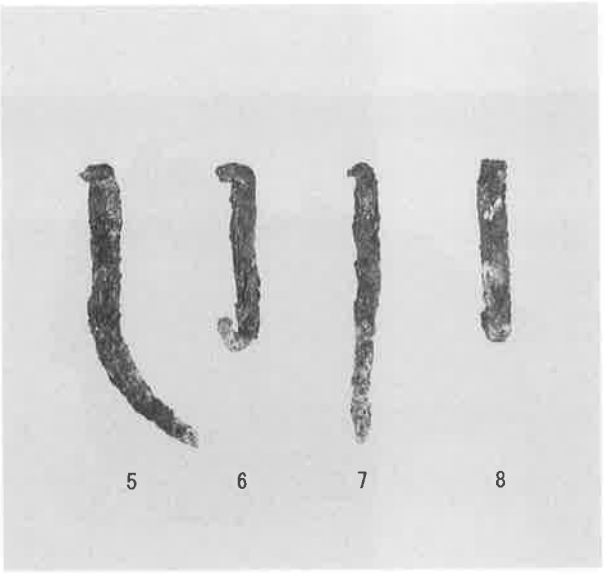
金属製品（飾り金具）



金属製品（鋏）

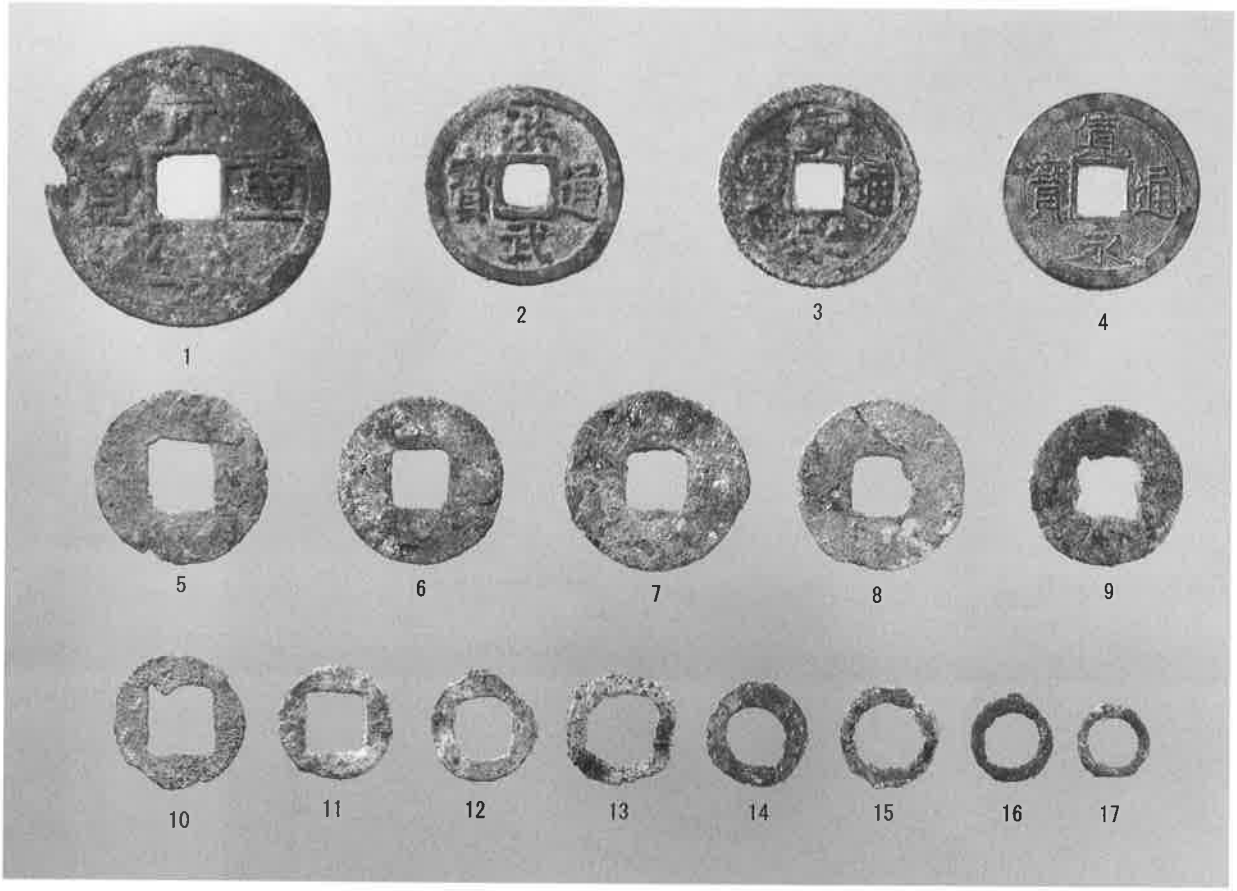


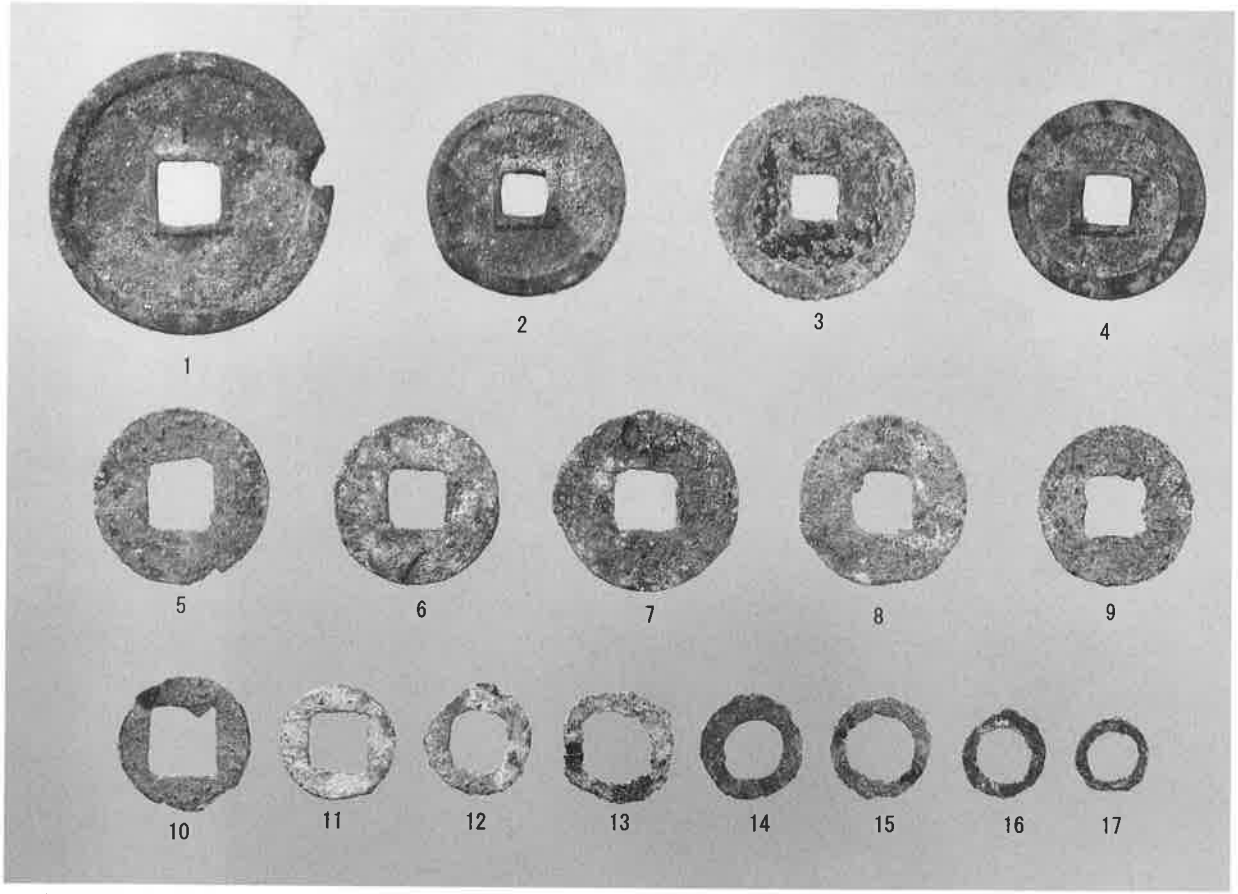
金属製品（釘）　正面



金属製品（釘）　側面

1号墓出土遺物（3）





1：崇寧重寶　2：洪武通寶　3：寛永通寶（古寛永）　4：寛永通寶（新寛永）　5～17：無文銭

1号墓出土遺物（4）銭貨　上段：表面　下段：裏面

陶製無頸甕形蔵骨器

陶製無頸甕形蔵骨器

陶製無頸甕形蔵骨器

陶製無頸甕形蔵骨器

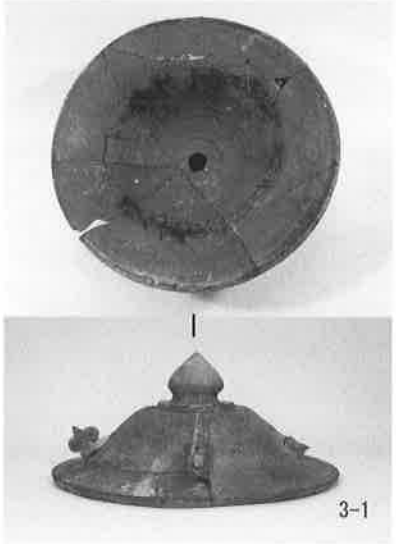
陶製無頸甕形蔵骨器

陶製無頸甕形蔵骨器

10号墓出土遺物（1）

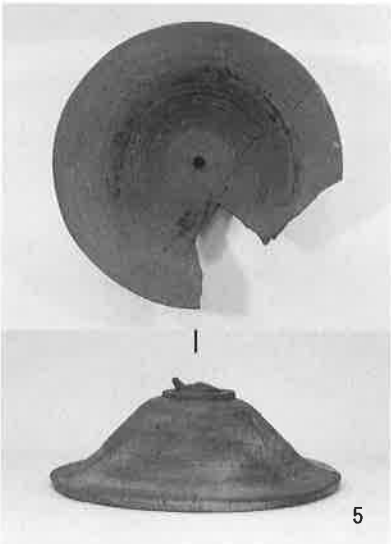
陶製無頸甕形蔵骨器

転用蔵骨器



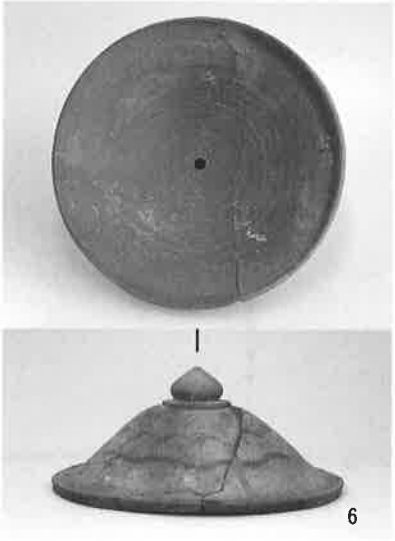
陶製無頸甕形蔵骨器　蓋

陶製無頸甕形蔵骨器　蓋

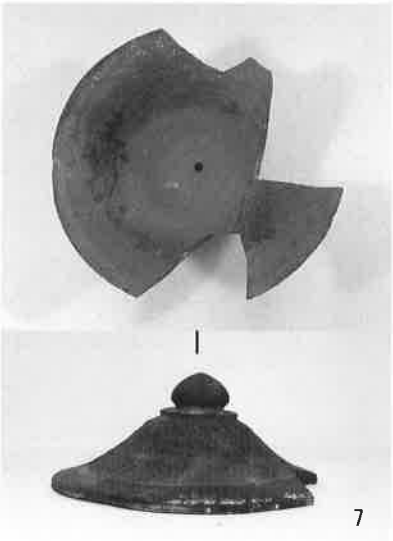


陶製無頸甕形蔵骨器　蓋

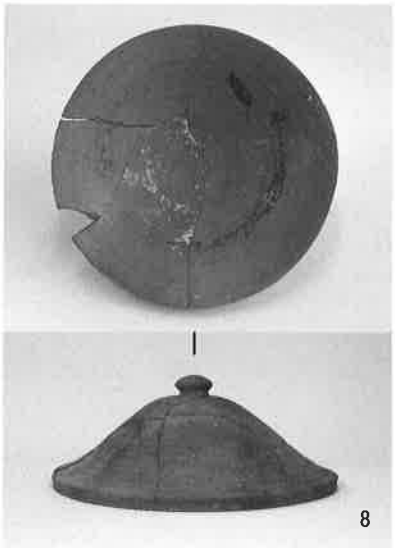
陶製無頸甕形蔵骨器　蓋　近景



陶製無頸甕形蔵骨器　蓋

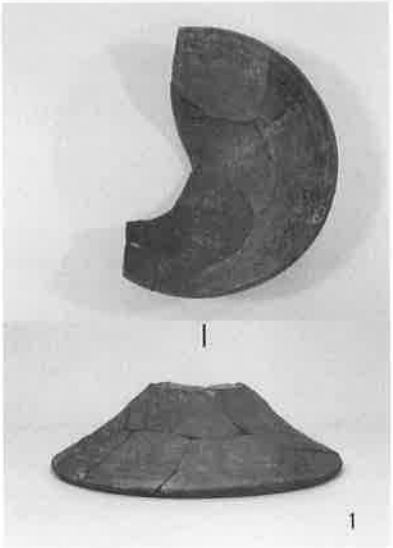


陶製無頸甕形蔵骨器　蓋



陶製無頸甕形蔵骨器　蓋

10 号墓出土遺物（2）

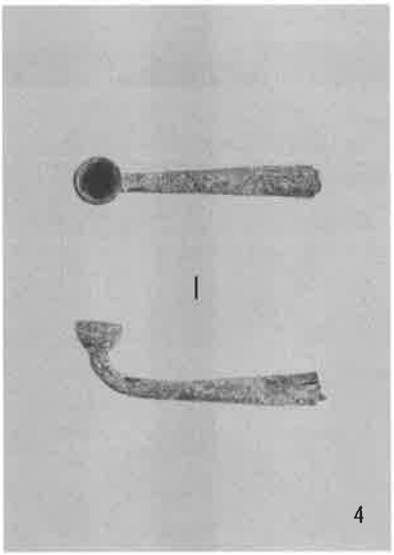


陶製無頸甕形蔵骨器　蓋

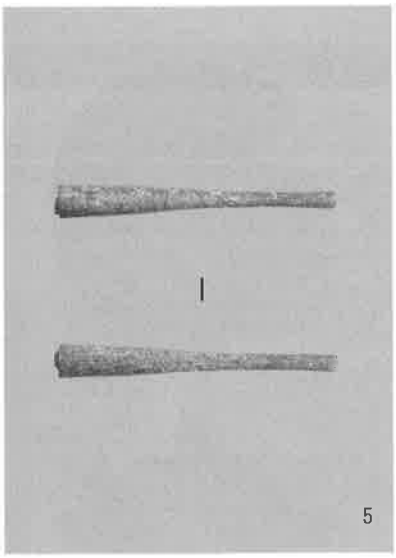
陶製有頸甕形蔵骨器　蓋

陶製無頸甕形蔵骨器　蓋　近景

沖縄産陶器（瓶）



煙管（雁首）



煙管（吸い口）

10 号墓出土遺物（3）

石製家形入母屋蔵骨器

石製家形入母屋蔵骨器　蓋（裏）

16 号墓出土遺物（1）

陶製無頸甕形蔵骨器

陶製無頸甕形蔵骨器

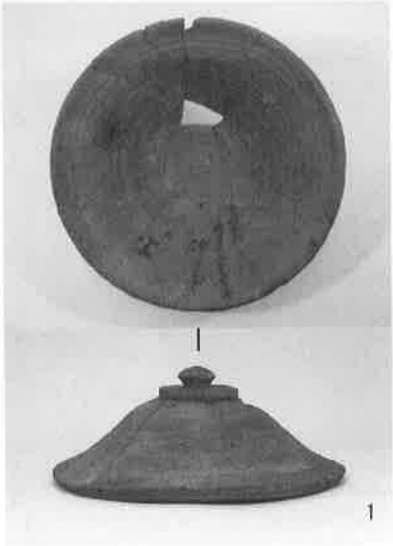
転用蔵骨器（沖縄産）

転用蔵骨器（沖縄産）

転用蔵骨器（宮古式土器）

転用蔵骨器（宮古式土器）

16 号墓出土遺物（2）

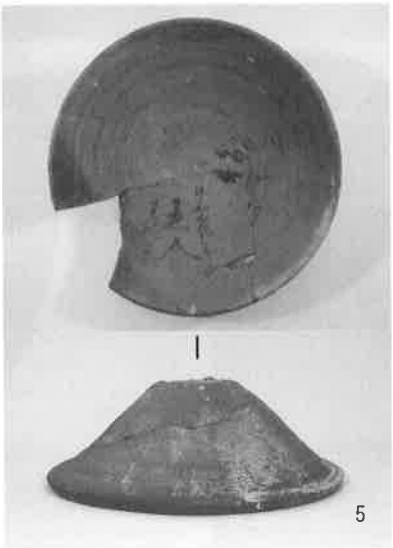


陶製無頸甕形蔵骨器　蓋

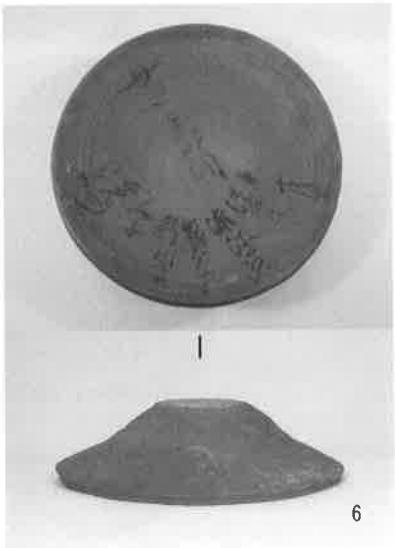
陶製無頸甕形蔵骨器　蓋

陶製無頸甕形蔵骨器　蓋

陶製無頸甕形蔵骨器　蓋

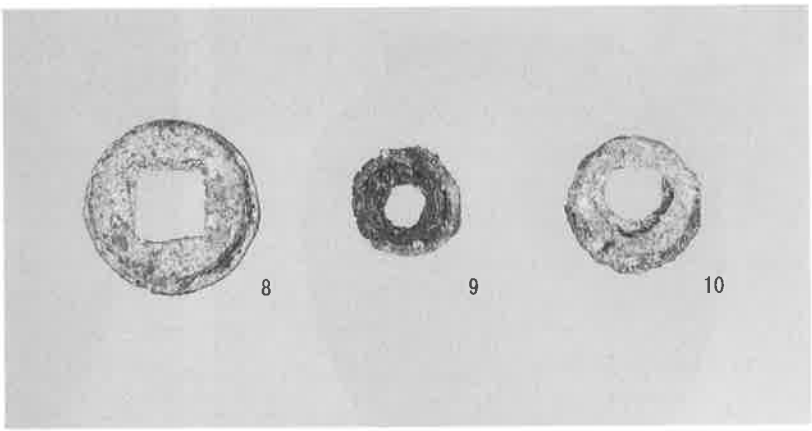


陶製無頸甕形蔵骨器　蓋



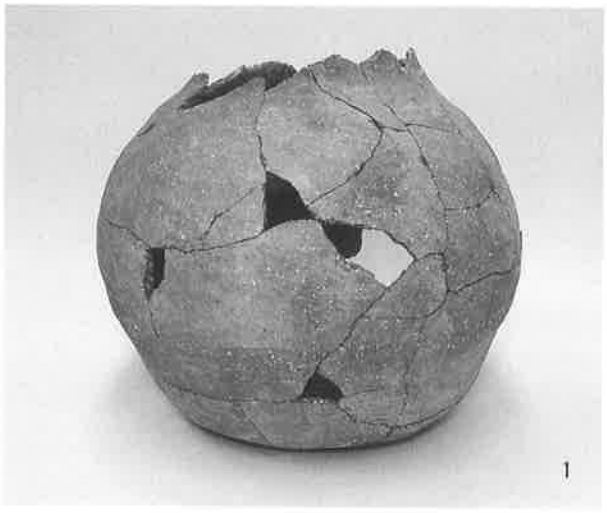
陶製無頸甕形蔵骨器　蓋

陶製有頸甕形蔵骨器　蓋



銭貨（8 ～ 10）

16 号墓出土遺物（3）

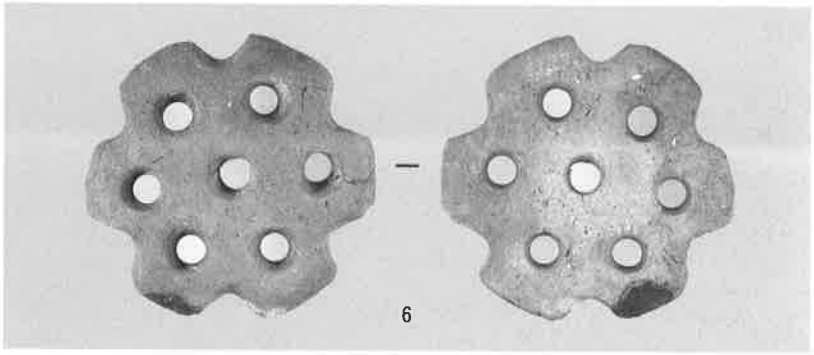


転用蔵骨器（パナリ焼）

沖縄産陶器（瓶）

沖縄産陶器（瓶）

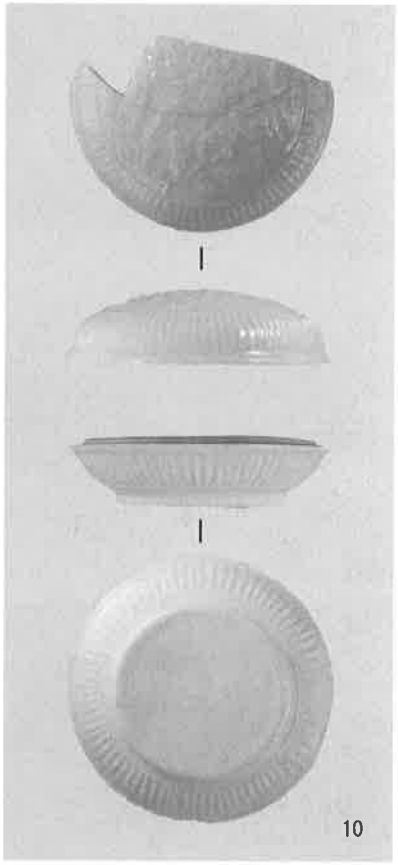
沖縄産陶器（瓶）



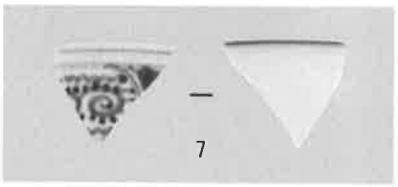
土製品

沖縄産陶器（徳利）

瑠璃釉



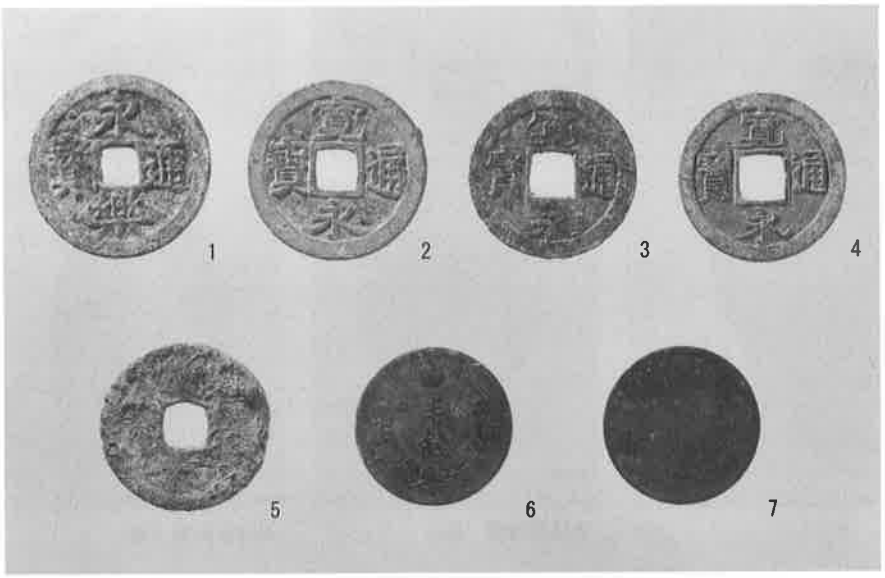
本土産磁器（合子）



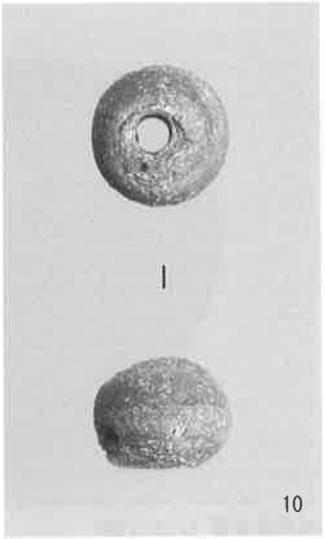
青花

本土産磁器（瓶）

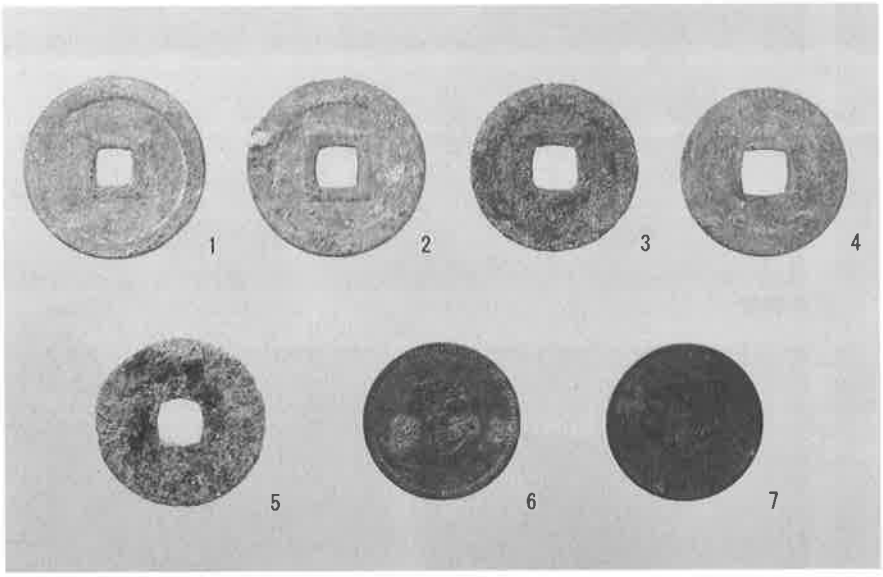
近現代磁器（碗）



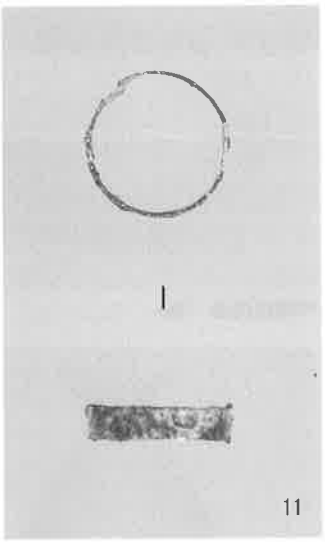
銭貨



ガラス玉

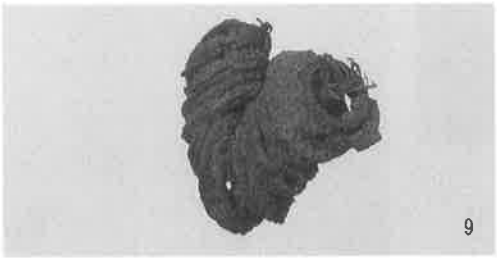


銭貨



金属製品：指輪

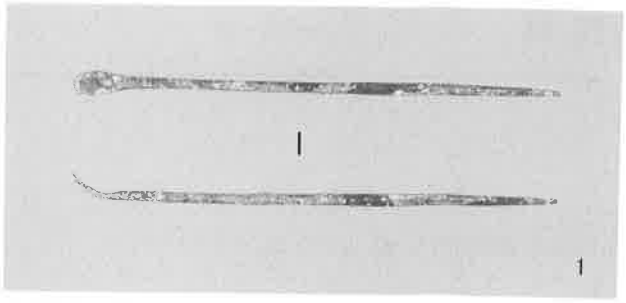
銭貨



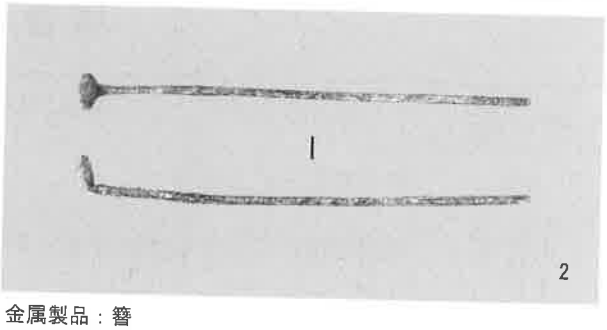
銭貨

煙管

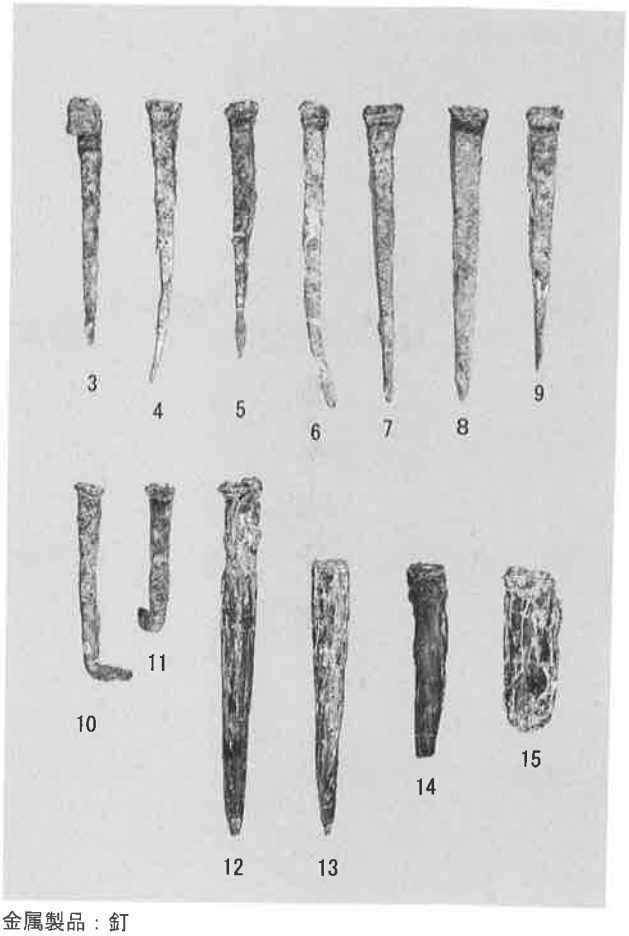
煙管



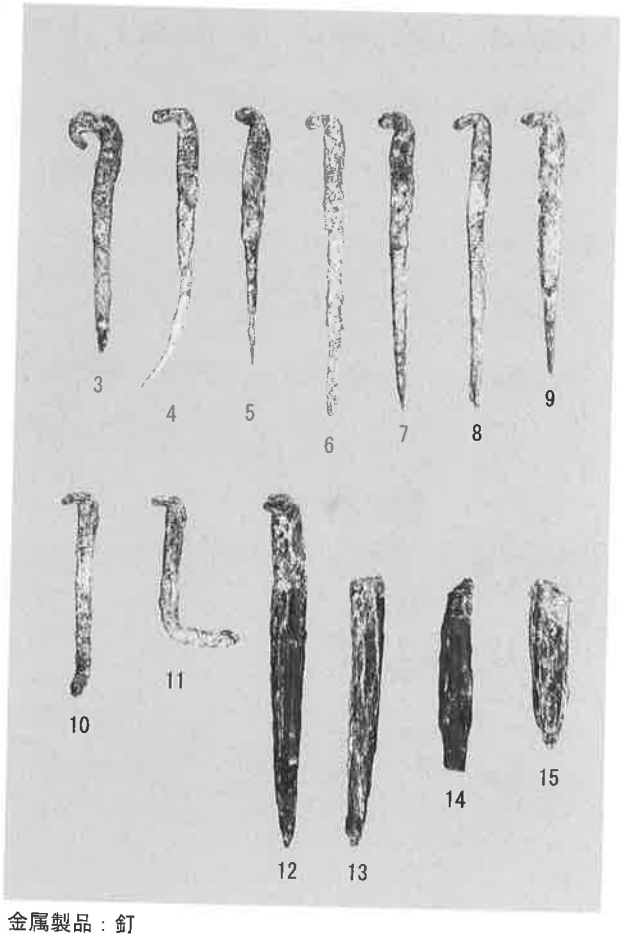
金属製品：簪



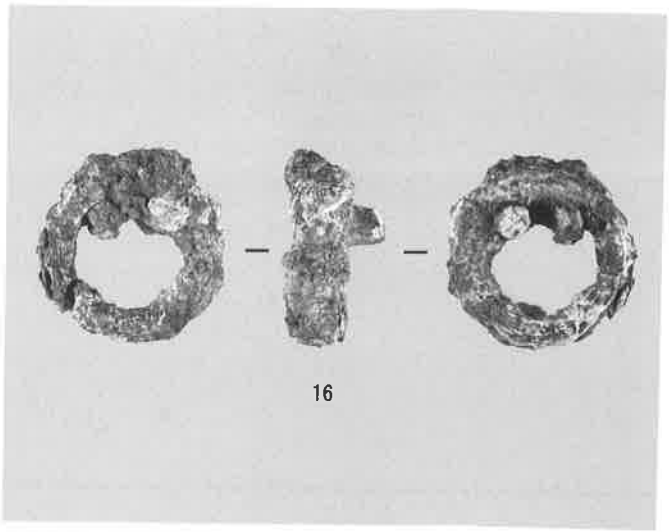
金属製品：簪



金属製品：釘



金属製品：釘



金属製品：用途不明品

ガラス製品

ガラス製品

報告書抄録

ふりがな	じっちゃくぐすくじょうばるこぼぐん
書名	勢理客城門原古墓群
副書名	沖縄食糧株式会社敷地内造成工事に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	浦添市文化財調査報告書
編著者名	渡久地政嗣　仲宗根久里子　菅原広史　玉榮飛道
編集機関	浦添市教育委員会
所在地	〒901-2501沖縄県浦添市安波茶一丁目１番１号　℡098-876-1234
発行年月日	２０１２年３月

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
じっちゃくぐすくじょうばる 勢理客城門原 こぼぐん 古墓群	おきなわけん 沖縄県 うらそえし 浦添市 じっちゃく 勢理客 ぐすくじょうばる 城門原	47208	—	26° 14′ 43″	127° 41′ 37″	平成22年12月1日 ～ 平成23年1月27日	2,100	駐車場造成

所収遺跡	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項
じっちゃくぐすくじょうばる 勢理客城門原 こぼぐん 古墓群	墓	近世～近代	墓	土器 外国産陶磁器 本土産陶磁器 沖縄産陶器 石製品 銭貨 玉類 金属製品	

浦添市文化財調査報告書
勢理客城門原古墓群
沖縄食糧株式会社敷地内造成工事に伴う発掘調査報告書
２０１２年３月発行
編集・発行　浦添市教育委員会
〒901-2501　沖縄県浦添市安波茶一丁目１番１号
TEL 098-876-1234　　FAX　098-878-1487
印刷・製本　株式会社　尚生堂